

---

# 緋眼戦記～ルビーアイズ～

上条 景

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

緋眼戦記〜ルビーアイズ〜

### 【Nコード】

N5641V

### 【作者名】

上条 景

### 【あらすじ】

この世界には伝説と呼ばれる逸話が数多くある。時代の節目節目にルビーアイと呼ばれる眼を持つ特殊な人種がいたことが記録されている。もちろんそれは言い伝えのレベルの話なのだが……。

この物語の舞台は、魔術が当たり前前に認知された世界。

先の戦争で人々は多くの犠牲で多くのことを学び、自発的に行動することになるが、中にはそれに対して相反する者も存在するようになった。

世界は世界政府という組織を立ち上げ、一応の平和を取り戻しつ

つあったが、時が経つにつれて世界の亀裂は広がっていった。

一つは世界政府に反する、反世界政府勢力。

一つは魔術全般を管理する、魔術協会・組合。

一つは身近にある問題を解決する、ハンターギルド協会。

一つは闇に蠢く、非公式な組織。

そんな数々の勢力が集まった世界に住んでいる主人公の大河祐樹は、ある日自宅の庭先で謎の少女と出会うことになる。その日から主人公、大河祐樹の人生は変わっていくのであった。

## 第一話 中等部編く出逢い

キリスト暦二〇〇八年。

六月二〇日、午前三時頃。

月明かりがあるが暗闇の残る深夜三時の町は静けさと露もやの臭いが印象的な夜だった。

そんな暗闇に包まれている町中に響く音があった。

音源を探ると暗闇の中を走っている者達がいたのだ。追われている者の息は荒く、走る足音も周囲に響き、背後に迫ってきている何者かに追い詰められようとしていた。追ってくる者は二人だというのは影でわかった。

その何者か達は空中を滑降したり、路地裏に逃げ込んだ者の後を追いかけていた。追いかけてられている側は、路地裏に身を潜めても空中から発見されてしまい、ほとんど休む暇もなく、イタチゴッコが続いていた。

「ちっ！」

いい加減追いかけてこにも飽き、苛立ってきた追われている側の者は、パンツのポケットから分厚い単語帳のようなものを取り出した。その後、親指の腹で扇子を開くように単語帳を開き、筆記体の英字が書かれた紙を歯で千切り、その紙を手で掴み背後の追っ手に向けて放り投げた。

「獄炎に包まれ灰燼かいじんと為せ！ 火柱ひば！」

掛け声と共に片手は人差し指と中指のみを立てた印のような仕草をして術を発動させた。背後では轟！ と物凄い爆炎が空高く火柱

となつて追つ手の一人を退けていた。その爆炎の音は凄まじいもので、深夜ということもあり、辺りの住人は何事かと窓を開けて外を見る。そんなことにも気にせず、追われていた者はまたすぐに走り出した。

「あれだけじゃ、もう一人の方は足止めには過ぎないわね。もう一つ用意しておく必要があるそうかも」

あれだけ激しい攻撃を仕掛けていた者の声は爽やかな声を持つ女性だった。

そして彼女の予想通り、彼女を狙っていた追っ手はまだ諦めていなかった。当然だ。相手は二人。もう一人の追っ手はしつこく付き纏ってくる。

「まったく、しつこいわね。しつこい男は嫌われるわよ！ ってか性別あつたっけか？」

一人突っ込みを入れていた彼女はアパートの屋上からジャンプをし、宙で体を反転し再び単語帳の中の一枚をその追っ手に向かつて再び投げた。

「轟け雷鳴！ 稲光！」  
いなびかり

彼女がそう叫んだ瞬間、激しい閃光と轟！ という凄まじい地響きが辺りを駆け巡った。

どうやら追っ手はその一撃で完全に撃退したようだった。

「まったく、しつこいつたらないわ・・・」

追っ手を完全に振り切った彼女は走り続けた疲労と能力の使いす

ぎで朦朧とする意識の中、とある民家へと逃げ込んだのだった。

同日、午前七時頃。

「あああああああー！！！」

突然の悲鳴にベッドで寝ていた大河祐樹たいがゆうきは何事だと驚くように目覚め、悲鳴のあった一階へと急いで駆け下りた。何があったんだろうと恐る恐る悲鳴の聞こえた台所を見に行くと冷蔵庫を開けたままうな垂れている姉の姿があった。暗いオーラを放っている姉に近くと妙な異臭が姉の周囲を漂っていた。まるで何かが腐っているようなそんな感じだ。

「何、どうしたの姉ちゃん。それに何、このくせえー臭いは」

うな垂れた姉はボソツと口にした。

「腐ってる。全部腐ってる。何で？ 何で停電なんてしてんのよ。ナマモノが全部全滅よお。それにアイスも・・・」

姉はまだうな垂れている。ウチはそんなに裕福な家庭ではない。稼ぎ頭の父は蒸発して行方不明。母も働きに出ていて家にいる時間はほとんどない。実質、祐樹は姉の麗華れいかと二人暮らしをしているの

だ。

「停電って、何時したんだよ」

「気付いてないの？ まだ停電中よ」

「え？ マジ？」

試しにテレビを点けようとするが全く反応がない。どうやら本当に電気が来ていないようだ。

「あ、じゃー電話はどうだ？ どっか繋がるかも」

確かに固定電話ならいくら停電していても必要な電力は電線から供給されているため、繋がるはずなのだが、実際受話器を手にしても何の反応もなかった。

「それもさつき調べたわよ。どうやらどっか近くの電線が切れちゃっているみたいね。というわけで、今日の朝食はなし！ いいわね。ああ、もつたいない」

麗華はもつたいなさそうに腐った食材をゴミ箱へと放り込んでいた。だが不幸中の幸いで、今日は丁度生ごみの収集の日だったので、袋の口を縛り捨てられる準備を完了していた。こういう手際の良さは両親のいない麗華にとっては長所の一つだった。

「うにあゝ、朝食なしかあ。こりゃー午前空腹で耐えられんだろうなあ」

そんなとき麗華が良いものを見つけた。

「お！ ほら、これ。携帯食」

麗華がそう言つと携帯食を放りなげて祐樹に渡す。

「これっぽっちじゃ、腹は膨れないよ」

「文句言わない。人間ときにはこういう窮地に立たされる場面が必ずあるのよ。それを乗り切つてこそ真の人間つてもものになるのよ」

麗華は力説する。まあーバカな弟にこんなことを言つても意味がないだろうと内心は思っていたが、こちらが思つていた以上に現状を把握してくれたのか、素直に携帯食を受け取つた。

「それじゃ、あたし今日看護学校の授業早いから早々に出かけるわね。ゴミ出しは私がやつとくから、ちゃんと戸締りして出かけてよね」

麗華も朝食用の携帯食を片手に急いで出かけて行つてしまった。

「なんだよ、ドタバタと」

ふと、壁掛けの時計を見る。

「今日はちよつと早めに起きたな。これなら遅刻もないだろう」

普段の祐樹は寝坊の常習犯なのだが、今日はいつもよりも一時間も早く目が覚めることができた。姉様様である。ゆつくり朝食を済ませるのもいいかとも思ったが、変に余裕を持つと結局遅刻する羽目になるというのは以前からの経験上よく理解していたので、少し早いが登校することに決めた。

家の中の鍵という鍵をチェックして全て閉まっていることを確認し、外へと出た。眩しい日差しが差し込む。昨日落雷があつたなん

て思えないほどの快晴だった。気分が良くなったところで家から出ようとしたところ、何だか人の気配を庭の方から感じた。

まさか泥棒？ こんな朝から？ いやいや、朝でも泥棒に入られたというケースは意外に多かったりする。登校には時間があったので恐る恐る中庭の方へと向かってみると、一人の少女が倒れていた。近寄ってみるとどうやら酔っ払いとは違い、全身に浅い傷を負っているようだった。

「ん、これはどーみても泥棒って感じじゃないよな。ってことは家出少女か？ 傷も負ってるみたいだし、誰かに追われでもしたのかねえ？」

だが、得体の知れない人物であることには違いはなかった。不用意に近づいてみても大丈夫なのだろうか？ しかし、傷を負っている少女をほったらかしにするのも気が引ける。そんな葛藤がありながらも、彼は少女を助けるという選択肢を選んだ。

見たところ傷の具合は大したことはなさそうだ。だが着ている衣装がなんだか妙な感じだった。ジーンズのパンツに巫女が着るような着物を上半身に身に纏っていた。それに容姿には幼さを感じるが、腰まである髪の毛の長さがその幼さを隠しているようだった。とりあえず自宅の中に連れて行き看病することにした。傷口に消毒液を垂らし、その上からガーゼ、包帯を巻いていく。

（一体何があつたんだろう？ 一応警察には連絡しといた方がいいんだよね？ この場合・・・）

そんなことを考えていると少女が薄っすらと目を覚ました。我に返った少女は直ぐ様、祐樹の傍を離れて警戒態勢を取る。しかし、傷が癒えていないため、動きがどこかぎこちがない状態だった。

「ほら、そんな傷で動くからそうなんだよ。気にしなくていいからゆっくり休んでいきなよ。丁度、家空けるところだったからさ」

そのときその少女は初めて体中に包帯が巻かれていることに気がついた。

「お前が私を助けたのか？」

「うん、そうだけど、余計なお世話だったかな？」

「そうか。ごめんなさい。てっきり追っ手に捕まったものとはばかり思っていたので。感謝します」

幼い容姿とは裏腹な言葉遣いに多少の違和感を感じた祐樹だったが、少女は特に気にする様子もなくそのまま外へと向かおうとしていた。

「ちょ、ちょっと待てよ。そんな体でどこ行こうっての？ それに追っ手って何？」

少女は振り返ると一言言った。

「君には関係のないことだよ。それに巻き込むわけにはいかない」

少女はそれ以上語ることなく玄関から外へ出ようとした。そのとき祐樹が質問した。

「治療してやったんだ、急ぐ理由は聞かねえーからあんなの名前だけでも聞いときたいんだがな？」

少女は振り返ると。

「それナンパのつもり？ ま、名前くらいいいか・・・土御門胡桃つちみかどくるみ貴方は？」

「大河祐樹」

「大河・・・。そう、覚えておくわ。祐樹君。それじゃ。あとコレ貰っていくわね」

少女の手にはさっきまで自分が持っていた携帯食があった。

「あつ、いつの間に！」

祐樹が携帯食を捕られたことに気付くと土御門胡桃はと玄関から外へと出て行ってしまった。と次の瞬間、何も障害物のない玄関で派手にすっころんだ。

「ふぎゃん！」

という声を出した少女は一瞬、場の空気に冷たさを感じたが何事もなかったかのようにその場を去っていった。

(もしかしてあの傷は自分でやったんじゃないだろうなあ)

後を追うべきなのだろうか？ そんなことを考えていたが、彼女にも彼女の事情があるのだろうと思いい、そのまま見送った。そして祐樹はすっかり学校のことを忘れていた。ようやく学校のことを思い出し、時計を良く見るとあと二〇分ほどの猶予しかない。

「うわっ、やっべえー！ 急がなきゃ！」

急いで駆け出す祐樹の後ろ姿を土御門胡桃は鼻血を拭きながら路地裏から見ていた。

大河祐樹が通っているのは『紋次学園中等部』で主に武術を主軸に置いている学校なのである。学校の名前にある『紋次』とはかつての最強といわれた剣客の名を擦もじって付けられたと言われている。全国にはこのような学校が幾つか存在しているが、設備がよく整っているのはここぐらいなものである。では何故このような学校が存在するのかと言えば、それは二つの大きな理由があった。

まずは戦争だ。

第一次世界大戦、第二次世界大戦という二度に渡って世界全土で行われた戦争は兵器だけでなく、人の武力も大きな戦力となっていた。個々人の力が世界の命運を左右するという事実がこのような世界を生み出したのだ。今となっては個人が武力を持つことが当たり前になりつつあるほど世界情勢は不安定になっている。

次に魔術だ。

魔術は古くから存在していた。誰が生み出したかすら分からないほど昔から。今もその認知度は高い。戦争にも魔術師が投入されるくらいメジャーな兵力だったのだ。そこから色々と派生して色々な武術が生まれ、応用され現在に至る。あまりにメジャーな存在になつてしまった魔術はその使用を制限するために、魔術協会・組合が築かれ厳しく使用を制限している。

また、魔術が制限されてしまったため、人々は剣術や柔術などの

武術を身に付けていく様に変化していった。今では、知能に才がない者は迷わず、武術を身に付けるようになった。武術こそが新たな社会のステータスとなっていたのである。そんな世界で大河祐樹も幼い頃から武術道場で体を鍛えていた経験を持っている。

紋次学園とはそういった戦闘のスペシャリストを生み出すためのカリキュラムを組んでいる。これだけでは、非常に危険な兵力が個人に集中してしまうため、こういった学校を築くためには、国からの承認を得なければならぬ。さらに国からの監査も年に四回もあつたりもする。常に情報を最新のものを提供する必要がある。

そんな『紋次学園中等部』の二年生である大河祐樹は、朝食用の携帯食を土御門胡桃という謎の少女に取られてしまい、空腹で力が出なくなってしまうていた。通りかかった近くにコンビニがあり、思わず財布の中に目をやる。残金五〇〇円：昼飯の分を考えるとここで朝食を買ってしまうと、どう考えてもお金に余裕がなくなってしまう。店内の食品を見ながら仕方なく諦め、俯いたままトコトコと歩き出す。

(あゝあ、腹減った)

育ち盛りの青年にとってはかなりの大ダメージだった。そんなとき前方に見覚えのある後ろ姿の男子がいた。すかさず祐樹は声をかける。

「おーい！ 一瀬<sup>いちせ</sup>。おはようさん」

一瀬と呼ばれた男子はこちらを振り返ると掛けていたメガネを掛け戻して挨拶をした。

「よっ、早いな今日は」

「だろお〜？ でも腹が減って死にそう・・・」

祐樹は一瀬にもたれかかった。彼等の制服はブレザーに赤いネクタイ、グレーのパンツというものだった。

「昨日の落雷の停電だろ？ 電線が切れたらしいから復旧にはまだ時間が掛かりそうだよな」

「まったくだよ。今まで俺達がどれだけ電気に頼ってきたかっのが改めて理解できたな。姉ちゃんも嘆いてたよ」

祐樹の親友である桐生一瀬<sup>きりゆう</sup>。この人物は祐樹が小学校からの幼馴染であり、弓術を主に使用する人物だ。実家はこの町の高台にある元寺院であり、そこでは弓術道場を開いているのだ。そのため一瀬は、弓術の名手なのである。

二人は登校の途中、信号機の前で止まった。今は警官が交通整理をしている。まだ電気は復旧していないようだ。祐樹の言っていた通り、人は電気に頼りすぎているのかもしれない。いざこっという状況に陥るとあまりにも秩序が乱れてしまうようだ。

そんな状況を見ていた一瀬が祐樹に質問した。

「昨日は落雷警報はなかったよな？ なんでこの辺りであんなデカイ落雷があつたんだろ？ 空は晴れてた気がするけど、不思議に思えないか？」

確かに言われてみればそうだ。昨日も今日のように天気の良い夜空だった。通り雨だったとしても雨が降った形跡もないし、そう考えると確かに不自然な気がした。

「でもま、俺らがそんなこと考えてもあんまり意味ないか」「そうだな」

祐樹はそうは言ったものの今朝の謎の少女について考えていた。あの傷、誰かに追われていたとか言ってたけど、まさか彼女がその落雷の原因を作り出した本人だったりするかもしれない。辻褄はまったく合わないというわけでもない。むしろしっくりくる。このことを一瀬に話そうかとも思ったが、何者かに追われているのである。ば、このことを一瀬に話せば、その事件に一瀬も巻き込むことになりかねない。祐樹はそう考え、言葉を飲み込んだ。そんなもの静かな祐樹に気付き、一瀬が質問してきた。

「なあ、そんなに腹減ってるのか？　いつも以上にしゃべりが少ないぞ？」

「あ、まあーそんなとこ」

「嘘だな、それ」

「へっ!？」

鋭い切り替えしに祐樹は思わず顔に出してしまった。さらに声が裏返ってもいた。

「まったく、解かりやすい性格してるよ、お前って」

「悪い」

祐樹は俯いたまま黙ってしまった。

「ま、話せない内容を無理に聞くななんて野暮なことはいらないよ。話せるときに話してくれればいいさ」

「ホントすまん、一瀬。実際のところ俺もまだよく解かってないんだ」

少しの間沈黙が続いた。

「気にしなさんな」

一瀬はそう言うと祐樹の肩に手をポンッと置いた。そんなとき後ろから甲高い声が聞こえてきた。

「おはよう、野郎共！ 今日は何か暗いぞ！ 早くも中弛みの二年生って奴か？」

祐樹と一瀬は同時に振り向くとボソツと口にした。

「何だ、麻耶<sup>まや</sup>か。折角の空気がぶち壊しだ」

祐樹は深いため息をついた。それにカチンと来たのが、祐樹の背中の中のと真ん中に掌底を食らわした。

突然の麻耶の攻撃に祐樹はワイヤーで体が引っ張られたような勢いで前方にすっ飛んでいってしまった。それを見た一瀬は思わず言葉を漏らした。

「いや、いくらなんでもそれはやりすぎだろ？ 麻耶・・・さん？」

ふん！ という鼻息で当然の報いよ！ というような態度を取っていた。

「い、痛え・・・」

祐樹は軽い交通事故にあったような状態で倒れていた。それでも祐樹は自分で立ち上がって汚れた制服のホコリをパタパタと払い落としていた。

「いきなり怒突くんだもんなあ。参っちゃうよ。この前俺に負けたのがそんなに不服か？」

麻耶は顔を真っ赤にして大きく叫んだ。

「あつたり前でしょ！ 小学校の頃はあたしの方が強かったのよ。なのに何でいきなり引き離されちゃうのよー！」

「成長期は女性の方が早いからな。俺らはこれから成長期だから当然と言えば当然だと思っけどな」

「ム〜！」

麻耶は物凄い形相で一瀬を睨んでいたのでこの話題はサラッと流すことにした。

祐樹を突き飛ばしたこの彼女は霧咲麻耶きりさきまといい、彼女もまた大河祐樹と桐生一瀬と同様の幼い頃からの幼馴染なのである。彼女の特徴は、肩まであるショートヘアの髪に、ヘアピンが印象的だ。また両腕には肘の上ところまであるアームカバーを身に付けている。『紋次学園』では正装として制服があるが、基本的にファッションについての校則は緩かったりする。

「ところで昨日の落雷の原因で何なんだろうな。雷雲なんてなかったと思っけど」

「確かにそうよね」

「もしかして魔術だったりして」

一瀬の今の一言に祐樹は再びふっと今朝の少女の姿が頭に浮かんだ。まさかなと思っただが、追っ手がいるということと、傷だらけだったことを考えると、誰かに対して攻撃を放ち、その一つが雷撃だったんじゃないんだろうか？ そんな考えを巡らせていた。

そんな黙り込んだ祐樹を見ていた麻耶は頭を傾げていた。

「ねえ？・・・ちよつと強く怒突きすぎたかな？」

「は？」

「ボーっとしてるから大丈夫かなって心配したんだよ」

祐樹は覗きこむ麻耶に手を上げて大丈夫だという意思表示をして立ち上がった。

「いきなり怒突いておいて何言ってるんだよ、お前は・・・まあ大丈夫だよ。本気で怒突かれたわけじゃないんだし、受身もちゃんと取ったしな」

「っていうか、無視するあんたが悪いんだからね！」

「いやいや、普通に無抵抗な人間を怒突くお前が悪いだろ」

祐樹は麻耶と楽しそうに話していたが、一瀬は完全にカヤの外だった。

(二人共・・・俺の存在忘れないでくれよ・・・)

そんなことを泣ながら一瀬は思いながら、三人は学校へと赴いた。

ある荒れ果てた町の路地裏。スラム街と呼んだ方が伝わりやすいだろうか。

そこでは、土御門胡桃を見失った部下達がボスのような男から仕打ちを受けていた。

「使えねえー部下を持つとボスって役割は苦勞するよなあ。ええ、そう思わねえか？」

ボスと名乗った男は部下を足で蹴ったり踏みつけたりして楽しんでいる。部下からは呻き声と「もう一度チャンスをご覧ください」という言葉が何度も繰り返して発している。

ボスは部下の腹を勢いよく蹴った。

「がはっ！」

部下の口からは大量の吐血があった。それを見ながらボスの男は笑みを浮かべていた。

「はあ、飽きたな。いいだろう。もう一度だけチャンスをくれてやるよ。但し、今度しくじったら、わかってんな？」

「は、はい」

散々痛めつけられた部下はフラフラとその場を後にした。一方ボスの男は、汚れの付いたソファに座り、血のついた革靴を布で拭き取っていた。

「タカ、山ノ井」

「はい」

呼ばれた二人はボスの男の前に立ち並んだ。

「お前達にも奴の後を追ってもらおう。使えないと思ったら殺して構わん。後の仕事はお前達が引き継げ、任せる」

「了解しました」

そう言うと二人は直ぐ様、その場を後にした。

ボスの男の側近である者がボスの男に耳打ちをした。

「宜しいのですか？ あの方々に任せてしまつて」

不気味な笑みを浮かべ小さな声でボスは言う。

「替えはいくらでもいる。妖術師である俺なら途中邪魔さえ入らなければ、事は上手く進むだろう」

自信過剰とも思えるような発言に側近の者は「失礼しました」と言つて下がつた。

(そうさ、この最強の妖術師、白堂刹那の名の下に全ての者が跪くことになるだろう。それにはまず、奴の力が必要になる。なんとしても手に入れてみせるぞ。土御門胡桃の力を・・・)

紋次学園中等部。現在は昼休みに入っている。

中等部の校舎では祐樹、一瀬、麻耶の三人が購買部で買い物をしたばかりで教室に向かっている最中だつた。祐樹は廊下の天井に取り付いている蛍光灯が光っているのを見てようやく電気が復旧したのだと気がついた。

「もうそろそろ梅雨入りの時期だな」

一瀬のその一言に祐樹は天井の蛍光灯から窓の外の空へと視線を移していた。

「そうね、梅雨ってジメジメしてて嫌になっちゃう」

祐樹は麻耶の言葉には反応せず、今朝自宅前で会った少女のことを考えていた。幼い容姿にしっかりと引き締まった筋肉。あれは普段から相当な鍛え方をしていないとできないものだ。追っ手から逃げているという点から考えても少女も何らかの武闘系の使い手なのだろうと推察していた。

だがそれにしては、あまりにもドジな一面もあるんだなあと今朝の少女のすっころびを思い出していた。

「何か祐樹が変な顔してるよ、一瀬君。何なのコレ？」

麻耶が祐樹の表情を見て気味悪がっていた。それに気付いた一瀬は麻耶に事の真相を話す。

「実はさ、今朝素敵で綺麗な女性と運命的な出逢いをしてしまったみたいだな。それを思い出してあれこれ妄想してこんな変な顔を・

「・  
」  
「違っつて!」

祐樹は直ぐ様一瀬の発言を撤回させた。そして焦った祐樹は、何故一瀬に少女のことを知られてしまったのか？俺はどこかでへましたか？などと一瞬の内に考えを巡らせていた。

「っっていうか、何だよ。綺麗な女性って。そんな出逢いが一瀬に出会う前の僅か数分の間にあるかっての!」

へまはしていない。そう確信した祐樹は堂々とした態度で否定した。

「何マジになつて言つてんのよ。やっぱり何か変よ？」

「俺も普通に有り得ないことを言つただけなんだが……。まさかこの展開は、そのまさかなのでは！」

不審がる麻耶に、先ほどは野暮なことは聞かないと言つたはずの一瀬が興味を持ち始めたのか、一転して真相を追究してくる形になつていた。

「なんだよもう。何も無いつての！ 今朝の落雷でお前等の頭もどーになつちまつたんじゃねえーの？」

祐樹は必死に粘つていた。元々祐樹は、嘘をつくのが苦手なのだからもちろん黙つていると言われれば話さないし、口の堅い方ではある。しかし彼自身、嘘が下手で他人にすぐにバレてしまうのである。特に、長年の友人である一瀬と麻耶のその読みは正確なものなのである。

「ホントに当たっちゃったみたいね、凄い一瀬君」

「まさかのまさかとは……。俺自身も驚きだよ。で、どんな人なんだ？」

（野暮なことは聞かねえーつて言ったのに一瀬の野郎！）

祐樹はもう仕方ないと考え、今朝あつた出来事を簡単に説明した。最初に反応したのは一瀬だった。

「へえ、追われて怪我をね。確かに怪しい臭いがプンプンするな。絶対に関わらない方が身のためだな。変な正義感出して助け舟出す

なよ」

「ホントにもうトラブルメーカーなんだから」

「二人してそんなに攻めなくてもいいだろ。ただ傷の手当てしただけなんだから」

祐樹は正義感が強い。強いというよりは後先考えずに突き進む猪突猛進な性格なのである。そんなこともあり一瀬や麻耶は幼い頃から色々と迷惑を被ることが多くあった。もちろん祐樹自身もその性格は自覚しているし、それを制御しようと最近ではメンタルトレーニングを行なっているなど、修行は欠かせない。

そんな祐樹でも、やはり幼馴染の二人は心配してしまうのだった。教室に戻って買ってきたパンなどを食べているときも、先ほどの少女についての話題が続いていた。

「追われてたってまさか犯罪者じゃないだろうな？」

「さあ、そこまでは知らないよ」

「おま、ホントに物事をあまり考えない奴だよな？」

「そうかあ？」

「そうよ！　かわいいからって傷の手当てあげたり、拳句の果てにはナンパまでするなんて信じられない！」

どうやら麻耶は傷の手当よりもその少女をナンパしたことが許せないようだ。祐樹はナンパという言葉にちょっと疑問を感じ、反論した。

「ナンパってのとはちょっと違うって。なんか自然と言葉が出ちゃったんだよ。変な意味もなくな」

「ふ〜ん、それこそ信じられないわ！」

ふて腐れている麻耶は紙パックの飲み物を一気に飲み干した。そ

のまま麻耶はその場から離れ何処かへ行ってしまった。

「あゝあ、機嫌悪いぞ、ありゃー！。…で、気付いてるか？」

一瀬の顔が急に真剣な表情に変わった。

「ああ、見られてるな。一瀬の丁度背後の後方約一キロ地点辺りってところだな」

教室の窓から約一キロ離れた地点に何者かがこちらを監視していることを祐樹・一瀬は感じていた。もちろん麻耶も気付いていたはずだ。機嫌が悪かったのは恐らくそのせいもあるのだろう。

「お前、思いつきり巻き込まれてんじゃないよ。どーする訳？」

祐樹は監視者にバレないように笑みを浮かべ。

「ちようどいい。最近体が鈍っていたところだし。どんな奴か知らんけど、敵対してくるなら相手になってやるさ」

一瀬は呆れた調子で言う。

「お前のそういうところが危なっかしいんだよ。どうせだから今日と一緒に帰るぞ。何かあるかわからないんだからな。嫌だとは言わせないよ」

祐樹は深い溜め息をついて。

「わかったよ。また迷惑かけてすまん」

「いいよ。いい加減もう慣れた」

そんなとき麻耶が戻ってきた。柱の陰に隠れて祐樹達に質問する。

「まだ見られてるわね。そんなに執念深い連中なのかしら。これはまた面倒なことに巻き込まれたようね。それはでもあたし達も同じか」

「今日は一緒に帰った方が安全かもな。とりあえず一人にならないことが重要なことだな」

そんなこともあり、下校時間には祐樹と一瀬と麻耶の三人で帰宅することにした。今のところ不審な動きはない。

「…なんだ、思っていたより拍子抜けだな。警戒してた俺らがバカみたいだな」

相手のそんな気の緩みを察したのか、祐樹の背後に漆黒の刺客が現れ、祐樹に向かって小刀を突き出してきた。だが、突き出した小刀は祐樹へは届かず、軽やかな動きでその刺客をかわす祐樹は小刀を持って腕を掴んでそのまま一本背負いを食らわせた。

祐樹が言っていた拍子抜けというのは、刺客が潜んでいないからという意味ではなく、潜んでいた刺客の場所が明確に判断できたからだ。本人達は隠れているつもりでも、祐樹の目の前ではそれは、隠れているの内に入らないということだった。だから祐樹はわざと相手が襲ってきやすいように隙を作ったのだ。そして相手はまんまとその罠にハマったというわけだ。

「あと四人いるだろ？ 全員相手してやってもいいが、無駄な戦いは好みじゃない。こいつを連れてさっさとこの場から消えろ！ できなきゃ徹底的にやってやる！」

「それ、矛盾してるぞ……。」

一瀬がさりげなく突っ込みをいれると、隠れていた覆面の四人組が現れ、気を失った刺客を背負い祐樹の睨みから逃げるようにしてその場から去っていった。

「あれだけじゃ終わらないだろうな」

「だぶんな」

一瀬の方は本来、近距離戦闘は得意とはしていない。一応迎撃の準備をしていたが、ここ最近強さを増してきている祐樹にとって、先ほどの刺客はまったく相手にならなかった。向こうも中学生が相手であるということ意識して油断していたとも考えられるが。今後は祐樹がターゲットになる可能性も捨てきれない。

そんなとき路地の中から気配を絶っていた今朝の少女が現れた。

「あんたは、今朝の土御門胡桃ちゃん？」

つい名前を口にしてしまった祐樹は急いで口元を隠した。

「ちゃんって……。まあもついいのよ。結果的に十分あなた達を巻き込んでしまったわけだしね。ホントにごめんなさい」

胡桃は深々と頭を下げた。そんな姿を見せられた一同はどうしても責める気持ちにはなれなかった。とりあえず事情だけでも聞いてみようということになり、祐樹の自宅へと向かうことにした。

「って、何で俺んちになるんだよ！」

そんなことは置いといて、一同は一番近いという理由で祐樹の自宅へとやってきた。

家には誰もいなく、夕暮れの静けさに包まれていた。

「んじゃ、リビングで話しましょうか。座って待っててくださいな」

祐樹はそう言うと冷蔵庫の方へ向かって歩いて行った。

一方、一瀬と麻耶、そして謎の少女、土御門胡桃は対面する形で座った。冷蔵庫から飲み物を持ってきた祐樹は必然と胡桃の隣に座るような形になった。祐樹が席に座ると対面には一瀬と麻耶、そして隣には胡桃がいた。

（何だ、この光景・・・）

妙な雰囲気にも包まれているリビングに祐樹は自宅ながら変な緊張感を感じていた。

「で、どうということなんですか？ 貴方は何者？ それにさっきの奴等は何者なの？」

麻耶が多少半ギレ気味に胡桃に突っかかる。

「麻耶さ、少し落ち着け」

興奮した馬を宥めるように一瀬が二人の間に入った。そのまま一瀬が質問を続けた。

「まず貴方のことについて教えてもらえますか？」

緊迫した空気の中、胡桃は静かに口を開いた。

「改めて言うわね。私の名前は土御門胡桃。所属は反世界政府勢力

の陰陽師よ」

「『反世界政府勢力の陰陽師？』」

胡桃以外の三人は当然の如く驚いた。

反世界政府勢力。

反世界政府勢力とは、世界政府に相反する勢力組織の総称である。一方、世界政府とは、その名の通り、世界の政府を統一する組織のことである。以前の戦争で世界中では魔術や武術による衝突が世界各地で数え切れない程あった。それ故、世界の各地であまりにも政府の力が不安定になってしまい、治安の悪化が進み、このままでは世界の秩序が完全に乱れてしまうと考えた人々が築き上げたのが世界政府なのである。

そしてその世界政府の制裁や決定に納得のいかない人々が集まった勢力が、反世界政府勢力なのである。胡桃はその反世界政府勢力の一員だということなのだ。また、反世界政府勢力という存在は、世間ではかなり認知されてはいるのだが、世間的には一つの組織に所属しているという存在なのであり、世界政府に反抗的な思想の持っている組織だからと言っても犯罪組織扱いされるわけでもない。世界政府の提唱している法律には表現の自由などもあり、それとなく自由に対する誓約は小さくなっているのである。

また、この世界にはハンターギルド協会という組織も存在しており、小規模の抗争や様々な依頼を請け負うギルドが世界各地に点在している。

「私は、反世界政府勢力の中でも唯一の陰陽師なのよ。この陰陽師の力を奴等が狙っているってわけ」

「陰陽師の力を狙ってる？」

一瀬は微かな疑問を抱いた。元寺院の息子ならば陰陽師について聞いたことがあるのだろう。何か不自然さを感じたようだ。

「ええ、私は陰陽師の中でも特質で、安倍清明あへのせいめいの力を受け継ぐ人間なのよ」

「！」

一瀬は息を呑むように驚いていた。そんな様子を見ていた麻耶と祐樹は完全にカヤの外にされていた。

「あのさ、一瀬。俺らにもわかりやすく説明してくれよ。お前だけのリアクションじゃ、イマイチ伝わらん」

うんうんと首を縦に振る麻耶は一瀬に説明を要求した。

「俺も詳しいことまでは知らない。ただ、安倍清明って言えば有名な陰陽師ってのはお前等でも知ってるだろ？ だけど安倍清明にはもう一つ噂があるんだよ」

「「噂？」」

一瀬の言葉に祐樹と麻耶は口を揃えて反応した。その質問に答えたのは胡桃だった。

「その噂ってというのは、安倍清明の母親は葛葉明神くわはのあきみことの化身である白狐という妖魔だったという噂よ。けどこの噂は古い古文書の中に確かに記されていたわ。事実だと思ってもらっても間違いはないわ」  
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

一同は沈黙していた。あの有名な陰陽師が妖魔の子だったなんてという驚き、その思いが皆の頭の中を駆け巡っている。妖魔、そん

なものがこの世に存在していたのかという事実にも驚愕していた。だがそれよりも、その安倍清明の力を受け継ぐ胡桃が何故狙われているのか。それについてはまだわからない。

「それで、どうして貴方は狙われているのですか？ 狙われている相手に心当たりはあるんですか？」

祐樹は質問する気配がなかったので、一瀬が代わりに質問した。胡桃は答える。

「まずは狙われている相手を説明した方がわかりやすいかな。狙ってきているのは、生物化学研究所所属『ヴァイラス』の実行部隊の妖術師よ。今は別行動を取っているようだけど。さっき貴方達を襲撃したのはその部下だけだね」

胡桃の口から出た、『生物化学研究所所属の実行部隊』という言葉葉出たことに麻耶は驚いていた。そんな麻耶のその表情を読み取ってか胡桃が質問してきた。

「あら、何か変なことでも言ったかしら？」

「あ、いえ。以前にも聞いたことのある単語が出てきたものですか」  
「ら」

麻耶はそう言つと顔を下げてしまった。そんな姿を見た祐樹と一瀬はその話から別の話を切り出した。

「その妖術師が貴方を狙う理由というのはどういふことなんですか？」

胡桃は重い口を開いた。

「貴方達は妖術師ってどういうものか知ってる？」

「いや、詳しくは知らないな。麻耶は？」

「あたしもその辺りの知識はね。ここは一瀬君だと思っただけ、どう？」

一瀬は少し俯き加減に考えながらそれらしい答えを言ってみた。

「俺もよく知らないんだけど、名前くらいなら聞いたことあるよ。

何でも妖魔の力を操れるとかって話だったと思うけど」

「まあ、半分正解ってところかな。確かに妖魔の力を操ることができるわ。あと、妖魔自体をも操れることもできるのよ。さつき貴方達を襲撃したのは、人間じゃなくて彼に付き従っている妖魔だったってわけ」

祐樹は記憶を巡らす。確かにそう言われれば人間にしてはちょっと頑丈だったような気がするが、過去の記憶なんて曖昧なものだ。

「それで重要なところ。何で私が狙われているのか。これは陰陽師としての安倍家の力を妖術師が狙っているのよ。理由は、元々安倍清明とは妖魔から生まれた子。つまり妖術師は私を取り込むことで妖術師の力の限界値を底上げしようとしているのよ。いわゆる最強の力が手に入るってやつね。性格からして組織を裏切るつもりなんでしょうけどね」

飲み物のコップに水滴が付き始め、滴り落ちる。話を始めて幾らか時間が経過した。

「で、これからどうするんですか？　ただ逃げ回っていても埒が飽かないでしょう？」

「一瀬君の言う通り。このままでは消耗戦になるだけ。こちらから何らかの手段を打って出ないといけないわね」

胡桃はそう言うと考え込んだ。そんなとき祐樹の姉である麗華が帰ってきた。

「あれ？ やつぱりお客さんか。玄関に靴がいつぱい置いてあったからそうだとは思ってたけど、一瀬君に麻耶ちゃんにそれと・・・そちらの方はどちら？」

「あ、お邪魔しております。私、土御門胡桃と申しまして祐樹君とは・・・」

「恋人同士です」

すかさず一瀬が無理やりなハツタリをかました。

「・・・はあ？」「」

祐樹・麻耶・胡桃の三人は一斉に全否定をした。それを見た麗華は面白そうに笑い。

「そうそう。こんなにかわいい子が彼女なんて祐樹にはもったいないわね。どんな手を使ったのよ？」

麗華は興味津々に祐樹に肘で突いて聞いてくる。

「庭先で倒れていたところを丁寧に介抱したら幸いですよ」

「一瀬、てめえ！」

「嘘？ ホントなの？」

「嘘は言っていないだろ？」

「だからってここで言うことじゃないだろ？」

「本当なんだから仕方ないだろ。そろそろ腹を括れよ」

完全に取り残されていた麻耶と胡桃。双方とも話しが進まないといった感じで溜め息をついていた。それに気がついた麻耶と胡桃はお互いに息が合うということを認識してか、笑顔で双方が対応していた。

「うつつ、無実だ。俺は無実なんだあ」

テーブルに顔を伏せて泣き真似をしている祐樹。それを見破っている一瀬。双方ともお互いの出方は完全にわかっていている分そのやりとりは長く続いた。

スラム街のような町の中で地下に伸びる階段がそこにはあった。

まるでそこは異世界への入り口のような嫌な汗が出るような雰囲気醸し出す奇妙な場所だった。

そんな場所を平然と下つていき、その先にある扉を開け中に入っていく人影があった。

「誰だ？」

闇の中から誰かの声が聞こえた。

「ワタシですよ、刹那さん」

扉から入ってきた人影はそう答えた。

「何だ、お前か悪鬼<sup>あくま</sup>。俺は今、精神集中で忙しいんだ。用がないな

ら下がれ」

悪鬼と呼ばれた者は暗闇の中で思わず鼻で笑った。

「ワタシだって用がないならこんな辺鄙へんぴなところには来ないですよ。報告があつて来ました」

「何だ？」

「貴方の部下、正確にはタカさんと山ノ井さんの部下が勝手に一般人を襲撃したらしいですよ。ま、あの女に関わりがあつたからって話ですが・・・」

「で、どうなつた？」

「恥ずかしいことにその一般人に一撃でやられ、のこのこと帰ってきましたよ。流石のタカさんと山ノ井さんも我慢ならなかつたのでしよう。さつさと始末してしまいましたよ。どうするんです？ これ以上小物の妖魔が減つては色々とお困りになるんじゃないですか？」

白堂刹那は暗闇の中で立ち上がり、悪鬼に近づいた。

「問題ない。お前がいれば小物の妖魔くらいいくら減つても全体戦力は大きく下がらねえよ。余計な心配すんな。お前の悪い癖だ」

悪鬼はニヤリと笑みを浮かべて。

「心配はしていませんよ。ただこれ以上、妖魔の品格を落とすのはいかがかということですよ。ワタシとしては深く傷つきますよ」

近くのテーブルに置いてあつたペットボトルを手にとつた刹那は一口ゴクゴクと水を飲み一言言つた。

「妖魔のプライドか。以後気をつけよう」

「ご理解頂いて恐縮です。では、お邪魔して申し訳ありませんでした。失礼します」

「悪鬼！」

深々と頭を下げ、その場で一八〇度振り返り扉を開け、外に出ようとしたところで刹那から声を掛けられた。

「何でしょう？」

ドアノブを持ったまま頭だけ刹那の方へ振り返る。

「てめえーは俺の組織のナンバー二だ。それは変わらねえ。よく覚えとけ」

「？・・・はい、かしこまりました」

笑みを浮かべ、悪鬼は扉から出て行った。

## 第一話 中等部編く陰陽師vs妖術師く

一瀬と麻耶、そして胡桃は、今夜は祐樹の家に泊まることになった。このことについて反対する者はいなかった。実際に祐樹が狙われ、その傍に一瀬と麻耶がいたこと。そして二度にわたって胡桃が訪れたこの大河邸は完全に相手にとって標的の的になっているだろうと考えたからだ。

だが裏を返せば、ここにいれば向こうから仕掛けてくる可能性は十分に高い。胡桃が言うには、妖魔とは力は強いが知性が多少欠けるという特徴があるそう。そのため、胡桃が通った足取りを辿ってやってくるだろうと予想していたのだ。

こんな話をして祐樹の姉、麗華の反応は非常に落ち着いたものだった。かくいう麗華もまた祐樹と同じく拳法を扱えるのだった。今となつては看護学校に通つてはいるものの、スタイルの維持の為、日々のトレーニングは欠かしていないという強者だ。格闘のセンスも昔からいいものを持っていると当時通っていた武術道場の師範代から言われたこともあったのだ。

そういう事情があり、彼女も皆を匿うことを賛成したのである。また祐樹とは七歳も歳が離れているため、祐樹を自分の子供のように可愛がっている麗華は、一瀬と麻耶も祐樹と同じような視点で見ているので、そのまま自宅に帰すのはなんだか心配だったというものもあった。

「そつえば、胡桃ちゃんはいくつなの？」

麗華は料理の準備をしながら突発的に浮かんだ疑問を胡桃にぶつけた。

「一五です」

「へえー、祐樹と一つ違いなんだ。意外！ もっと幼いと思った」

(グサツ！)

「ん？ どうしたの？」

「い、いえ・・・」

「？」

麗華と胡桃と麻耶の三人は料理の準備をしていた。そのときに麗華と胡桃が親しげに話しているのを麻耶は隅で見ていた。確かに年齢にしては幼い容姿をしている。最初に会ったとき同年もしくは少し年下の子だと思っていた自分も麗華と同じくちよつと驚いていた。

一方、胡桃の方は麗華に痛いところを突かれて精神的なダメージを受けていた。麗華には悪気はない。それは十分わかっているが、自分がこの容姿を気にしていることは誰にも言っていないし、自分がこの容姿をものすごく気にしてしまっている自分自身の思いも嘘ではない。嘘ではないのだが、他人からどうしても自分の容姿のことを言われると『グサツ！』と心の中で何かが突き刺さるようなショック的ダメージを受けてしまうのだ。

(ふ〜ん。容姿の方はNGなのか)

麗華は胡桃の判り易い反応で、これ以上は踏み込んではいけないという線を勝手に作った。そんなこともあってか、胡桃もその後は皆の中に非常に溶け込みやすい環境になっていった。そんな折、胡桃が麗華に質問してきた。

「あの、料理中に何なんですけど・・・」

「何？」

「私が式神結界をこの家に施したとはいえ、この家や貴方方が狙われてしまっているのは確実。私は慣れているとはいえ、どうして貴

方方はそんなに落ち着いていられるのですか？」

胡桃がそう言つと麗華と麻耶はお互いを見合い、溜め息をついた。

「え？ あの、どうかしたんですか？」

二人の動作について意味がわからなかった胡桃は当然のことながら質問し、麗華が答えた。

「ウチにいるトラブルメーカーのせいかしらね。こつこつ付け狙われるつていうのは結構過去にもあつたりしたのよ。麻耶ちゃんなんか拉致されたこともあるんだから」

「え！ そうなんですか？」

「え、ええ」

麻耶は胡桃の質問に俯き加減に答えた。麻耶はどこか呆れてるような照れているようなよくわからない表情をしていた。

「そのトラブルメーカーの祐樹君のおかげで、こつこつ場での状況には慣れていくというわけですか。なんか凄い経歴ですね・・・」

「そう、大変なのよ。ねえ、麻耶ちゃん」

「はい・・・」

キッチンの空気はなんだか重たい空気に包まれながらも調理が進んでいく。

一方で祐樹と一瀬は宿題に追われていた。ちなみに麻耶の分も引き受けている。

「なあ、俺等なんか損な役回りしてないか？」

「今頃気がついたのか、祐樹。お前ってホント幸せな奴だよなあ」

「そ、そうか？」

祐樹の部屋のテーブルでノートと教科書と参考書を広げ、祐樹と一瀬は今日の宿題をやっている。女性陣が夕飯の調理担当で、男性陣が宿題という雑務の担当となったのだ。どの世代でも男性は女性に弱いものなのである。

「だああああー、だりいー。もう疲れた」

祐樹は大の字になってベッドに飛び乗った。

「おいおい、まだ全然終わってないぞ。寝てないでやっっちゃおうぜ」

ベッドに埋もれたまま祐樹が言う。

「一瀬に任せる。俺は一瀬のを写させてもらおう」

「お前なあ。任された仕事ぐらいちゃんとかやれよな。誰のせいでもんなことになってるかよく考えるよ」

「む。俺のせいって言いたいのか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「俺のせいって言いたいのか？」

一瀬はゆっくり思考を巡らせた。大河祐樹、通称トラブルメーカーと呼ばれる彼は、今までにも様々なトラブルを招いており、周りにも多大な被害を被ってきていた。そんな彼が今まで自分の体質にどんなに悩んで悩んで悩んできたのか、親友の一瀬は近くで見ていることもあり、人一倍そのことに敏感になっている。

「お前のせいじゃないよ。これもまた運命。抗うことが必要だ」

一瀬は絶対に人のせいにはしない。これは祐樹自身もそうだった。祐樹も自分がトラブルを招く元凶であるということは自覚している。しかし、それでも今後もずっと生きていかなければならない。人とは違うハンデを持っているが故、悩み苦悩し彼は成長しているのだ。そして彼は全ては運命として。その運命に抗おうと決意したのである。将来の自分は自分で切り開いていく。そういうことを友人から師匠から教わり、今の彼がいるのだ。

「だから、さつさと終わらせて飯にしようぜ。二人で分担した方が十分に効率的だ」

「あいよ、わかった」

祐樹は一瀬の言葉に体を動かされて、ムクツと起き上がりベッドから起き上がり一瀬の対面に座り宿題を始めた。最初はカリカリとペンを走らせていた祐樹だったが、途中からペースが落ち始め、拳の果てにはテーブルで寝込んでしまった。

（結局こうなるのか……。はあ、とりあえず俺の担当範囲だけでも終わらせるか）

一瀬はそう考えるとペンをスラスラと走らせ、宿題に集中していく。そして疲れを感じた頃にちょうど一瀬の担当範囲は全て完了した。

（ってーか、こんなに宿題出すなよなあ。いくら休みだからってこれじゃー遊べやしない）

と一瀬が嘆いていた頃、一階にいる麻耶から夕飯ができたとの知

らせが入ってきた。それを聞いた一瀬が祐樹を起こそうとすると、そこにはもう祐樹の姿はなかった。

「あれ？」

直後、階段をタツタツと下りていく足音が聞こえた。

「あんにやるー、こんなときだけ動きにキレがありやがる。まったくこの集中を勉強に活かせないものかね」

誰もいない祐樹の部屋で一人取り残されている一瀬はそう言うとき重い腰を上げ、祐樹の後を追うようにゆっくりと一階のリビングへと向かって行った。

夕食のメニューは、餡かけ唐揚げにサラダというかなりシンプルな料理が並んでいた。そんな光景を見た祐樹は言うてはいけない一言を口にした。

「なんか質素」

「ギラッ！」

「いつ！」

三人の女性陣の目からは殺気が交じった視線が祐樹に注がれている。

「仕方ないでしょ。今朝の停電のせいで冷蔵庫の中の物がダメになっちゃったんだからさ。これだけ食べられるだけでも文句言わない！ 文句言つくらいなら食べなくて宜しい」

「あ、ああ、ごめん姉ちゃん。嘘、ジョーク、冗談。食べます。食べさせていただきます」

祐樹は必死に頭を下げて食卓に着いた。遅れて一瀬がやってきてやけに盛り上がっている現状をなんとなくだが理解していた。そんなとき胡桃が麗華に質問した。

「今朝の停電って何ですか？」

「噂だとね、大きな落雷があったらしくて、この辺一帯の電気の供給がストップしちゃったのよ。おかげで冷蔵庫の中身は全滅。もう嫌になっちゃうわ」

「げっ……」

胡桃の質問に答えてくれた麗華だったが、胡桃の様子がおかしかったので問い詰めた。

「どうしたの？ 体調悪いの？」

「い、いえ……」

胡桃は妙な汗をかいている。その反応に祐樹は直ぐ様思いついたことを口に出した。

「いや、俺には聞こえたぞ！ 明らかに動揺しているその眼はごまかせん！ 犯人はあんただな！」

「まさか、そんなことないんじゃない？ ねえ、胡桃さん？」

麻耶がフロアに入るが胡桃は俯いてしまつて言葉が出なかった。

「だってよ、追っ手がいたつてことはそれを排除するために、攻撃的な布陣を使つたはずだろ？ さっきの式神みたいのをさ。その追っ手を退けるために雷撃系の魔術的なものを使つたんじゃないの？」

「いつ……」

「どうなんだ？」

祐樹は胡桃を追い詰めていた。この沈黙はおそらく祐樹の予想通りなのだろう。胡桃が重い口を開く。

「ええ、その通りよ。雷撃系の札を使ったのは確かに私。そして今朝の停電もおそらく私の責任でしょう。皆さん本当にご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした」

一同の沈黙はしばらく続いた。妙な空気にしてしまった祐樹はどうにか場の雰囲気と和ませようと冗談を言おうと考えていたが、こんなときに浮かぶものなんて全然面白くもなんともない。しようがないので今の気持ちを言葉に出すことにした。

「まったく迷惑かけてくれたよな。まあ事情が事情だし仕方ないんだろうけど、ちゃんと周りの配慮を考えて戦ってくれよな、陰陽師さんよ」

プチン！

何かピアノ線が切れるような音が胡桃の頭の中で響いた。

「アンタみたいな小生意気なガキに言われたくないわよ！ こっちだって必死だったんだからね！ 追ってくる奴等はうざったいっただらないし、アンタも同じくらい相当うざいよ！ 調子に乗ってベラベラ好き勝手にしゃべりやがって、終いにはしばくぞ！ コラアアアア！」

リビングには荘厳な静けさと啞然とする麗華と一瀬と麻耶、そして当事者の祐樹。変貌した胡桃の口調に完全に引いてしまっている。そんなとき、ふっと我に返った胡桃は、自分がしてしまった失態を直ぐ様理解した。そう彼女は短気なのだ。一応我慢はできるのだ

が、そのたががすぐに外れてしまうのだ。童顔の容姿に短気な性格。彼女の短所が前面に押し出された瞬間だった。

（い、いけない。折角清楚なイメージを付け始めたばかりなのに、本来の姿を見せてしまった。ほらほら皆引いてるよおー。どーしよう・・・）

状況を理解した胡桃は、直ぐ様席に座り、赤い顔をしながら黙々と食事を始めた。周りの連中は未だに硬直したままだった。一応清楚な立ち振る舞いをしていた彼女がまさかこんな暴言を吐くとは夢にも思っていなかったことだろう。祐樹は特に。彼女の本性を見てもしまった彼等は、この微妙な空気のまま食事を済ませていった。

カチャカチャ、ジャブジャブ。

水の流れる音と食器同士がぶつかり合う音。男性陣は何故か皿洗いをさせられるハメになっていた。

「おい、なんでこんな流れになってんだ？ お前なんかフラグでも立てたのか？」

「フラグを立てたのは祐樹、お前だろ」

「え？ 俺？」

皿洗いをしながら祐樹と一瀬が話をする。

「折角のみんなの食卓をあんな空気にしたのは元を正せばお前に原因があるだろう」

一瀬は皿をすすぎ、水切り籠に入れていく。

「やっぱ俺かぁー」

祐樹は皿を洗剤で洗っている。油污れの無いようにしっかりと洗っている。と同時に落ち込む。

「さすがはトラブルメーカー。相も変わらずトラブルを引き起こすねえ」

「がっ、改めてそれを言われると傷つく」

「でもマイナスイメージばかりじゃなかったな。胡桃さんのあんな素顔が見れたのはちょっと良かったかもな」

一方、女性陣はテレビを見ていた。今朝はテレビが見れなかったので軽く新鮮だった。

「やっぱ、テレビがないとやっていけないわね。あ、そうだ。麻耶ちゃんはちゃんとお家に電話した？」

麗華は食後のおやつを掴みながら麻耶に聞いてみた。

「ええ、ちゃんと了承もらいました」

「ならいいわ。で、胡桃ちゃんはどこで寝る？ あたしの部屋なら三人はなんとか寝れるわよ」

「いえ、私は夜は監視をさせていただこうかと思ってます」

その時、麗華は胡桃の顔を掴んでムニムニと揉み始めた。

「うわぁー張りがあってツヤツヤスベスベしてるう。羨ましいなあ。でもね、夜更かしはお肌の大敵よ。いくら今若いからってそれを疎かにすると後で泣きを見るのは貴方よ」

「え、えーと、私はあまり美容とかには興味がなくて・・・」

麗華はその一言でさらに深く胡桃に近寄る。

「ダメよ！ 後悔先に立たず。今からちゃんとスキンケアしておかないとその張りのあるお肌がいつしかボロボロのしわくちゃの肌になっちゃうわよ。折角かわいい顔してるんだから、もったいないことしないの！」

麗華の勢いに押され気味の胡桃だったが、ここで助け舟が来た。

「それなら俺達が監視しますよ。明日は休みですしね」

洗い物が終わったのか、一瀬が麗華の背後に立っていた。

「ちょ、ちょっと待てよ。俺達って誰のこと言ってるんだよ」

「ん？ もちろん俺と祐樹のことだけど」

「はああああー？ 何で俺まで巻き込まれてんだよ」

「向こうはお前も狙ってるんだろ？ どっちみちゆっくり休むなんてことできないだろ？ だから監視しようって言うてんの。わかる？」

祐樹はあまりにも理不尽な理由に怒り心頭していた。

「んな、わかるかぁー！ 俺にも寝る権利くらいあるだろう！ それに元々の元凶はこの女陰陽師だろ？ こいつが監視するのが普通だろうが！」

「ふむ。一理あるな」

「だろ？」

一瀬は考えながら胡桃の方へと視線を移した。

「そういえば聞いてなかったけど、この結界の効力はどんなものなんでしょうか？」

「妖魔の侵入を防ぐのはもちろん、妖魔が結界の半径一キロ圏内に入るとそれを感知して知らせてくれるタイプのものよ。本来なら監視は必要ないのだけど、用心に越したことはないと思って言ったのよ」

「ったく、心配性の小心者かよ」  
プチン！

「アンタが私の看病をしたのがいけないでしょ！ こっちは巻き込むつもりもなかったのに。勝手に暴れて勝手に標的にされて。少しは自分の行動はこういう結果を招くのか考えたらどーなのよ、ガキが！」

ハアハアと息を切らしながらも胡桃は一つの提案を出した。

「ふうー。落ち着いた。それじゃー説明するわね。監視は私の式神に任せるわ。貴方達は戦いに備えてじつくりと休養を取って頂戴。まあー本来は貴方達の力を借りずとも妖術師を倒すつもりだったけど、あいつの側近には悪鬼という鬼がいるのよ。その相手をしてくれる人が必要なの。つまり、貴方方にはその悪鬼の相手をしてもらいたいの」

胡桃の表情はいつの間にか真剣な表情へと変化していた。

「祐樹君、一瀬君できる？」

「強いのか？ そいつ」

「ええ、向こうの実質ナンバー二よ」

「俺は構わねえーけど、一瀬どうするよ？ 『アツキヌフォート』」

「ここにないじゃんー！」

一瀬は眼鏡の位置を直し、笑みを浮かべて答えた。

「問題ない。こんなことだろうと思って、先ほど『アッキヌフォート』を持ってこさせるように手配した」

アッキヌフォート。

一瀬が所有する霊装の弓である。霊装とは伝説上の武器を魔術的要素を組み込み人の手によって再現、作り出したものを言う。この武器を作り出す人間のことを魔工技師と呼ぶ。そして、このアッキヌフォートとはかつての円卓の騎士の一人であるトリスタンが所有していたとされる弓である。それを精巧に再現されたのが一瀬が所有している霊装アッキヌフォートなのである。

「麻耶はどーすんだ？」

「あたしは籠手があるからね。麗華さんと遠目に見物してるわよ。それか雑魚相手にでもしてあんた達が戦いやすいようにしてみてもり」

祐樹の質問に麻耶はサラッと答えてみせた。どうやらすでに打ち合わせ済みだったようだ。

「んじゃ、妖術師と戦うのは、陰陽師であるあんたってわけか。大丈夫なのか？」

「覚悟はできてるわ。どうせいつかは対峙しないといけないわけだからね」

皆の意思決定は決まった。あとは何時来るかわからない相手に対して準備をするしかない。だが、胡桃はそう遠くない内にやってくると予想していた。それにはある確信めいたものがあつたのだ。

陰陽師と妖術師の力を融合させる為にはある儀式が必要不可欠なのだ。その儀式の日というのが満月の夜だった。暦の中では満月である日は一番近くて明日の深夜だった。間違はなく今夜中もしくは明日中に襲撃があるだろうと胡桃は予測していたのだ。だから面倒な結界を張り、少しでも時間稼ぎを行いたかったのだ。刺客を放ってきたということは今回の満月の日に必ず仕掛けてくるという確証があった。

そのため、彼等は準備に準備を重ね、睡眠を取ることにした。傍らには眠気覚まし用のピンが封を切らずに置いてある。おそらく起きたら飲むために置いてあるのだろう。

そして満月になるまでおよそ二四時間を切った。熟睡する祐樹達はまだ敵襲の姿はない。果たして敵の強襲に対応できるのだろうか。

スラム街のような町では儀式の準備が執り行われていた。いよいよ明日に迫った儀式を前に妖術師、白堂刹那は真剣な眼差しで儀式場を見ていた。

「全員集合しろ！」

刹那の一声でその場にいた人ばかりが集まってきた。その中には人間もいれば小物の妖魔もいる。

「儀式が明日に迫った。余裕を持って今から土御門胡桃を確保しに行くぞ」

最前列にいたタカが刹那に言った。

「白堂さん。何も白堂さんが自ら行かなくても俺等でなんとかしますよ」

刹那の鋭く重い視線がタカに向けられる。

「てめえー。何度あいつの捕獲に失敗してるのかわかってんのか？」

刹那はタカの胸倉を掴む。

「す、すいません」

「あいつを甘く見すぎなんだよ」

タカを突き放す刹那。

「それにどうやらお仲間もできたみたいだからな。ちょっと興味があつてな。文句ねえーな、お前等？」

「「「はい！」「」」

一同は一斉に返事をした。

「それじゃー、霊粒子構築できる奴は付いて来い。空から行くぞ」

白堂刹那が率いる妖魔集団（人間も含む集団）は、土御門胡桃がいる大河邸へと向かって進行を開始したのだった。

深夜一時、大河邸。

監視していた式神から知らせが入った。その知らせを聞き、胡桃はすぐに起き上がり、麗華と麻耶を起こし、隣の部屋で寝ていた祐樹と一瀬も起こしに行った。

「来たわ！」

その一言で十分だった。祐樹達はその一言で完全に目を覚まし、襲撃に備えての準備を始める。祐樹は念のため眠気覚ましのドリンクを口にする。

向こうの思惑もこちらの思惑も全て明るみに出ているこの状況で頼りになるのは、祐樹達の力だ。奴等はまだこちらの戦力について完璧な把握はできていないだろう。だからこそ彼等のポテンシャルに賭けてみようと考えた胡桃だった。

同刻、結界外。

「面倒な結界張りやがって。しょうがねえーなあー」

白堂刹那は右手を伸ばし結界に触れると同時に結界の膜を掴みバチバチツと電気が走るような音をさせながら、強引に捻り取るようにしていた。そのとき、刹那の右手の五本の指から経文のような文字列が血管が浮き出るように右腕へと広がり、結界を中和して、次第に結界の力は薄れていき、右手の力だけで強引に結界を引き裂いてしまった。

「ただの時間稼ぎだな。こりゃー」

傍にいた悪鬼が刹那に話しかける。

「畏でしょうか？」

「それもあるだろうが、ま、俺には関係ねえー話だ。行くぞ」

刹那を先頭に何人もの妖魔集団が後から付いて来る。それはまるで百鬼夜行の群れのような光景だった。

大河邸。

「結界が破られたわ！ 奴等が来るわよ。準備はいい？」

胡桃は周りを見渡す。祐樹は背負うほど大きい特殊刀。一瀬は弓。麻耶は箆手。麗華は木刀。それぞれの武器を装備して準備は完了していた。

「姉ちゃんは無理すんなよ。現役離れて時間経ってんだからな」

「そうです。無理はしないでください」

「祐樹と胡桃ちゃんに言われなくてもわかってます！ 家の中から見守らせてもらっわ」

祐樹達はお互いの意思を確認し、外へと飛び出していった。この場合空中で立っているというのが正確なのだが。

霊粒子の構築。

これは空気中に存在するオーラの絞りカスのことである『霊粒子』を集めて固定し、足場は確保することを主に言う。そのため、この技術があると、空中でも足場を確保することができ、空中での戦闘も可能となるのだ。霊粒子自体は空気中のどこにも存在するものなので枯渴する心配はない。

空中に足場を作り、最前線に胡桃、その横に祐樹。斜め右後ろには一瀬、斜め左後ろには麻耶が陣取っていた。丁度下から見ると台形のような形になっている。

胡桃が右手を天に挙げるとヒラヒラと紙が落ちてきて、胡桃の右手の周りをその紙が漂っている。

「それが式神の元の紙？」

「そ。この紙貴重だね。戦闘前に回収してきたかったのよ」

祐樹と胡桃が普通に話しをしているのを見た一瀬は、二人からは思った以上の緊張感を感じなかった。

「まったく、これから一戦交えようとしてるってのに何でこうもまあー落ち着いてられるんだか」

「単純だからじゃない？」

「それ私も入ってる？」

一瀬と麻耶コソコソ話を聞いてか、胡桃は不機嫌そうに言った。どうやら祐樹と一緒に評価されるのがとても嫌なようだ。確かにそれはわかると逆に納得し、反省する麻耶だった。

そんな呑気な話をしていると妙に冷たく気持ちの悪い風が前方から吹いてきた。

「来たわ」

さつきとは打って変わって胡桃の緊迫感のある言葉でその場の空気は一気に重くなった。

「こりゃー靈気か？　何か気味悪いーな」

「これは妖気よ。もちろん人間の霊気も交じっているけど、妖魔が発するのは妖気なのよ。妖術師は霊気・妖気の両方を操れる術者なのよ」

祐樹が感じた疑問に丁寧<sup>ていねい</sup>に答えている胡桃。まだ多少の余裕はあるようだ。

すると暗い闇の中から薄っすらと人影がたくさん現れてきた。向こうも空中を歩いている。まるで百鬼夜行の群れを見ているかのようだ。

先頭に立っていた人影が月明かりによって姿が露<sup>あらわ</sup>になった。

髪は銀髪。肌は黒色。膝の辺りが破れたジーンズにスタイリッシュな靴。上半身は黒の半袖のシャツにその上から薄いフード付きのベストを着込んでいる。こちらからは見えないが、ベストの背には『妖』という一文字が筆書きされている。両手の指にはシルバーアクセサリーの指輪を、首や耳にもシルバーアクセサリーを付けている。まるで都会にいるチャライお兄さんのような格好をしていた。

そんなシルバーアクセサリーをこよなく愛する白堂刹那は、首に掛けたシルバークアクセサリーの丁度十字架の形をしたところを弄<sup>いじ</sup>りながら嬉しそうに微笑んだ。

「やっと出てきたなあ。それにしてもデカイ結界を張ったもんだな。歩いてくるのに時間掛かったぜ。何か作戦でもあんのか？ え？」  
「さてね、どうかしらね」

刹那の問いかけをスルーさせる胡桃。祐樹は刹那を見て胡桃に確認を取った。

「先頭の奴が妖術師か？」

「そう。あいつが妖術師、白堂刹那よ。それでその右手にいるのが悪鬼よ」

「あいつがか？」

祐樹は悪鬼の姿をしっかりと目に焼き付けた。どう見ても普通の人間にしか見えない。姿はスーツ姿だ。しかしそいつの体からは靈気とは違った、妖気の不気味なオーラが漂っていた。

（こいつが鬼。俺の相手・・・）

「皆に先にもう一度言っておくけど、無理はしないこと。私がどうなるうとね。貴方達には彼等に殺される理由は無いもの。いいわね？」

「「「！？」」」

出撃前の数分の内に胡桃が言ったことを再度確認の意味を込めて胡桃は言った。巻き込んだせめてもの償いと彼女は言っていたが、こちらを殺すかは向こうが決めることだ。そんな甘い考えに乗ってくるかどうかは奇跡に近いと誰もが思った。だが。

「ここで雌雄を決しましょう。但し、彼等は殺さないことを誓ってくれないかしら。その代わり、貴方と私との一騎打ちに絶対手出しさせないから」

刹那はニヤリと笑った。

「いいぜえ。それでお前が手に入るんなら安いもんさあ。おい！」

刹那は後ろにいる仲間に向けて声を放った。

「条件を出す。俺と土御門の一騎打ちに手出しするな、絶対にだ。それとそれ以外の奴等は相手してやってもいいが、殺すなよ。見たところまだガキみたいだな。ハッ！」

「『イッヒツヒヒヒ』」

刹那の声に反応して部下の不気味な笑いが聞こえてくる。

「下品ですね。だから妖魔の品格が疑われるのですよ」

「そうだったなあ。悪鬼。お前もやり過ぎるなよ。町が潰れちまうからな」

「わかっていますよ。ただ、そこまでの戦いになるとはあのお子様達を見ると到底思えないのですがね」

悪鬼はワザと祐樹達に聞こえるように話していた。こちらの怒りを買ったためだった。ただ確かに見た目は中学生のガキだが、戦闘には特化している三人だ。そんな挑発に乗る者などいないと胡桃は思っていたのだが。

「ああ？ てめえー！ 今何て言った！ 絶対後悔させてやんぞ、コラアー！」

スパンツ！ ボコツ！ バコツ！

祐樹が相手の挑発に簡単に乗ってしまったために、胡桃・一瀬・麻耶の三人から各一撃ずつ突っ込みが入った。

「い、痛え……。何すんだ……。お前等……」

「何ってこつちの台詞だ！ バカ野郎！ あんな見え見えの挑発なんかに乗リやがって！」

一瀬がまず一蹴した。

「ホントバカ！」

麻耶がさらに一蹴した。

「祐樹・・・、アンタを信じた私がバカだったみたい・・・。もう一片同じことしたら、私がアンタをぶつ殺す！」

最後に胡桃が一蹴した。

「ったくよおー、何だよ皆してよお・・・」

祐樹は殴られた箇所を摩り、目には涙が溜まっていた。そんな様子を下から見ていた麗華がふと思った。

（あの子達ホントに大丈夫なのかしら・・・。メチャクチャ不安・・・）

と冷や汗を流していた。

とその時突然笑い声が聞こえた。

「ハッハハハハハアー・・・ハアー面白えー。お前等面白えーカ  
ルテットだよ。だがな、楽しい時間ってのはすぐ過ぎちまうもんな  
んだよなあ。面白えー奴等だが、邪魔すんならぶつ倒すまでだ。安  
心しろ。約束通り殺しはしねえーよ」

胡桃そして祐樹達も身構える。

「さあーて、そろそろ始めようじゃねえーの。勝負はそうだなあ。  
そっちは四人いるし、こつちも俺含め幹部は四人ここに来てるぜ。  
丁度数もいいからそれで振り分けるか」

すると刹那は妖魔集団を二分割にし、刹那・悪鬼・タカ+妖魔集

団A・山ノ井＋妖魔集団Bの四組に戦力を分けた。

対して祐樹達は、刹那の相手に胡桃・悪鬼の相手に祐樹・タカの相手に一瀬・山ノ井の相手に麻耶という形で戦力を振り分けた。

「よーし。そっちもどーすつか決めたいだな。それじゃーこの花火が鳴ったら移動しろ。それ以降はそっちで勝手に決めてやりな。行くぜ」

刹那はそう言うと、左手に持っていた花火の導火線に右手の人差し指を近づけた。その指先からは炎が発生し、導火線に炎が点火された。

ジジジジジッ・・・ピューッパアーン！

ロケット花火の破裂音と同時に各組は一斉にその場から各フィールドへと散って行った。

胡桃と刹那は北エリアへと移動した。辺りは住宅街が並び静寂に包まれている。

「随分辺鄙な所へ飛んできたな。ここに何かあんのか？ ま、それでも俺の優位に変わりはないがな」

耳に付けているピアスをキーンと指で弾いて鳴らした。

「それはどうかしらね。私が何の準備もせずにごここにいると思う?」  
「そりゃーそうだな。でなきゃ、ただのバカだ。じゃ、始めるか」  
「そうね」

胡桃が単語帳から紙切れを数枚引き千切り、数体の式神を召喚するとともに、攻撃術式を使用した。

「眩い閃光煌け！ 光線翼！」  
「こうせんよく」

目晦ましたろうか、激しい光を放つ翼のようなそれは、刹那の体にある異変を起こしていた。体が焼けるように熱いことに刹那は気付いた。

「こいつは光圧の攻撃か・・・」

刹那は体のあちらこちらに触れ、状態を確かめるような仕草を取った。

「鬱陶しい！ 払いのける！」

刹那は両手を広げ、その後両腕を前方に差出し、ボールを持つような構えをとり叫んだ。

「暗黒の海に吞まれよ『闇飲み！』やみの」

胡桃が放った光圧の攻撃が刹那の放った闇の力で光が吸収されていく。まるでブラックホールのように。全ての光を飲み込んだ闇はそのまま姿を消し、再び二人が対峙する形になった。しかし、さっ

きまでとは様子が違った。胡桃の周りには五体もの式神が姿を現していた。

遁狼・白虎・青龍・朱雀・玄武という四獣一狼という布陣で胡桃は刹那に戦いを挑もうということだった。

「遁狼に四聖獣ねえ。攻撃重視の布陣。こりゃー少々手こずりそうだな。また厄介な式神を出しやがって。まったくホント面白えー奴だよ前は」

刹那は胡桃が召喚させた式神を前にしても余裕の素振りを見せ、シルバーアクセサリーのネックレスを握っていた。

場所は変わって、祐樹と悪鬼が移動したのは祐樹の自宅から西側にある自然公園の真上だった。

「再度忠告致します。ここは大人しく引き下がっていただけませんかね」

「あ？ 何でだよ？」

「当然でしょう。常識的に考えて貴方みたいなお子様がワタシに勝てるわけがない。だから逃げる猶予を与えているのですよ。分かりますか？」

「へっ、もう挑発には乗らねえーぞ」

「これは挑発ではなく警告なのですがね。仕方ありませんね。貴方がその気ならば死なない程度に痛い思いをしてもらいますよ」

「できるもんならやってみろよ！」

一通りの会話が終わると祐樹は悪鬼に対して構えを取った。その姿を見た悪鬼は思った。

（ほう！なるほど。口で言う程のことはありそうですね。構えに無駄がなく隙もない。この年齢では見事ですな）

悪鬼は祐樹の構えを見て心を改め、それなりの力で相手にすることを決めた。

「いいでしょう。真面目に相手して差し上げましょう。しかし後悔しないでくださいよ」

「望むところだっつーの！」

二人の睨み合いはしばらく続き、下の自然公園からの風で舞い上がってきた木の葉が二人の間を駆け抜けたとき、突然、パン！という音を立てて木の葉が破裂した。その瞬間二人は交錯するようにお互い正面から向かって行った。

さらに場所は変わって、東部では一瀬と刹那の部下であるタカと妖魔集団Aが立ち並んでいた。下には広い池が広がっていた。

（実戦でアツキヌフォートを使うのは始めてだ……。さっきの祐樹とは大違いの心境だな）

と多少不安な気持ちがあった一瀬だったが、目の前の敵に対して視線を合わせるとそんな不安は少しずつ消し飛んでしまっていた。

対面し、先頭に立っているタカと呼ばれる人物が初めて一瀬の前で話す。

「こんな時間にガキが起きてていいのか？ それに大層な武器持ってたんじゃないの。売れば高く売れそうだな」

「どうやら奴等は一瀬よりも一瀬が持っている『霊装アツキヌフト』の方が気になっているようだ。この妖魔集団を率いるタカと呼ばれる人物は、ふくよかな体型の平凡な顔立ちで、着ている服もロングTシャツにハーフパンツと物凄くラフな格好だった。」

「どうだろうね。これは俺仕様の特別製だからね。売っても二束三文にもならないんじゃないかな」

「……エへへへへへへ」

「奴等はこちらの話をまったく聞いていない様子だった。相手は完全にこちらを甘く見ている。付け入る隙があるとすればここしかない。絶対的なチャンスを一瀬は見逃さずに対応できるのか。対する敵はまずは妖魔集団だ。」

そして南部地方。麻耶が担当するのは、山ノ井が率いる、妖魔集団Bだった。山ノ井は線目の何を考えているのかわからないような人間という印象を持った。いわゆる曲者という奴だろう。髪は肩まであり、後ろで髪を縛って纏めている。着ている衣装は、上半身はシャツにジャケット、やはりこちらにもジーンズを履いている。この組織ではジーンズが流行っているのだろうかと思うほどその需要は高かった。

「じゃ、始めまひよか。一騎打ちがええ？ それとも後ろの妖魔集団から相手しはる？」

「落ち着いた京都弁口調には余裕があった。その様子を見た麻耶は、体を暖めるという意味でも妖魔集団から手始めに戦うことに決めた。」

「じゃあ、お言葉に甘えさせて後ろの連中から相手させてもらおうわ」

「そつか。ええよ。ほな、お前等の出番や。行ったり」

妖魔集団は待ちに待ったと言わんばかりにニヤニヤしながら麻耶へと迫寄って来る。麻耶は精神を統一させ、全身のオーラを一気に増幅させ爆発させた。

麻耶の全身から炎が噴き出すようなオーラが全身から出す。

麻耶が発動させたオーラの勢いに一瞬たじろぐ妖魔集団。その時妖魔集団の後ろから山ノ井が言葉をかけた。

「敵前逃亡は死とみなす。わかってらっしゃる？」

山ノ井の冷静な言葉に妖魔集団は更なる圧力が掛かる。ここは絶対に戦わないとならない。妖魔集団は覚悟を決め、戦闘準備を整えた麻耶に一気に向かっていくのだった。

東部地方。一瀬と妖魔集団との戦いは呆気ない程簡単に幕を閉じた。

一瀬に向かってくる妖魔集団に対して一瀬はアツキヌフォートを構え、淡く白く輝く矢を出現させ、妖魔集団目掛けて一斉放射をした。その矢に触れた妖魔はバラバラに浄化されていく。その様子を見たタカは両目を開き、驚愕の表情をしていた。

「てめえ、その弓は何だ？」

先ほどの余裕の笑みが嘘のように厳しい表情へと変わっていた。

一方一瀬は、タカに向けて弓を構えた状態で答えた。

「霊装アツキヌフォート。別名、魔弓アツキヌフォート。その特徴は魔術を矢の形にして放つことができることだ。それに加え、さっ

きのように複数の相手を相手にするときのように、一撃で二〇〇〇弾の連射も可能なんだよ」

「何だと?」

「俺はこれでも元寺院の当主の孫なんでね。魔術関連についての知識は持ち合わせているんだよ」

「.....」

「さて、どうする? 劣勢は見えてるけど、まだやるかい?」

俯いた顔を上げたタカは冷静さを取り戻していた。

「調子に乗るなよ...当たり前だ。それがどうした。たかが弓矢じゃないか。近距離戦闘になればこっちが有利に働くだろうが!」

「そういう考え方もあるかな」

「へ、自分の弱点を晒して何か策でもあるのか?」

「さて、どうでしょう」

「けっ、ムカつくガキだ。妙に冷静な面しやがって。舐めんのも大概にしるよ。ガキの分際で! 俺の力見せてやる」

タカは戦闘態勢に入る。肌を刺すような痛い空気を一瀬は感じていた。

(やっぱりこいつ、言ってることはハツタリじゃなさそうだ。気を引き締めないと...) )

ハーフパンツにロングTシャツを着たタカは見た目はふくよかな体格だ。それほどスピードはないだろうと一瀬は予想していた。だが、この予想は直ぐ様裏切られた。

次の瞬間、ぽっこりと出てきたおなかギューと引き締まってきた、体全体がどんどん引き締まっていく。

(こいつ、肉体操作系の能力者か)

肉体操作系能力者。

魔術や武術、超能力など生まれ持った天性の才能が誰しもが持っている。そして一番多いのが超能力者と肉体操作系能力者と呼ばれる系統の能力者だ。

これらの能力は、魔術や武術とは全く違い、完全に生まれ持った才能が実力を左右する。それと同時に多くの者がこうした能力を持つて生まれてくるのが最近の傾向だったりする。

先ほどまであれほどふくよかな体型だったタカの体は、引き締まった体に変わり、見るからに理想の体型に近くなっていった。

「ちえ、ぶかぶかになっちまったな。どうせだから脱いで戦うか」

と言うといきなりタカはぶかぶかになった服を脱ぎ出した。Ｔシャツはもちろんズボンも脱ぎ捨てた。完全にボクサーパンツ一丁である。

「はぁースッキリするぜ。お前もどうだ？」

「俺はあんたみたいな変態じゃない」

「変態かぁ。聞き捨てならねえ言葉だが、まあ時間もあまりないことだし、このままさっさと始めちまうか」

そう言った直後、タカの周りからは凄まじいオーラが迸っていた。肉体操作した影響で、抑えられていた力が開放され、気分も同時に向上してきていた。

(こいつ変態だけど、・・・強い)

一瀬は距離を取り、弓を構える。体が引き締まったということは動きのスピードもそれに伴って上がっている可能性もある。それも考慮に入れながら、一瀬は戦闘シミュレーションを立てて対応していくことにした。

南部地方。麻耶を相手にする妖魔集団は苦戦を強いられていた。霧咲流柔術の基本歩法の柔歩じゅうほと、両腕にオーラを集中させて掌から凄まじい破壊力を生む衝撃波を発生させ、幾多の妖魔共を倒している。

実のところ麻耶は、霧咲流柔術道場の師範代を務めるほどの手練れでもあり、祐樹に負けているとはいえ、その強さは学内でもトップクラスなのである。

そんな麻耶の戦い方を山ノ井は観察しながら戦闘パターンの分析をしていた。

山ノ井の戦い方はタカのように真つ向勝負とは違い、戦闘パターンを分析して頭で戦うタイプである。そのため、初見の相手にはまづ様子見というのが彼の戦いの基本だった。

(なるほど。あの籠手は防御にプラスして攻撃力にも反映してるよ  
うやな。それにあの掌のオーラ、あれは細胞を破壊する程の攻撃力  
がありそうやね。恐い恐い)

麻耶が最後の妖魔を倒した。倒された妖魔は塵の様に消えて無くな  
った。

(こいつら何？ 妖魔ってこんな死に方するの?)

塵になった妖魔を見ながら麻耶は妖魔に哀れみを抱いていた。そのとき、山ノ井が軽く拍手をしながら麻耶に近づいてきた。

「お見事。流石やね、キミ。思ってた以上やわ」

警戒しながらも麻耶は山ノ井に話をした。

「で、お次は貴方つてわけね。高みの見物の感想かもしれないけど、随分と余裕があるわね」

「そうやね。見た限り、あの程度なら僕にも何とかかなりそうやからね」

山ノ井はそう言うと、両手を前に差し出し、剣道の構えをとり出した。

「？」

疑問に感じた麻耶だったが、直ぐ様その意味が理解できた。淡い光が山ノ井の手の周りに集まったかと思えば、いきなり黄色く光り輝く光の剣がそこから生まれた。光の剣を掴みブンブンと振り回し感触を確かめる山ノ井。

「あれって、まさか・・・」

「あれ？ 見たことある？ そうや。これは魔法剣。僕の得意分野は魔術と剣術。その両方を兼ね備えた魔法剣こそが僕の力というわけやね。攻撃力はご想像にお任せしますわ」

麻耶は思わず手に力が入り、籠手の部品同士が擦れる音がした。伝わってくるオーラから察するに長時間の戦闘はこちらの不利は決定的だろう。

（なら、何フリ構ってられないわね。全力で行く！）

麻耶はそう決意して魔法剣士・山ノ井との戦いを始めようとしていた。

西部地方。

祐樹と悪鬼の戦いは、悪鬼の優位に事が運んでいた。

（ちつくしょう！ こいつ強えー。攻撃は先読みされるし、当たっても大したダメージにならねえ。しかもこっちは向こうの攻撃を受け流すだけで手一杯……。クソッ！）

悪鬼が月明かりを背に見下ろす形で祐樹の斜め上に立っている。明らかに見下している。

「期待外れもこの上もないですね。この程度でワタシと戦おうなどと一、三〇年早いですよ」

「うっせえー！ まだ勝負ついてねえーだろ！ これからだ！ これから！」

「と、言ってますが、その台詞は何度目ですかね。もう飽き飽きですよ。時間もそんなにあるわけでもないの、そろそろ勝負を決めさせていただきますよ」

悪鬼の息もつかぬ動きに対応できない祐樹は視界を塞がない程度にガードを上げ、周囲を見回す。

（速えー。けどもう慣れてきたぞ。・・・そこか！）

祐樹は目を見開いて半ば賭けで右拳を突き出したとき、丁度悪鬼の顔面にクリーンヒットした。

「よっしゃー！」

と叫ぶと同時に腹部右脇腹にズキツという痛みを祐樹は感じた。よく見ると悪鬼の蹴りが祐樹の右脇腹にカウンターを受けていた。右拳を突き出したカウンターだったため、自分の腕が死角となつて相手の蹴りが見えなかったのだ。

「ぐっ」

祐樹は蹴りのダメージで体をくの字に曲げると同時に、悪鬼は祐樹の背中目掛けて拳を叩き付けた。悪鬼が殴った勢いで祐樹は自然公園の芝の上に垂直落下し地面に直撃した。辺りに砂埃が舞い上がる。

「あたたたっ。ぺっぺっぺ。砂が口に入った……。あんにゃろー」

祐樹は片膝を立てて立ち上がり、足場を確認して上空にいる悪鬼の姿を目にした。

「このままじゃ確実に勝てねえーな。しゃーねえー、癩だがアレやるか」

祐樹は数歩前に歩き出し、深呼吸をして体の余分な力を抜いた。

「雷帝モード……。行くぜー！」

祐樹がボソツとそう呟くと、祐樹の体中からバチバチツと音を立てながら電気が発生した。

「ん？ 何です？ あの光は・・・？」

上空にいる悪鬼は祐樹の変化に気付いたが、それが何を意味するのかまではわからなかった。そして気づいた時にはすでに遅かった。

「カムイ  
神速！」

「！！！」

足の踏み込みと同時に、悪鬼に攻撃をしかける。祐樹は体内に流れる電気信号を増幅させ、その勢いで反応スピードを速くさせている。先ほどまでの祐樹のスピードと比べ、明らかに速くなっていることで悪鬼もそのスピードに対応することができず、顔面や体などに連続の重い打撃を祐樹から受けてしまった。

思いもよらぬスピードと思いもよらぬ攻撃で全身に打撃を受け、さらには電撃による攻撃の影響で全身に電気ショックを浴びせられたような感覚さえある。

この状況に悪鬼は初めて、相手を侮っていたと反省していた。

（ぐっ……。形勢が逆転してしまいましたか……。判断を誤りましたかね）

悪鬼は人間と同じ赤い血を流しながら、肩で息をしていた。だが、まだ余力を残しているような雰囲気を感じ取っていた。

「タフだなあ、アンタ。あれだけの攻撃食らってんのにな。ま、鬼ってタフそうないメージだからな」

「フフフッ……」

「？」

不気味な笑い声に祐樹の体に力が入り、いつでも動けるよう臨戦

態勢に入っている。

「タフですか……。確かに、大概の鬼は体皮が分厚く物理攻撃には耐性がありますね。ですが、ワタシの今の状態は言わば、鬼ではなく人間の状態に非常に近い体なのです。故にそこまでタフな体だというわけではないんですよ。わかりますか？」

「つまりアンタが言いたいことって、今のアンタは全力を出してないってことか？」

「それもありますが、それともう一つあります」

「何だよ、そのもう一つってえのは」

「今のワタシの状態の体へ加えた攻撃でワタシを倒せなかったのは貴方の決定的な敗因だと言っているのですよ」

「敗因だって？」

「今度はワタシが本気になる番ですね……」

悪鬼はグツと力を込めると体がズンズンと盛り上がっていく。

「肉体操作系の能力者？ いや、違うか。妖気がさつきより強くなっっていく……」

悪鬼が着ていたスーツは体の膨張に耐え切れずビリビリと破り切れていく。一気に身長は二メートルを軽く越えるほどの巨体へと変貌した。

「人間の肉体操作とは違うぞ。オレの場合は元の姿に回帰する。つまりこれが元々のオレの姿だというわけだ。ちなみに今まではこの世界にいるために力を制限されていたんだけどな」

悪鬼の頭には鬼の象徴とも言われる角が三本生えていた。確かに今祐樹の前にいるのは、妖魔以外の何者でもないと思わせるような

強い妖気を放っていた。腕を振り下ろせば暴風のような風が起きそうな頑丈そうな腕をしている。

バチバチツブリブリッ！

（気持ちで負けてちゃダメだ。折角のいい流れを持って行かれない！）

「行くぜ！」

自分に言い聞かせるように祐樹は身を屈めるように姿勢を低くすると同時にその場からフツと消え、瞬時に悪鬼の後ろを取り、電気を帯びた拳と足で連撃を繰り出す。だが祐樹は繰り出した手を止めて。

「いつてえー！」

と祐樹が叫ぶと同時に祐樹は一気に悪鬼との間に距離を取った。

「どっかしたか？」

悪鬼はまるで何も感じていないような様子で言った。

一方祐樹はというと、攻撃を繰り出した拳や足に感じる痛みの箇所を摩りながら相手を凝視する。

（あの硬い皮膚。タイヤを殴ったような硬さじゃねえぞ。もっとこう、石を殴ったような硬さだった。もっとオーラを手に集中させないとこっちの手の方が先に逝っちゃう）

オーラと呼ばれるものは、人間の体から発せられている自然の鎧のようなものだ。これを一箇所に集中させることで防御力や攻撃力をアップさせることも可能なのだ。ただその分守りの薄くなった箇

所はダメージが大きくなるというリスクもある。

「どうした？ 急に無口になって。まさか、今の攻撃で戦意喪失でもしたのか？ だったらガツカリだよ。折角変身して見せているのにな。スーツ代を弁償してくれるのか？」

祐樹は悪鬼を凝視しながら笑みを見せた。

「何が可笑的い？」

「可笑しいんじゃない。面白いんだ。どうやって攻略すりゃいいのかって考えるのがな。もちろん、スーツ代を弁償する気もないけどな！」

悪鬼もまた静かに笑みを浮かべた。

「ならば、第二幕の開始といくか」

「ああ、そうだな」

そして二人は真剣な眼差しをぶつけ、戦いの第二幕を開始するのだった。

東部地方。

一瀬と変態男、タカとの戦いは一瀬の優勢で事が運んでいた。

「おりゃー！」

体中に矢が刺さったタカがそう叫びながら突っ込んでくる。一瀬は構わず、一撃二〇〇〇弾の矢を一気にタカへと浴びせる。二〇〇〇弾の矢の雨の中を一直線に向かってくるタカはその速度を抑えず

に突っ込んでくる。

「くそっ！ これじゃ止まらない！」

一瀬は二〇〇〇弾の矢から一撃必殺の効果が高い一点集中型の攻撃へと切り替えた。タカの体のいたるところには小さな矢が沢山刺さってはいるが、どれも浅く致命傷にはなっていないかった。さらに最短距離で攻撃を仕掛けてくるので、一瀬にとっては非常に厄介な相手ではあったが、まだ一瀬には余裕があった。

「一点集中・・・」

(初速度はわかった。あとは奴が避け切れなるところまで引き付ける。・・・ココー！)

一瀬は心の中で叫びながら弓を大きく引き、勢いよく矢を放った。だがそれはタカに当たることなく、タカの残像を貫いて行ってしまった。

「！」

一瞬の判断の狂いが生んだ隙をタカは見逃さなかった。タカは一瀬の左側に周りこんで背中に渾身の蹴りを入れ、その流れで回転しながらかかと落としを一瀬の首筋に喰らわせた。一瀬は一瞬の対応だったが、なんとか致命傷を避けたにも拘らず、そのまま地面に落下してしまった。

「クソッ！ どうなっているんだ？ タイミング的にも避けきれないはずなのに・・・」

(どこか見落としがあったのか？ それとも相手の力を測り損ねていたのか？ いや、分析は十分やった。じゃー一体何故だ？ 先読

みした訳でもないだろうに)

ボクサーパンツ姿のタカは一瀬の頭上で笑みを浮かべていた。

「確かに不思議に思うよな。なんで俺が先読みできたのかってな」「！」

一瀬は心の中を読まれたことに今初めて気がついた。そしてある結論に辿りついた。

(そうか、サトリか！)

「その通り。よく知ってるな。俺は白堂さんからサトリの力を貸していただいているんだよ」

(白堂・・・あの妖術師か。妖魔の力を他人に譲渡することも可能なのか?)

「確かにレンタルだけだな。ま、そのおかげで俺は相手の考えていることが手に取るようにわかる。お前の勝ち目はゼロだ」

「・・・そうか、それはどうかな」

「無駄なあがきだと俺は思っただがな」

一瀬は再び弓を構える。まだ一瀬には戦う気力は残されている。

(心を読まれるか・・・。タネが分かれば簡単だ。なら久しぶりにアレでもやってみるか。やっぱり色々と学んでみるものだな)

「アレだと? 何だ? アレに関しての情報が浮かび上がってこない。こいつ何考えてやがる」

一瀬は最後の切り札で、変態サトリのタカと勝負を決しようとしていた。

南部地方。

麻耶と山ノ井との戦いは白熱を極めていた。一方は魔法剣士、一方は柔術。戦いは間合いも優劣を決める。魔法剣士である山ノ井の方は長距離と中距離と近距離ともに対応できるが、麻耶は近距離攻撃しか手がない。

相手は魔術を使用して遠距離攻撃を仕掛けてくる。麻耶はそれを回避したり、箆手で受け流したりして接近戦にへと持ち込んでいる。だが山ノ井はなかなか攻撃を受ける隙を見せてくれない。

魔法、正式名称『魔術』

この世界での魔術というのは空気中に含まれている『マナ』と己の霊気をブレンドさせて魔術を発動させることができる。『マナ』とは自然界における平和の象徴であり、これが充実していると世界は発展すると言われている。そのため、かつての戦争で魔術が大量に使用され、全世界の『マナ』の絶対量が不足したため、世界恐慌の危機に落ち掛けたことがあった。その教訓を活かし、現在は魔術の使用は極力制限しているのである。また、魔術は戦争をイメージさせるという意味もあり、使用が禁止されているのである。

不意に麻耶は山ノ井に間合いに踏み込まれてしまい、振り下ろされる斬撃を箆手でガードしていたが、思ったよりも山ノ井の攻撃の威力が高く、麻耶は地面に向かって真つ逆さまに突き落とされた。幸い、防御壁を張って落下スピードを減らしていたが、不意を突かれたのは自分の責任だった。

「いったあー。・・・、よし」

麻耶は足場を確認すると地面を勢いよく蹴り、また山ノ井に向かって突撃しに行った。

「無駄やで。今までの戦いでわかつたろうに。難儀なやつぢやな」

麻耶の追撃に備えた山ノ井だったが、その瞬間思いもよらない出来事が起きた。

麻耶が両腕を顔の前でクロスさせ、籠手を表に出したその時だった。

「リリース解！」

麻耶がそう叫ぶと両手の籠手が麻耶の全身を包むように、まるで樹木が体に巻きついていているかのようなそんな動きをしながら、麻耶の体にプロテクターが装備された。体のラインに合ったその鎧は鎧と呼ぶには酷く頼りなく感じるほど薄くまた、露出が多い代物だった。

山ノ井は考える暇もなく、突撃してくる麻耶に対して魔法剣を振りかざすが、呆気なく魔法剣は砕け散った。このとき山ノ井は気付いた。

「まさか、その鎧は・・・」

「そのまさかよ。魔工技師が一人、たくまれん琢磨鍊の最高傑作、鎧の魔装シリーズの一つよ。その意味がわかるわよね？」

「！」

鎧の魔装シリーズ。

鎧の魔装とは、普段は何ら変わらない武器の形をしているのだが、封を開放するとそれが全身を包み込む鎧と化す。その鎧はあらゆる魔術を無効化してしまうという代物なのである。これを作り出したのは、幼くして天才魔工技師と呼ばれた琢磨鍊という人物なのである。

「これで、あなたの魔法剣は効かない。遠距離魔法もね。さてそろそろ潮時かしらね」

「・・・・・・・・」

東部地方。

変態サトリのタカと一瀬の戦いは勝負を決しようとしていた。

白堂刹那から与えられた能力『サトリ』で一瀬の心の声を読もうとしているが、フィルターが掛かっているかのように、突然何も聞こえなくなったのだ。

その状況があまりにも不気味に感じるタカ。心の声なんてそう簡単に閉ざせるものではない。すぐにやれと言われてできるなら『サトリ』なんて能力なんの価値もないものになってしまう。しかし現に目の前で戦っている相手の心の声は今でもまったく閉ざされたまままだ。わからない。どうしたらこんなことができるのか。

そんな疑問を顔に出したタカを見た一瀬がこんなことを話しかけた。

「アンタ、無の境地って知ってるか？」

「無の境地？」

「さつきも言ったが俺はね、元寺院の孫になるんだが、これが小さいときから精神の鍛錬とかで意識して心無心にする修行とかよくやらされてたわけ。その副産物が今の状態、無の境地って奴なんだよ。まあ簡単に言えば何も考えずに戦えるってこと」

「バカ言っつな！ 何も考えてなけりゃ何もできないだろうがよ！」

「確かにそう。だけど、さつきから観察してたんだが、アンタのサトリって能力は深層意識まで読めるものじゃないみたいだな。俺は、表層意識で考えるのをやめて、深層意識で考えて戦っている。これが無の境地って言われるものの正体。で、分析した結果、アンタの

能力は表層意識という上澄み液しか掬い出せない能力ってわけだな」  
「何訳分かんねえーこと言ってるやがる！ 表層意識？ 深層意識？  
無の境地？ んなこと知るか！ お前は予定通りに俺に倒されて  
ればいいんだよ！」

タカの言動に一瀬は溜め息をつく。

「まったく、そういう馬鹿っぷりなところは祐樹とそっくりなんだ  
よな」

「何だと！」

タカがブチ切れたような荒い声で叫ぶと一瀬は冷静に一言言った。

「じゃ、終わりにしよう」

一瀬の高速歩法と二〇〇〇弾の矢でタカの動きを封じると同時に、  
正面と背後から両足首・両手首、そして頭蓋にそれぞれ単発で矢を  
射りタカの動きを完全に封じる。丁度十字架に貼り付けにされたよ  
うな形だ。

『聖矢・五重縛り』

タカのそれぞれ五箇所に刺さった矢からは光が煌びやかに光放ち、  
それぞれの矢から体の中心点へと線がスウィーツと引かれていく。五  
本の線が中心点で交わったとき、絶望したタカが声をさらに荒げた。

「た、頼む見逃してくれ！ もうお前等には関わらないから！ 頼  
む！」

「アンタの意見であの男が動くとも思えないな。悪いが却下だ」

一瀬は無情にもそう言うと五本の線の中心点に向かって矢を放った。放たれた矢は見事に中心点を貫き、夕方の悲鳴とともに激しい光に包まれていく。

そして光の中から落下する黒い影が見えた。それは全身にダメージを負った夕方だった。それを確認すると一瀬は携帯を取り出し、警察と救急車を呼んだ。

南部地方。

「アイスストリーム！」

山ノ井は再び魔法剣を麻耶に掲げると、麻耶に向けて冷たい氷が交じった突風が襲い掛かる。が、それは結局は魔術であって、魔術に耐性のある麻耶の鎧の魔装にはまったくと言っていいほど効果がなかった。

「ホンマに効かへんな。相性悪いし、どないしよう」

言葉とは裏腹に防戦一方の山ノ井は未だに余裕の笑みをみせていた。その笑みは果たしてハツタリなのかそれともまだ何か奥の手を隠しているのか、今の麻耶にはその判断ができず、懐に入ることが躊躇していた。

（何なの？ アイツのあの余裕。絶対不利だっていうこの場面であんな表情できるなんて）

山ノ井からは妙な恐ろしさがあった。麻耶は近接戦闘を得意とする格闘家であり、懐に潜り込まないとこっちの攻撃のペースを作ることができない。

恐らく相手の山ノ井もこのことは気付いているはずだ。だからこそ近接戦闘を持ち込みにくい環境を構築しているのだろう。

麻耶は考える。

(もう様子見は終わり。一か八か懐に入り込んでみよう)

麻耶はそう結論付け、山ノ井が仕掛けてくる魔術攻撃を鎧の魔装で無効化にし、一気に山ノ井の懐へと入り込んだ。

(入った！ 行ける！)

そう思った瞬間、麻耶の左肩にズンという衝撃が走った。何が起きたのか一瞬では判断できなかった麻耶は続けて、腹部にズドンという衝撃を受けた。鎧のおかげで、ダメージは最小限に済んだが、思わず声を漏らし距離を取る。何が起きたのか確認するため、山ノ井を凝視した。するとそこには、刀剣を持った山ノ井がいた。確かさつきまでは光輝く魔法剣だったはずなのに。

「驚いたやろ？ こいつが僕の秘密兵器。魔剣クリムゾン。魔法剣はこいつを隠すための目晦ましだったってわけや。考えとるやろ？」

不意打ちを受けた麻耶だったが、気分はむしろ向上してきていた。

「なるほどね。タネがわかればどうってことないわね。それにしても貴方、ちょっと油断しすぎじゃない？」

「油断？ ちやうちやう、これは余裕や。殺さへん約束やったけど、手元狂うて死んでもうても文句言わんといてな」

山ノ井には確かに油断があった。自分が絶対に負けないという自信があった。麻耶が仕掛けてくる攻撃は全て紙一重でかわせている

いるし、こちらから与えるダメージの方がまだあった。だが、麻耶は諦めていない。目がまったく死んでいなかった。

「厄介な目しとるわ。こういう相手は今のうちに潰しとくのが一番ええかもな」

山ノ井が魔剣クリムゾンを振りかざし、そして振り下ろす。麻耶は両腕でそれを受け止める。そんな麻耶の目を直視した山ノ井に急に背筋が凍るような寒気に襲われた。咄嗟に山ノ井は麻耶との距離を広げた。

「なんや、今の。なんや、あの眼は!」

麻耶の左眼には異常が起きていた。左眼だけが真紅の眼に変色していたのだ。それはまるでルビーをはめ込んだ眼のような輝きだった。

「あまりに時間かけるから出てきちゃったじゃない。まったく、こうなると力の制御が上手くできなくなるのよね。貴方、死を覚悟しなさい!」

山ノ井は咄嗟に危険を察知したが、麻耶の先ほどとはあまりにも速い歩法に体が付いて行けず、麻耶から多連撃を受けてしまった。

「霧咲流柔術、掌破五連撃・一〇連撃・二〇連撃・四〇連撃・六〇連撃!」

麻耶が繰り出した全ての攻撃は山ノ井の懐、各急所に多大なダメージを与えた。山ノ井は吐血し、そのまま地面に落下し意識を失ってしまった。

それを確認すると麻耶の左眼は元の黒い瞳に戻っていった。それと共に体にドツと疲労感が襲ってくる。

しばらくするとそこへ一瀬がやってきた。

「勝ったみたいだな」

「うん。そつちもみたいだね」

「警察と救急車を呼んである。事情は松原さんに話してあるから流れはスムーズに行くはずだ」

ちなみに松原という刑事は、祐樹達とは面識があり、こつこつ面倒な案件をいつも任せているのである。

「さつすが、手が早いわね」

「まあな。それじゃ、祐樹と胡桃さんが心配だ。急ごう」

「うん。あ、そうだ。コレ」

「何だ？ その剣？」

「戦利品。魔剣だつて」

「げっ、お前つて『魔』が付く武具好きだよな」

「いいじゃない。だつてかっこいいもん」

「変わってるよ、お前。つて行くぞ」

西部地方。

祐樹と変身し、鬼と化した悪鬼は戦闘を続けていた。悪鬼はデカイ体と豪腕などを活かした肉弾戦攻撃を仕掛けてきており、祐樹も雷撃による肉弾戦攻撃で対応しているのだが、どちらも決定的な一撃を与えることができずに現在までに至る。

(このままじゃ、ただの消耗戦になっちまうな。少し勝負を急ぐか)「考え事か？」

悪鬼の声に我に返った祐樹は唸る豪腕を紙一重でかわし、後退しながら体勢を整える。

「ふう〜、びつくりした」

「さつきから気にはなっていたんだが、その背中にある物は飾りか？」

祐樹の背中には刀が装備されていた。祐樹はその装備された刀を今まで一度も引き抜いていなかった。

「こいつは頑固でさ。使うべき時が来たら使うよ。使わないのは今がその時じゃないってことだよ」

「フフツ、オレがここまでバカにされるとはな。いいだろう。その刀、意地でも抜かせてやるぞ」

「別にバカにしてるわけでも、手を抜いてるわけでもないぜ。これから次の一手を打とうとしてたんだからな」

「ほおー、ならば見せてもらおうか」

「ああ、行くぜ」

祐樹はそう言うのと急に地上に着地し、大地に両手を当てて力を込める。

ビリビリッ！ バチバチッ！

と、祐樹が発する電撃が蜘蛛の巣のように四方八方に地を這っていく。と同時に大地から数多くの砂が祐樹を中心に舞い上がった。

「砂？・・・いやあれは・・・砂鉄か。その能力どうやら魔術的なものではないようだな。恐らくは超能力の類か。どちらにしてもややこしいことには違いはないか」

「いっくぜえー！」

祐樹は周囲に舞う大量の砂鉄を両手と電気で操り、一つ一つ小さな粒に形付けていく。

「当たれえー！ 砂鉄時雨えー！」

祐樹がそう言うと宙で浮いていた無数の小さな球体が弾かれたように悪鬼に向かって一斉に飛んでいく。飛んでいく球体の砂鉄の塊は、空気との摩擦により形をくさび形へと形状を変化させていった。月を背にしていた悪鬼は自分の影で祐樹の放った砂鉄時雨がハツキリと認識できなかつたため、退避が遅れ両腕を顔に持ってきて背中を丸め防御の体勢に入った。

悪鬼が防御体勢に入ると同時に、祐樹が放った砂鉄時雨が鋭い風切り音とともに悪鬼に襲い掛かる。その威力は重力に逆らっているものの、それなりの速度で飛んでくるため避けるのも難しく、防御に徹していても体中に浅いが傷を残すには十分威力のある攻撃だった。

「ぐっ、おのれ・・・クソガキが・・・」

「へへっ。それなりに砂鉄時雨は効いたみたいだな。だけど大したダメージじゃなさそうだな。もつと大技で決めていくか」

祐樹は右の掌を広げるとそこへ砂鉄が集まってきた。集まってきた砂鉄は細長い形状の刀の形に収縮した。刀剣の部分はチェーンソールのように振動して切れ味を何倍にもしている。

「これで決める。砂鉄刃！」

祐樹は力いっぱい地面を踏み込み飛び上がる。

「神速！」  
カムイ

電気の肉体活性化能力を使って移動歩法の速度を上げ、一気に祐樹は悪鬼へと突っ込んで行った。

「砂刃斬！」

この祐樹の横一文字切りに悪鬼は自分の腕を盾にして刃を止めようと考えた。自分の体表の堅さなら自信があったからだ。しかし、この自信も脆くも崩れてしまった。確かに悪鬼の腕は『砂鉄刃』を受け止めた。だがただ受け止めたわけではなく、肉は切断されたものの骨で『砂鉄刃』の刃は砕け散ったのだった。

この状況の驚いたのは他ならぬ当人達だった。祐樹は腕を切断させることができる为核心していたし、悪鬼は悪鬼で、必ず受け止めることができるという自信はあった。だが結果はどうだ。非常に中途半端だ。腕を半分切られた悪鬼。砂鉄刃を砕かれた祐樹。どちらも一瞬の隙を生んだが、互いに相手以外のことに取り気を取られていたこともあり、すぐに反撃が来ることもなく、すぐにお互い距離を取った。

(くっ！ 思ったより傷が深い。あの砂鉄の刀は要注意だ)

(切断できなかつたな。思ったより防御力高いぞ。砂鉄刃だけじゃ致命傷は与えられなそうだ)

互いに思うところがあり、多少の間ができた。

「ふう」

「？ この状況に深呼吸とは随分と落ち着いているじゃないか」

「あんたこそね。それだけの傷をガキ相手に受けたんだ。内心腹煮えくり返っているんじゃないかい」

「そうでもない。いい感じに血が流れているんでね。頭に回る血液はそれほど増えちゃいない。意外と冷静だ」

祐樹は周りに飛んでいる砂鉄を操り、じっくりとタイミングを狙っていた。

「そろそろケリつけようか？ これ以上は消耗戦で時間が掛かり過ぎる」

「そうですか」

祐樹は砂鉄刃を行使して悪鬼に攻撃を重ねているが、悪鬼にも考えがあり、妖気を斬撃に合わせて妖気の塊を移動させている。こうすることでその部分の防御力や攻撃力が増大し、斬撃によるダメージを極力減らしているのだ。

二人は空中を高速で移動しながら攻防を繰り返している。気が付くと辺りは、自然公園とは違う場所に来ていた。ここは燃料タンクなどが置かれている工場のようなところだった。

砂鉄を空气中に纏った祐樹は悪鬼の攻撃を辛うじてかわしてきていた。砂鉄がセンサー代わりとなり、瞬間的に反応速度をさらに速めていた。

空中戦に飽きた祐樹は地上へと降りた。それに合わせて悪鬼も地上へ降りて来た。悪鬼の後ろには満月のように丸い月が照らされている。

「お前の狙いはわかっているぞ。ここにある砂鉄や金属を操りオレの思考をかく乱させ、勝負を決めるつもりなのだろう？ だがそんな古い手には引っかけからんよ」

「そこまで読まれちゃってんのか。困ったなあ、やりにくい相手だよ、ホント」

祐樹はすかさず、地面に両手を置いて、それと同時に悪鬼の月明かりの影の部分がせり上がり一気に黒い塊が悪鬼を包み込んだ。まるで黒い液体に体を包まれてしまっているかのようだ。

影と同じ色でわからなかったが、実は影のところに砂鉄を隠し混んでいたのだった。しかも今までの戦闘で祐樹からの電撃を受けた悪鬼の体には電気が帯電しており、砂鉄がくっ付きやすくなっているのだ。そしてその砂鉄は祐樹が操っている。つまり、完全に鳥を鳥かごに捕まえた状態と同じことになったわけだ。

「キサマ！ いつの間に！？ だが、こんなことぐらいでオレを倒せると思っなよ。こんなものすぐにオレの妖気で払いのけて・・・」  
「させないぜ」

悪鬼の台詞に被るように祐樹は真剣な声で背中に装備していた刀を引き抜く。その刀は重く、電気を帯びると磁力の関係で重さが軽くなる特別仕様の物だ。刀というより太刀に近いその刀身には電子刀ならではの電撃残量が測れる目盛りが付いている。今の状態は完全に満タン状態だった。

「さっき言ってたよな。この刀は飾りかって。今回はこの刀を使わざるを得ない状況みたいだ」

砂鉄に押しつぶされそうな感覚を悪鬼は感じながら祐樹の言葉を聞く。

「これで、最後にしようぜ」  
「くっ、クソがああー！」

祐樹は電撃で勢いをつけ、電気を帯びた刀身を振りかざしながら一気に悪鬼の心臓に向けて刀を振り下ろした。結果、あの堅い体表

を意図も簡単に切り裂き、派手に血液が周囲に飛び散った。電子刀・紫電の恐るべき斬撃力に当人の祐樹も驚いていた。何せ、こんな使い方をしたのは初めてだったからだ。

振り下ろした刀を再び構え直す。鮮血がまだ飛び散っている。だがさすがは妖魔悪鬼、それだけではまだ力尽きなかった。口から傷口から血が流れ出ているもののまだ意識はあった。

（ちっ、なんちゅー生命力なんだよ。どうする……、ん？ アレは……）

祐樹は悪鬼との距離を測り、目線の先には燃料タンクがあった。

「オ……オレはまだ……負けてはいない……」

「確かに、だけどこれで本当に最後だ」

「溶解……閻魔弾!!」

悪鬼の最後の抵抗と同時に、祐樹は雷撃の神速と雷撃の剣術を合わせ。

「武神流剣術、雷刃らいじん・碎破墜撃剣さいはついきげん！」

襲い掛かるマグマの塊のような溶解弾を電子刀で切り裂き、悪鬼に対して切り上げ・振り下ろし・突きの連携技で瀕死状態だった悪鬼は、斬撃の衝撃で後方に吹っ飛ばされた。そして飛ばされた先にあった燃料タンクに激突し、その際に発生した火花で燃料タンクが大爆発を起こした。辺りは一瞬の内に一面炎に包まれた。溶解弾の影響もあり、その炎が他の燃料タンクにも引火し更なる爆発を起こした。このままここに居ては危険と考えた祐樹は早々に退散することにした。

悪鬼を打ち負かした祐樹は辺りの戦況を探っていた。

(一瀬・麻耶は勝ったみたいだな。まああれくらいの相手なら問題なかったろうな。問題はアイツだな)

アイツは土御門胡桃は未だに妖術師、白堂刹那と戦闘中だった。しかも戦闘している場所は、北部地方から移って、祐樹の自宅付近に移動していた。

「よっ、終わったみたいだな」

一瀬が麻耶とともに祐樹の元へとやってきた。

「相手は？」

祐樹は火の海となっている工場を顎で指した。

「派手にやったなあ、殺したのか？」

「わっかんねえー。結構手強かったからな」

「ああ、その姿を見れば大体は想像つくよ」

祐樹の全身の服は所々破れており、そこからは幾つかの傷から血が流れていた。

「大丈夫か？」

「問題ねえ。それよりアイツが心配だ、ちょっと行ってみようぜ」

「そうね」

「うん」

悪鬼に辛くも勝利した祐樹は、一瀬・麻耶と合流し、胡桃と刹那が戦っている地点へと急いだ。

大河邸付近。

四獣一狼という攻撃的布陣で挑んだ式神での攻撃は妖術師、白堂刹那に着実とダメージを与えていた。ご自慢のシルバーアクセサリーが自分の血で汚れていく様を見るのは非常に心地いいものではなかった。

「面倒くせえ……。面倒くせえーんだよ！」

刹那は式神の攻撃をかわしながら、遠距離での攻撃を迫られていた。

こちらの式神は、まずは朱雀。こいつは中・遠距離攻撃を得意とする式神であり、小回りの利く動きをするのが特徴だ。姿は紅く所々にオレンジ色の炎のような羽が印象的な鳳凰のような姿である。

次に青龍。こいつも中・遠距離攻撃を得意とする式神であるが、朱雀のように小回りが利かないため、それほど気にかける必要はないのだが、攻撃力はとてつもないという特徴がある。青龍ということもあり、その名の通り姿は青い龍である。鱗は鮮やかな蒼さを放っている。

次に白虎。こいつは近・中距離攻撃を得意とする式神であり、攻撃力が高いことが特徴である。白い獣の代名詞と言われる白虎は、ホワイトタイガーをイメージさせる姿をしている。

次に遁狼。こいつも近・中距離攻撃を得意とする式神であり、俊敏性はどの式神よりも高いのが特徴である。基本は狼の姿をしているが大きさは馬一頭を少し大きくしたような大きさがあり、両目の下にある切り傷のような模様が印象的だ。

最後に玄武。こいつは近距離の防御を担当する式神だ。もちろん攻撃もできるのだが、隙が多い上に高い攻撃力の期待ができないのが難点である。最強の防御力を持つ玄武は、見た目は亀の姿をしているが、その堅い甲羅は鋼よりも堅いと言われている。

「さすがは、最強の戦法。イラつくくらい攻撃面、防御面で隙がねえーな。だが、これだけの高等な式神を操って体力の方はどうなんだ？ え？ もうかなりキツインじゃねえーのかい？」

遁狼に寄りかかり、息があがっている胡桃は、必死の形相で刹那を見ていた。

「私にも意地つてのがあんのよ。黙ってアンタなんかはこの力くれてやるもんですか！ 絶対に負けないんだから！」

「言葉とは裏腹に息が随分とあがっているようじゃんよ。無理は体に毒だせ。大人しく捕まれや」

「忘れてもっちゃ困るわ。今は私の優勢。覚悟するのは貴方の方よ」

「そうかい。なら形勢を変えさせてもらうか」

「？」

刹那がそう言うのと妖術師の真の実力を発揮しようとしていた。巻き上がる霊気と妖気。人間の妖術師だけが使える、霊気と妖気の混合闘気。そのオーラが刹那を中心に空高く巻き上がる。

「妖道霸気・天獄翔光霸！」  
てんごくしょうこうは

刹那は霊気と妖気の混合闘気を天の上で凝縮させ、両の掌を胡桃に照準を合わせて放った。赤い光に黒い影が纏っているエネルギー波のようなエネルギー砲が胡桃に向かって放たれた。胡桃の間に朱雀・青龍・白虎・玄武の四聖獣の式神が防御に入る。

「ダメ！ 下がりなさい！ それを受けてはダメ！」

何かなんでも主人を守るといふ意思の下、式神は動いている。そ

のため、胡桃の命令を彼等は今回初めて無視をした。その結果、四体の式神は体が四散し、完全に蒸発してしまった。胡桃はというと遁狼の俊敏な動きで攻撃を何とか回避していた。

「よく俺の『天獄翔光覇』を避けたな。四聖獣の犠牲なしには無理だったか？」

『天獄翔光覇』とは、触れたものを硫酸にかけたように蒸発させてしまう、非常に高レベルの妖魔術である。普通の魔術とは違い、妖魔が扱う妖気を使用するところが特徴なのである。

刹那はにんまりと笑みを見せて、宙に舞い塵となった式神の元となる紙切れを掴み、グシャと握り潰して粉々にしてしまった。

胡桃は、思わず怒りが込み上げてくるのを必死に抑えながら状況をよく把握する。今できることの最善の手は何なのか？ 何か手はあるのか？ そう考えている内に周囲の状況をよく把握することができた。だがそれは相手もまた同じであった。

「なんだよ。タカに山ノ井、それに悪鬼もやられたのかよ。信じられないな。あのガキ共相手に負けるなんてな。お前、いい仲間見つけたな」

その刹那の言葉と同時に祐樹・一瀬・麻耶の三人は胡桃・刹那の戦場に到着した。祐樹は一部のみだがこの近くで戦っていた彼等の戦いについて麗華に聞いてみた。どうやら今は胡桃が押され気味らしいと。

「おい！ 刀背負ってる少年。お前、悪鬼に勝ったんだな。若いのになかなかやるじゃねえーか。どうだ？ 俺と共に行動してみるってのは」

祐樹はふて腐れた顔で反論した。

「ふざけんな！ 俺はそこまで落ちてねえっての！ なあ？」  
「ああ、自分の欲で他人の命を奪うってのは絶対に許されることじゃない」

一瀬が祐樹の代わりに反論すると刹那は溜め息をついた。

「お利口さんなこつた。なら、お前等この戦いは邪魔するなよ。手出したら即刻抹殺決定だからな。最初に決めた約束だ。俺は約束は守る」

「んな、信用できつかよ！」

祐樹のそんな発言に胡桃が割り込んできた。

「大丈夫。アイツは約束だけは守る。そういう人間よ。安心なさい」  
「でもそれじゃ、アンタ・・・」  
「負けるつもりはもうとうないわ。それにまだ手は残っている。だから安心なさい」  
「ちっ、心配してやってんのに、かわいくねえ」  
「後で殺すわよ」  
「ご、ごめんなさい」

祐樹と胡桃の会話を楽しそうに聞いていた刹那は話のキリがいいところで、話を元に戻した。

「まだ手が残ってたのか。面白い。やってみせろよ。俺が耐えられるか勝負してやる」

刹那には絶対の自信があった。強さではすでに陰陽師を越えてい

るのだろうか、妖術師としてはまだ半人前。彼の足りない部分は正にそこだった。安倍清明の力を受け継がれし人間の力を手にすることにより、より妖術師として完璧になるといふことなのだ。つまりは、妖術師としては完璧ではなくとも、陰陽師に遅れをとることはまずないという自信があつたのだ。

胡桃は祐樹達から離れ、刹那と向き合つた。

「どうした？ 最後の賭けなんだろう？」

「そうよ」

胡桃が一言強気にそう言つと、単語帳を取り出しパラパラと捲りその中から一枚切り離した。相手が油断している今が絶好の好機。切り離れた一枚の紙を口で加え、両手で印を結ぶ。そして印を結んだ手で紙を手取る。

「四獣支柱！」

胡桃がそう叫ぶと、手に持っていたペラペラな紙がピシッと板のように固まつた。だが変化はそれだけではない。東西南北。すべての地域から輝く光の柱が立ち上つていたので。

「ほう！ 随分と大掛かりな仕掛けだ。この後はどうなるんだ？」

余裕を通り越して完全に油断をしている刹那は、どんな攻撃でも真つ向から受けて立つという姿勢が感じ取れた。

一方胡桃も刹那がここまで油断してくれるとは思っていなかった。それだけに心配でもあつた。これが奴に効かなかつたら今までの作戦はまったくの無になるどころか、私は完全に刹那に負けてしまうという葛藤が渦巻いていた。



取られていた。

「すげえ迫力・・・」

祐樹はただ呆然と立ち尽くしていた。だが胡桃が大分疲弊していることに気付いた祐樹が近くに駆け寄り、体を支えた。

「おいおい大丈夫かよ？」

「誰に言ってるの？ 大丈夫に決まってるでしょ。ぐっ」

祐樹の手を払いのけるが、やはり疲弊しているせいか体がいうことを聞かない状態のようだ。

「無理しねえで掴まれよ」

「バカね、戦闘中よ。まったくかっこ悪いわね、私」

だがその時、一息ついた祐樹達の様子を一変させる出来事が起きた。

「がっ！ があああああああ・・・ぐぐぐっ・・・」

金色の光の中から刹那と思われる声が聞こえてきたのだ。

「そんなバカな！ こんな圧倒的な破壊力のある攻撃を耐えているというのか？」

一瀬はこのとき初めて恐怖を覚えた。正に相手は化け物染みた強さを持っていたのだ。例えるなら、空から降ってくるジェット機を片手で軽く受け止めていると同じぐらいの凄さと大陸を一瞬で消し飛ばすような恐ろしさがそこにはあった。



えー。この陰陽師を賭けた勝負だ。陰陽師が負ければそっちの負けなんだよ」

刹那はいつの間にか荒くなっていた息遣いが正常に戻っていた。一方で息遣いが荒くなっている胡桃は立ち塞がる祐樹の肩に手を預け立ち上がる。

「そうよ。これは私とこいつとの戦い。邪魔は入れさせないわ」  
「ハンツ！ そういうわけだ。てめえらは下がって決着を見てればいいんだよ」

祐樹は仕方なくその場から下がった。胡桃の目には闘志が漲っていたからだ。まだ終わっていない。そう感じさせる目だった。

だが、そんな闘志とは裏腹に陰陽師、土御門胡桃が繰り出す攻撃は妖術師、白堂刹那にそれ以上のダメージを与えることはできず、必死の戦いの末、敗北という結果になってしまった。

東の空が明るくなってきた。朝が近づいている。

結局、白堂刹那は祐樹達には一切手を出さずに土御門胡桃の体を肩に担いでその場を去って行ってしまった。仲間がやられたことに閉しても何も追求してくることもなかった。仲間を信用していなかったのか、はたまたは興味がなかったのかかわからないが、自分達にやられた刹那の仲間が気の毒だった。

だが祐樹はそれ以上に自分自身に腹を立たせていた。あの時何故助けに入らなかったのか？ タイマンという約束の下戦っていたからか？ いや違う。恐かったのだ。恐ろしかったのだ。あの白堂刹那という男の強さに完全に腰を抜かされていたのだ。何の準備もなしでは勝つことなんてのは到底無理な話だった。じゃあ準備を事前にすれば勝てるだろうか？ 祐樹は必死に自分にある引き出しを荒

しまくった。そしてある答えに辿りつくのであった。

## 第一話 中等部編〜雷神降臨〜

東の空にはもうすでに太陽が昇っていた。

戦いから数時間が経過した。戦いの疲れもしくは敗北したこともあつてか、一階のリビングで一同はしんみりとした雰囲気にも包まれていた。

「これからどうする？」

一瀬がしんみりとした空気の中、一人の人物が発言した。

「どうするって決まってるんだろ！ 敵陣に乗り込む！」

しんみりとした空気の中、一人祐樹はまだ諦めていなかった。

「乗り込むってどこに行けばいいのよ。場所がわからないじゃない」

そう、こつちには探知系能力者はいない。探す手立てはまったくなかったのだ。

再びしんみりとした空気が辺りを包む。その時、二階から物音が微かに聞こえた。

（何だ？ まさか敵襲か？）

そんな緊張感の中現れたのは、鳥を模したぬいぐるみのような生き物？ だった。

(何だ？ こいつ？)

一同の心の声はハモるかのようなタイミングで心の声を呟いた。その姿はベトナムの三角帽子ソンラーのような帽子を被っており、小さな黒い嘴、鳥のような黒い羽、妖怪でいう烏天狗をマスケットキャラクター化したかのような容姿に、浴衣のようなラフな衣装を着ている。

(何なんだ？ この訳の分からん生き物は・・・)

一同が騒然としていると妙な生き物を見た麗華が一言言った。

「か、かわいい・・・」

「・・・え？」

そこにいる麗華以外全員が麗華に発言に否定的なことを考えているとその妙なマスケット的な存在の生き物が言葉を発した。

「胡桃様から仰せつかりましたす。明神と言う式神です。以後宜しくすす」

「式神ってあの人は捕まっただはずじゃなかったのか？」

一瀬の疑問に明神という式神が答えた。

「実のところ我が明神という式神は陰陽師の意思とは別に行動できる特別な式神なんすよ。我が明神は式神を指揮する式神なんす。で何故我が明神がここにいるかと言うとですと、胡桃様が貴方方の身を案じて我が明神をここに待機させておいたんすよ」

「俺達の身を案じてってどういうことだ？」

祐樹は何か引つ掛かるものを感じたので質問した。

「貴方方の性格ならば、自分にもしものことがあった場合、必ず妖術師に反撃を仕掛けるだろうと予測していたっす。我が明神はその助けをするためにここに残されたっす」

「助け？ 止めるためじゃなくて？」

予想外の発言に麻耶は思わず質問した。

「胡桃様の予測では、止めても無駄だろうということでしたっす。それなら有益な情報を与えて少しでも生き残れる可能性のある方法を取ろうと考えたわけっす」

明神という式神の話聞いて、この今の状況をまるで予言していたかのような胡桃の考えに一同は驚嘆していた。その有益な情報とは何なのか？ 明神を問い正すと何やら条件を付きつけて来た。

（こいつ俺らに協力しようとしてるのかそうでないのかどっちなんだ？）

そんな疑問を感じつつも要求した大好物だという酒のつまみのするめイカを食べ始めた明神はご機嫌になり、スラスラと話し始めた。

「狙い目は儀式が行われる今夜っす。儀式が執り行われる時は、妖術師の力が最大限弱まる時期でもあるんす。だから向こうもそれなりの対策を講じていると考えられんすが、先の戦いで戦力を大幅に減らしたこともあり、向こうもそれなりの焦りがあると思われるっす。胡桃様を助けられるのは今夜だけっす」

明神の話聞き、祐樹や一瀬・麻耶は三人で相談を始めた。取り残された明神は自分が無視されているかのような孤独感を感じながらするめイカを食べていた。

「上手くいくかどうかわからないが、その方法で賭けてみるか。いや、それしか勝てる手段が見つからない」

「そのためには、陽動が上手く働かなけりや意味がないな。俺と麻耶でなんとかその辺は上手くやるよ」

「ねえ、明ちゃん。妖術って魔術とどう違うの？」

いきなり麻耶が馴れ馴れしく明神のことをあだ名で呼んだことに明神は奮起しそうになったが、一旦気持ちを抑えて質問に答えることにした。

「魔術の起源は妖術だと言われている。その後魔術は妖術よりも使い勝手がいいということで、独自にいろいろと宗教ごとに派生していった。今の形になっている。それがどうかしたっすか？」

「いやね、鎧の魔装は妖術にも耐性があるのかなって思ってたね」

「それなら大丈夫っすよ。妖術と魔術は起源が一緒なので、根本的にはそんなに違いはないっす。ただ術の発動する手順が異なる程度なんすよ」

そんな話をしている内に時刻は昼の正午になっていた。さすがに空腹になってきてしまったので、みんなで昼食を摂る事にした。

正午のニュースでは昨日戦った現場のニュースが報道されていた。不可解な現場の惨状に戸惑う記者達。その事実を知っている祐樹達はなんだか思っていたよりも事件が大々的に取り上げられていたことで少し驚いていた。

それと今夜の天気は降水確率が八〇%というものだった。そこでふと祐樹に疑問が浮かんだ。

「なあ、儀式つて月が見えなくてもやれるもんなのか？」  
「いいえ、儀式は月光の下で行われるのが必須条件つす。おそらく、時間が来たら空に向かって砲撃でもして空の雲を散らそうという魂胆つすよ。もしくはは儀式場に特別な細工をしてその部分だけ雲が陰らないようにしてるという可能性も捨て切れないつす」  
「向こうも色々と考えて準備してんだな」

それだけ、今回の儀式が重要な意味を持つということなのだ。白堂刹那にとつて、人生の分岐点と言つても過言ではない。これが成功するかしないかで今後の人生が大きく変わる。だからと言って、人の命を犠牲にしてまで、人生を変えるなんて間違っている。祐樹自身はまだ幼いところもあるが、それが間違っている選択肢であることは間違いなく合っているだろう。

「で、逆探はどうするよ。居場所がわかればいいんだが」  
「わかるつすよ」

「……へ？」  
「これでも陰陽師に仕えて数十年ですから、そういう主の居場所くらい余裕つすよ」

パコツ！ ベギン！ スパコーン！

祐樹達三人の突っ込みが明神に炸裂した。

「い、痛いつす。これでも式神を束ねる偉い神なんすよ。もっとデリケートに扱ってほしいつす」

「いや、なんかその軽いノリにカチンと来たと言っか」

「怒りが込み上げてきたと言っか」

「その怒りで思わず手が出たと言っか」

祐樹・一瀬・麻耶は、明神の軽いノリと天然なところに怒りを覚えたようだ。ともあれ、相手の居場所もわかるといふこともあり、彼等は少し休息を摂ることにした。昨夜から起きっぱなしだったこともあり睡魔に襲われる一同。目覚めたら妖術師との最終決戦が待っている。

スラム街では妖術師の儀式の準備が行われていた。低級の使い魔の妖魔達は力仕事を担当し、知力を持つ人間はその妖魔達に指示を出していた。

当の妖術師、白堂刹那はシャワーを浴びながら全身の痛みを苦しんでいた。その痛みの原因は今朝陰陽師、土御門胡桃と戦った際に受けた攻撃による傷であった。妖術師としての力が落ち始めている現在、治癒の力も同時に落ち始めていたのである。

「くっ、面倒な攻撃しやがってあのアマ」

刹那はシャワーを止め、バスタオルで全身を拭う。それだけでも全身に激しい痛みが電気のように走る。痛みを耐えながら服を着て拘束されている土御門胡桃の下に行った。まだ意識は戻っていないようだ。

「ま、当分は目覚めねえだろうな。自決されてもバカらしいしな」

刹那は背後からした音に反応し、腰を下げていた刹那は立ち上がり振り向いた。そこに立っていたのは、祐樹が倒したはずの悪鬼だった。

「よう！ 随分と派手にやられたじゃねえーの。まさかあんなガキにお前が負けるとは思ってなかったぜ」

手負いの悪鬼は傷のせいかどこか暗い表情をしていた。

「言い訳はしません。油断をしていなかったと言えば嘘になりますかね。心臓も一つ潰されてしまいましたし。それにしてもワタシはともかく貴方までがそこまでの深手を負うとは思っていませんでしたよ」

「最後の悪あがきをされてな。だが手に入った。あとは儀式を待つだけだ」

「あの子らがやってくるんじゃないんですか？」

「そうだったな。あのガキ共ならまたやってくるだろうな。だが想定内の範囲だ。なんとかなる」

「ですが、あの彼には気をつけた方がいいですよ」

「お前と戦った奴のことか？」

「最初に対峙したときに陰陽師の隣にいた彼ですよ。どうやらエレクトロマスターのようです」

「ほう！ 超能力者か。それでお前が敗れたわけか。上手く能力を使ったんだろうな」

「ええ、上手いものでしたよ。常に行動の先読みとこっちの考えの裏をついてくる。戦闘経験は我々程ではないにしろ、戦い慣れていましたよ」

「なるほどな。タカも山ノ井もやられたようだし、侮るとこっちが痛い目に合いそうだな。それに十中八九、俺の力が最弱になったときを狙ってくるだろうしなあ。そのときは悪鬼、お前を利用して

もらっぜ」

「ええ、構いません。どうせこの怪我ですからね。普通に戦うのも難しいかと思えますのでね」

刹那はその場から立ち去ると悪鬼も続いて立ち去った。そのタイミングを見計らってか、胡桃は目を覚ました。

そして夕刻。

西の空に太陽が沈みかけている時間帯に祐樹達は最終決戦の準備をしていた。明神が言うにはここから約一〇キロ程離れたスラム街に妖術師達は拠点を置いているようだった。

そんな祐樹はテレビを点けて天気予報を見ていた。この地域の降水確率は五〇%だという。何ともハッキリとしない天気である。

「一瀬、どう思う？」

祐樹はテレビに映し出された雨雲の流れを一瀬に見せていた。

「作戦通り行けそうだから。お前は俺を信じてればいい。その信頼を俺は全力で答えるだけだ」

「おっしや、任せたぜ！ 一瀬！」

「おお！」

そんな二人の様子を見ていた明神が麻耶に疑問をぶつけた。

「あんな行き当たりばつたりの作戦で大丈夫なんすか？ 何だか物凄く不安になってきたっす」

「大丈夫よ、明ちゃん。アイツ等あれでもそれなりに上手くやってここまで来れたんだから。今回も絶対上手く行くわよ」

「麻耶様がそうおっしゃるのならいいですけど。やはり心配です」

二人が後ろで話しているのを気付いた一瀬が祐樹に小声で話した。

「今回は最悪アレを使わざるを得なくなるかもしれないな」

「安心しろって。アレなしでも何とかしてみせるさ。でも仮に暴走しちゃった場合は一瀬、頼む」

「はあ、また面倒な役割を担当するハメになるのか。ま、手加減するつもりはないからその時は覚悟しろよ」

「了解」

太陽が西の地平線に沈み、辺りは闇に支配されつつあった。街角の街灯が灯る。空は雲が掛かっていて星空も月も見えない。僅かだが、月明かりが見える程度だった。

「そんじゃ、出陣と行きますか！」

祐樹が準備万端という威勢の良さで先陣を切ると一瀬達が突っ込みを入れた。

「場所、わかってんのか？」

「祐樹が仕切ってるのが何かムカつく」

「我が明神の探知能力をまずは当てにしてもらいたいっす」

「うっ、わ、わかったよ」

祐樹は二人と一匹に突っ込まれながらも視線は前を向いていた。

「絶対生きて帰ってきなさいよ！ ご馳走用意して待ってるから」

「サンキュー、姉ちゃん！」

麗華の声援もあり、再び自信を取り戻す祐樹、妖術師の儀式を阻止するため目指すはスラム街。

同刻、スラム街。

意識を取り戻した胡桃は、何かの台座に縛られていた。まるで十字架に貼り付けにされているかのような姿だった。手首や腕、足首や膝、胴体に首に縄が絞められている。首の部分だけは窒息の可能性があるからか、緩く縛ってあった。

胡桃は陰陽師としての能力を使用しようとしたが、まったく反応がなかった。よく縄を見るとそれはただの縄ではなく、特殊な呪縛縄で相手の能力を封じる力を持つ縄のようだ。縄を外すどころか、能力も使えない。正しく手も足も出ない状況だった。ただ死を待つだけなのか。

だが胡桃は諦めてはいなかった。昨日出会った祐樹達が恐らくここへやってくるだろう。一日しか一緒に過ごせていなかったが、彼等の性格はなんとなく理解できた。文字通り、正義感の強い子供。そのままである。

無駄な足掻きはやめよう。もう自分自身ではどうすることもできない。人事を尽くして天命を待つ。やれることはやった。あとはもう運命が決めることだ。そう覚悟を決めると階段を下りてくる足音が聞こえてきた。扉が開かれるとそこには当然のことながら白堂刹那が立っていた。右腕には包帯が巻かれ、胸元が開いたシャツからも包帯が見て取れる。

「目覚めた気分はどーだ？」

「最低ね。それにしても貴方、大層な傷を負ってるじゃないの。思っていたよりもダメージがあったのね。安心したわ」

「安心だと？」

刹那は胡桃から思いもよらない言葉がでてきたことに疑問を感じた。

「その傷に力の誓約。今のあの子等でも十分太刀打ちできそうってことよ」

「その前にお前は死ぬ」

「儀式は五三つ時まで。それまでは私は心臓を取り出されても死なないことはわかってる」

刹那の顔が険しくなる。

「よくその情報を仕入れたな。感服するぜ。にしてもだ。俺がキサマの心臓を手に入れば弱まっていた力も元の力以上に回復する。キサマでも勝てなかった俺にあんなガキ共が勝てるとは到底思えねえーんだがな」

胡桃は笑みを浮かべた。

「分かってないわね」

「何がだ？」

「あの子らの絆の強さを・・・よ」

「ふん、くだらんな」

その時、外から巨大な爆裂音と振動が複数回した。

「ん？」

「ほら、来たわよ」

膨張したエネルギーの矢が廃ビルに向かって飛んでいく。すると接触と同時に凄まじい爆発を起こして廃ビルの一角が吹っ飛び、瓦礫が道路にゴロゴロと転がり崩れていく。

「一瀬、アイツの搜索もいいけど、アレの準備の方も頼むぜ」

「分かってるよ。麻耶、援護を頼む。明神は祐樹にくっ付いてるよ」

三人とは違い、空中で羽をバタつかせている明神は明らかに嫌そうな顔をした。

「何だ？ 文句あんのかクロスケ！」

「クロスケじゃなっす、明神様と呼べっす！」

「この野郎、敵陣のど真ん中だつてのに我が儘言いやがつて」

祐樹は握り拳を作りながら明神を威嚇する。その間に麻耶が仲裁に入った。

「明ちゃん。お願い、ここは一瀬君の言う通りにして・・・ね？」

「はい！ わかったっす！」

「はい、これでOK」

「何か、ドツと疲れが押し寄せてきたわ・・・」

祐樹は明神のコロリと変わる態度とか男嫌いなところとか色々と頭にくるところが多くあったが、やはり胡桃のことが心配なのだから

う。自身も搜索に積極的に祐樹に付きながらだが参加していた。

祐樹は空中から、一瀬と麻耶は地上から搜索することにした。すると地下からぞろぞろと地上部隊が現れ始めた。周りを見渡すと廃ビルの中からもこちらを狙撃しようとしている者もいた。

「あつという間に囲まれちゃったな。廃ビルにいる狙撃手はなんとかする。麻耶はこいつらの相手を頼むよ。もちろん、俺も多少は手助けするけどな」

「えー、こんなに？ まあいいけど、案外人使い荒いのね、一瀬君つて」

地上に出てきた相手の武装勢力は五〇人程で、廃ビル内には一〇人程の狙撃手がいると思われる。

「いいわ、霧咲流柔術秘伝『鏡花水月』をお見舞い差し上げてあげますよ」

麻耶は籠手を両手の拳を合わせるような動作をして構えに入る。掌を突き出す独特の構えから柔歩による歩法で相手の軍勢に向かって突進していく。

相手の軍勢もその勢いで突撃し、中には空中を滑降しながら仕掛けてくる者もいた。だがそういった類の相手は一瀬が対応した。一瀬は今回は爆発させるような矢ではなく炎を纏った矢を放っていた。一瀬はこの戦い、この炎の矢で全ての敵を倒すつもりのようなのだ。そこには深い訳があるのだが、ここでは語らないでおこう。

狙撃手に関しても一瀬が事前に位置を察知し、先制攻撃を仕掛けていた。これには事前に念密な準備があつたから為しえたことである。

彼等は事前に一瀬の実家で呪術による戦法の準備をしていた。元々陰陽師の力は呪術に由来するということから、今回の戦いに役

立てることができると核心して準備を進めていた。

一方、空から搜索している祐樹は、翼を持った妖魔が複数こちらに向かって飛んでくるのを目撃した。

「ち、無駄な力は使いたくないってのにな」

そんな時、地上からその妖魔目掛けて炎の矢が複数飛んできた。地上の一瀬からの援護である。攻撃を受けた妖魔は次々と燃え散れ落下していく。

「ナイスアシスト、一瀬」

そんな光景を尻目に、胡桃の搜索を続ける。と思った矢先、目の前に一人の男が現れた。その男こそ、妖術師、白堂刹那だった。

「よう。こうして話すのは二度目だな」

以前のような恐怖はない。祐樹はいつでも戦闘モードに入れるように明神を引き離れた。

「警戒するな。まだ何もしない」

「？」

「あそこを見てみな」

刹那が指指す方向に目をやると、頑丈そうな廃ビルの屋上に見覚えのある姿が二人いた。

「！ 胡桃に、それに・・・あれは・・・まさかあの鬼か・・・？」

廃ビルの屋上では十字架のようなものに拘束されている胡桃とそ

の傍にいる倒したはずの悪鬼の姿が見て取れた。

「人質か？」

「そんな姑息なことはいしねえさ。ただこれ以上街を破壊されたくないってだけだよ。これでもこの街は気に入っているんだ」

祐樹は刹那の状態に疑問を感じた。確か明神が言っていたのは儀式の前は力が弱まるということだったが、目の前にいるこいつの妖気はなんだ？ 今朝までとは比べ物にならない程力をつけている。こんな短時間にそんなことがあるのか？ そんな疑問を抱いていたとき明神が何かを悟ったのか、初めて祐樹に話しかけた。

「まさか、あやつ、胡桃様の心の臓をとりこんだのでは・・・」

「なっ？」

「察しがいいな、式神。ハッキリ言った方がスッキリするだろう。答えはイエスだ」

刹那の目の前で爆弾が爆発したかのような激しい音と衝撃波が襲ってきた。近くにいた明神は焼き鳥にならないように瞬時にその場から離れていた。

「てめえ、アイツを殺したのか？」

怒り狂う祐樹に冷静な声で刹那は説明する。

「安心しろ。まだ死んではない。儀式が完了するまでまだ猶予はある。が、このままだと確実に死ぬな」

「死なせねえ！」

「いいねえ。面白い。どれだけできるかわからんが、止めてみな！」

祐樹の全身に迸る電撃。一方でゆらゆらと不気味なオーラを放ちながら首に掛けたシルバーアクセサリーのネックレスを握っている刹那。両者の戦いが今始まるうとしていた。

低級妖魔やチンピラ達は、麻耶の攻撃でほとんどが吹っ飛ばされてしまっていた。また貫通力のある炎の矢で対応していた一瀬もまたほとんどの敵を狙い打ってしまった。どちらも相手との戦力差があり過ぎて呆気ない幕切れだった。

「これでここにいる粗方の敵は殲滅できたかな」

「みたいね。それにしても一瀬君、調子悪いの？」

「え？ 何で？」

「いや、やたら雑な戦い方だったから、何本も空に向かって矢を射ってたから気になったのよ」

麻耶の言う通り、一瀬は飛び掛ってくる敵に対して全力とも思えるような本数の矢を放っていたのだ。それも空に向かってだ。

「ああ、あれね。その内わかると思うよ。さ、そんなことより胡桃さんを探そう」

「あ、明ちゃんだ！」

麻耶が指し示す方向に急加速で突っ込んでくる明神。見事に一瀬の顔面にクリーンヒットした。

「痛え・・・、何か恨みでもあるのか、お前」

「も、胡桃様を発見したっす。あの廃ビルの屋上なんす」

明神は非常に慌てており、一瀬の言葉も耳に入らない状態だった。

その状況を把握してか、一瀬もそれ以上追及しなかった。とりあえず、明神が見たという廃ビルの屋上へと一瀬と麻耶は明神と共に向かうことにした。

祐樹と刹那の戦いは熾烈を極めるものではなかった。怒りに任せに祐樹が攻撃を仕掛けるが、攻撃が直線的で読みやすく、刹那に簡単に攻撃をかわされてしまう。しかも自慢の『雷帝モード』状態で歩法でも刹那を捕らえることができなく、祐樹の体力が一方的に減らされていくという悪循環に見舞われていた。

「くそっ！」

「おいおい、期待外れだぜ。その頭に昇った血下げねえとあつという間に負けちまうぞ」

刹那はそう言うで一瞬で祐樹との間合いを詰め、祐樹の胸に右手を添えると、ドン！ という音と同時に衝撃波が襲い、勢いよく祐樹が弾き飛ばされていった。

飛ばされた祐樹は何故今自分がこんな状況に陥っているのか理解できる程頭が回っていなかった。肺の中の空気が一気に吐き出されるような感覚に陥ったがそれでも上体を半回転させて霊粒子を複数枚構築して、それがクツシヨンの役割を果たして衝撃を和らげ、ようやく飛ばされた勢いが止まった。

口の中に鉄の味が広がった。どうやら出血してるようだ。だがそれがきつかけで祐樹は先ほどよりも頭に昇った血が引いたのか冷静に物事を考えられるようになっていた。

（確かにさつきは頭に血が昇ってたけど、それでも接近戦は多少こちの分が悪いかもしれぬ）

空中を歩いて近づいてくる刹那に対して祐樹は『雷帝モード』のフルパワーで体に逐電していく。

ビリビリッ！ バチバチッ！

祐樹はその状態から両手を前に差し出し、電撃の棒状の物を創り出す。

「!?!」

刹那はその凄まじいエネルギーの塊を目にして表情が真剣な眼差しになった。

(あれはまともに受けたらヤベエかな)

祐樹は創り出した電撃の槍を右手に持ち振りかぶって投げた。

「おりゃあああああああああああ！」

(!! 速え!!)

刹那に向かって投げられた電撃の槍は音速のスピードをも超えて突撃し、眩い閃光に辺りが包まれた。それと同時にビリビリバリバリと電撃の凄まじい音が響いていた。その閃光が消える頃には刹那の影はそこに既に存在していた。

「ちっ、マジかよ」

攻撃をまともに受けたかと思われた刹那は、両手を胸の前でボールを受け止めるような構えで立っていた。手の中には黒いブラックホールのようなものがそこにはあった。

「何とか間に合ったな、『闇飲み』が」

闇飲み。

正しくブラックホールと同じような働きをするもので、一部の物質を除く全ての物質を吸い込むことができる妖術である。

刹那は祐樹の雷撃の槍が放たれた一瞬の間にその特質を見抜き、妖術を使用したのである。それだけ刹那は戦闘経験豊富な人間であり、対して祐樹はまだ中学生。戦闘経験の差は火を見るより明らかだった。

「今のは驚いたぜ。でもこれが戦闘経験の差ってやつだな。次はこっちから行くぜ」

刹那の姿が瞬時に消える。それに合わせて祐樹も電撃歩法で移動する。

「神速！」  
カムイ

「遅え！！」

「がっ！！」

移動した先に割り込まれ顎に膝蹴りを受けた祐樹。脳が揺らされ平衡感覚が乱れる。さらに刹那は追撃し、祐樹は顔や体に複数の打撃が連続的に加えられ、攻撃を受けた祐樹はそのまま廃ビルの屋上に落下した。そう確認したはずの刹那は、廃ビルの屋上に立ちこめる煙の中に祐樹がいないことに気が付いた。

「どこ行きやがった？」

すると背後からバチッ！ という音がし、振り返ると電子刀を振りかざした祐樹がいた。刹那の隙についての攻撃は間違いなく当たると確信していた祐樹は予想だにしていなかったことが起きた。

「!？」

「なんだよ、不意打ちでこの程度かよ？」

「そんな・・・」

刹那は祐樹が振り下ろした電子刀を意図も簡単に手で掴んで止めていた。

「がっかりさせやがって。この代償は高くつくぜ」

そして再び刹那は、祐樹に対して攻撃を加え、電子刀諸共、祐樹は廃ビルの屋上へと落下していった。落下した廃ビルの近くの廃ビルには土御門胡桃が拘束されている廃ビルと比較的近い距離の場所だった。祐樹は体を起き上がらせて拘束されている胡桃の方を見る。絶対に負けるわけにはいかない。そんな気持ちで祐樹の心の中で湧き上がってきた。

祐樹はその場で立ち上がり、パラパラと服に付着したコンクリート片が落ちる。汚れた服を払い退けるのも忘れ、空中で静止している刹那を凝視する。

その時、ドン！ という音と共に胡桃が拘束されている屋上のドアが勢い良く開いた。近くにいた悪鬼はもちろん、刹那、祐樹もその音に反応しそちらを振り向いた。

そこには一瀬と麻耶と明神がいた。それを確認した刹那が悪鬼に言った。

「悪鬼、そいつらはお前に任せる。好きにしる」

「了解しました」

一瀬と麻耶は身構える。その時一瀬が気付いた。

(こいつ、生きてたのか。でも何か弱ってる?)

確信はない。ただの勘だ。ただ賭けてみる価値はある。アレを成功させるためにもこの壁を乗り越えなければならぬ。アレを成横目で気にしている祐樹はすぐに刹那に焦点を合わせた。

「心配か？ 友達が」

「多少はな。だが信頼してる」

「信頼か・・・くだらないな。信頼なんてものはすぐに裏切られる。お前にはそれがわかっていない」

「何言つてやがる？」

「人は窮地に陥ったらその信頼なんてものはすぐに捨てる。それが人間だ」

明らかに刹那の口調が変わった。刹那の心の淵には何か黒いものが渦巻いていた。

その隙を祐樹は見逃さなかった。電撃歩法で一気に間合いを詰め、今度は祐樹が電撃の拳を浴びせた。刹那の体が電撃で体が硬直して隙を生み出し、全力の拳を顔面にクリーンヒットさせた。

さすがの刹那も無防備の状態で攻撃を受けてしまったため、整った顔立ちに鼻血というあまりにも惨めな姿を晒すことになった。

「いいねえ、戦いはこうでなきゃなあ。さあ、存分に戦おうじゃねえか！」

「っ……………」

全力で打ち込んだはずの攻撃が思っていたほど効いていなかったことに祐樹は多少動揺していた。

(アレでもダメか。電子刀での攻撃も太刀筋を見切られてたら意味ねえーし。だったらアレしかないんだが、まだか?)

すると、上空から雨粒が降ってきた。夜でよくはわからないが、どうやら上空には雨雲がやってきているようだ。遠くからは雷の音まで聞こえてくる。

(間に合ってくれよ)

祐樹はそう祈りながら、刹那との戦いを再開するのであった。

一瀬はアツキヌフォートを構え、麻耶は鎧の魔装の籠手を構え、悪鬼と対峙していた。昨夜感じたような圧迫感はなく、酷く弱っているような印象を持たせた。すると、空から雨粒が降ってきたのに気づき、一瀬が麻耶に寄って何か話始めた。

「お膳立ては整ったみたいだ。とりあえず、あの悪鬼と体の位置を入れ替えたい。麻耶、俺が矢で隙を作るから接近戦で悪鬼を胡桃さんから引き離してくれないか?」

「了解! 後は任せるからね」

「ああ」

二人の話も終わると、再び構えに入った。

「ご相談は済みましたか? では、こちらも始めましょうか」

そして明神は、一瀬達よりも後方で様子を伺っていた。

まず麻耶が悪鬼に一直線に仕掛ける。悪鬼は無駄のない動きでそれを回避する。しかしその回避した先には一瀬の数発の光の矢が降り注ぐ。思わず悪鬼はその場から離れざるを得ない状況に陥った。

「よし！ 作戦通り！」

一瀬は小さくガッツポーズをとり、拘束されている胡桃の元に急いだ。一方で、麻耶は鎧の魔装を解放して悪鬼に強くしつこく迫っていく。

悪鬼は確かに弱っているらしく、麻耶の柔術が次々と決まってい。だが弱っているものの、そのダメージは思っているよりも効いていないようにも感じ不気味な笑みを浮かべている。

さすがの麻耶も不審に思ったのか、一定の距離を取って様子を見守ることにした。

(何アイツ？ 全然効いてない？ なんか不気味ね)

一方一瀬は、拘束されている胡桃の心臓の部分に事前に準備していた呪符を張り付けて、もう一つの呪符を矢に付けて白堂刹那に向けて放とうとしている。刹那はゆっくりと祐樹に向かって歩みを進めている最中だった。丁度背後に位置している。狙うならここだ。

一瀬は狙いを澄まして、取り込んだであろう胡桃の心臓があると予想される右胸を狙い、矢を放つ。放たれた矢はそのまま刹那の右の背に向かって飛んでいくが、直撃すると思った瞬間、刹那は振り返って矢を素手で掴んで止めた。

「俺にこんな不意打ちが効くとも思ってたか？ 浅はかだったな」

そんな台詞を言った刹那の右の背にグサツ！ という音と凄まじ

い痛みが体中に走った。

「がっ！・・・何だ？ 何故背後から・・・！」

刹那は背後を振り返ると空間が歪んでいるのを目撃した。

「さ、さっきのは囷か・・・。俺としたことが抜かったぜ・・・。があああああああああああああああああ！！！」

一瀬が放ったのは囷の矢と本命の矢の二本だった。本命の矢は空間を移動させる高等技術を用い、囷に気を取られている内に死角から本命の矢を射抜くことが今回の作戦の一つだった。

射抜かれた矢には、呪符が張られており、これには元のあるべき場所に戻すという呪術を施したものであり、この一撃で胡桃の心臓は、刹那から元のあるべき場所である胡桃の体内に戻っていった。

「ナイス！ 一瀬！ 相変わらずいい仕事しやがるぜ！」

祐樹は一瀬に拳を突き出してサインを送ると一瀬も拳を突き出してサインを受け取った。

一方で、胡桃の心臓を抜かれた刹那は怒りに満ち溢れていた。

「ちつくしょう！ 抜かったぜ、ガキ共が・・・。やってくれんじやねえーのよ・・・。もうぶっ殺すしかねえーかな！ 来い！ 悪鬼！」

麻耶と競っていた悪鬼は刹那の呼びかけに、麻耶を振り切り刹那の元へと辿り着いた。

「覚悟はいいな？」



周囲の雨脚が強くなってくる。もう雨に濡れて風邪を引くなんてことなんて考えてもいなかった。

廃ビルの屋上では意識を取り戻した胡桃が戦況を見守っている。彼だけでは勝てない。それは胡桃がよくわかっていた。ではどうするのか？ そんなことを考えていると一瀬が胡桃に助言をした。

「もうすぐ面白いものが見られますよ」

「え？」

「まあ、見ててください」

一瀬の言葉を尻目に祐樹は刹那に追い詰められつつあり、ついには首を掴まれ、締め上げられるような状態になってしまっていた。

「ヤバイ！ あのままじゃ！」

「待つてください！ 貴方も行けば巻き添えになります」

「？ どういうこと？」

雷鳴が近距離のところまで近づいている。首を絞められている祐樹は薄っすらとする意識の中、右手を頭上高く一指し指を立てて構える。

「何のマネだ？」

「へ、いいもんプレゼントしてやんぜ」

「何？」

「ビリビリッ！ バチバチッ！」

と体に帯電させていた電気を放出させ、祐樹はあることを行なった。

「落ちろ！ 召雷ヒライチ！！」



「なるほどな、本気つてのはわかったよ。なら俺も後先考えねえ。己の限界つてやつに挑戦してやる」

すると刹那はいきなり苦しみだした。体中を引つかき、鮮血が飛び散る中で刹那の目の色はすでに人間とは思えないような闇を感じるような瞳をしていた。

「どうなってるんだ？」

廃ビルの屋上から戦況を見ていた一瀬が疑問を投げ掛けると、胡桃が答えた。

「あれは、妖魔の交霊術と言ったほうが分かりやすいかしら。妖術師自身が契約している妖魔に体を差し出す言わば、捨て身の戦法よ」

つまりは祐樹は刹那をそこまで追い込んでいたのである。刹那からすればどうしてもこれだけは使いたくなかった戦法だったはずだ。彼がここまでして得なければならぬものとは一体なんだっただろう。

こんなことを考えている間も交霊術は進行を始めていた。

## 第一話 中等部編く妖術師の最後く

キリスト暦一九九四年。

首に十字架のネックレスをした少年は独りだった。両親は殺され、自分はスラム街のような街に逃げ込んで生きていたのだ。

妖術師最後の末裔として、少年は独りで生きていくことを幼いながらも決意する。しかし、独りでスラム街を生きていくには限度というものもあり、あるグループに属することとなる。

それから四年が経ったキリスト暦一九九八年。

少年は青年となり、また独りとなっていた。生活も慣れ親しんできた頃ある人物と出会うことになる。相手は黒装束を着ており顔まではわからなかった。ただ身長は自分と同じくらいの高さだったことは覚えている。

まあーこういうスラム街ではこんな変な格好をしている奴も珍しくもないと思って黙って立ち去ろうとした時、その黒装束の者が言った。

「貴方の能力、このまま朽ち果てさせる気か？」

突然声をかけられて驚いて振り向くとそこにはもう黒装束の者はいなかった。だが次の瞬間。ズン！ という重みを右肩に感じられた青年はそのまま固まってしまった。

（俺が、こんな簡単に背後を取られるなんて・・・）

そんな驚きで頭の中が混乱していた。

背後を取った黒装束の者はこう告げた。

「その力、どうせ捨て置くものならば、我々のために使ってはくれないか？」

今までのらりくらしと生きることしか知らなかった青年はいつしか、忘れていた少年の頃の決意を思い出し、生きる意味を見つけようとしていたのだった。

空に輝く二つの光。

一つは、自然エネルギーを取り込んだ大河祐樹の体に纏っている電撃の鎧。

一つは、交霊術により鈍く光る妖術師、白堂刹那の暗黒の妖気。どちらも近づくと体に圧迫を受けるような感覚を感じるほど強力なものだ。

廃ビルの屋上からその様子を伺っている胡桃や一瀬、麻耶はその状況を解説していた。

「祐樹のあの状態は本人が言うには『雷神モード』って言うらしいです。上空の雷雲から大量の雷を受けることでその状態に移行するようです。但し、『雷帝モード』よりも高エネルギーでスピードもあるのです、色々と扱いづらいつて本人が言っていました」

静かに一瀬の解説を聞いていた胡桃が質問を始めた。

「なるほどね。で、あの状態はどのくらい保つの？」

「早くて約一〇分です」

「そう・・・」

胡桃はそう言う少し黙って考え始めた。非常に短い時間であっ

だが、何か答えが出たようだ。

「彼、このままだと負けるかもよ」

「え!?!」

「但しそれは、このまま私達が手を出さなければの話・・・だけだね。どうも彼は一騎打ちってタイプの人間よね。どうかな、こちら側の説得でプライドより命を優先するかしら?」

一瀬と麻耶はお互いを見て頷き、そして答えた。

「命優先!」

「そ! それじゃ、加勢に行くわよ!」

胡桃の言葉と共に廃ビルの屋上から飛び出し、一瀬と麻耶も祐樹に加勢しに行った。

妖術師、白堂刹那は、交霊術により体に無数の傷を負っていた。

その無数の傷口から流れ出る血液が体に不思議な模様を刻んでいた。体に巻いていた包帯も解け、ペラペラと落ちていく。その妖気の威圧感祐樹の『雷神モード』すら霞んでしまうかのような凄まじい妖気を発していた。だが欠点は自我を失っていることである。どうやら交霊術の後遺症のようなものみたいだ。

祐樹はどう攻略していいとか考えていると胡桃や一瀬、麻耶がやってきた。

「何しに来たんだよ」

「貴方一人じゃ心細いと思ってね。あの交霊術、想像以上にヤバイものよ。サポートがなければ勝てないわ」

「そ、そうかな」

「お前は自信過剰なところがあるからな。少し慎重になった方がいい



樹の隣には胡桃と麻耶がおり、その麻耶の隣に一瀬が陣取っていた。

「で、どうすんだよ」

「私達で貴方の支援をする。その間にケリをつけて」

「うっし！」

祐樹は指をポキポキと鳴らして刹那に視線を合わせる。刹那はまだ苦しんでいるようで、こちらを振り向く素振りがない。

「俺からまず行くぞ」

一瀬がアツキヌフォートを構え、狙いを刹那に定める。

「一点集中……。祐樹！俺が射ると同時に行け！」

アツキヌフォートから光の矢へ渦を巻くようにエネルギーが集中していく。

「行け！」

一瀬の掛け声と共に矢が放たれ、祐樹が刹那に向かって突っ込む。それに合わせて麻耶も行動に移し、明神を肩に乗せた胡桃は単語帳の束から数枚の紙を切り離し、右手の人差し指と中指に挟んで念を籠める。

一瀬が放った矢は祐樹よりも早く到達し、刹那の背後を直撃するかと思ったその時、刹那は強引に振り払ったその腕で一瀬の矢は粉々に砕け散ってしまった。

一瀬もそうだが、矢が当たった瞬間に攻撃を仕掛けるつもりだった祐樹は何か雰囲気の違いに気付き、一旦間合いを空けた。麻耶にも静止するよう合図した。その様子を見た胡桃はあることを察知し

た。

「成熟しちゃったか・・・」

その胡桃の一言を聞いていたかのように、刹那の妖気が爆発的に大きくなる。その威圧感で体が強張る三人。その一方で胡桃はまだ念を籠めていた。

「くそっ！ 風の矢、疾風<sup>はやて</sup>！」

一番刹那から遠いところにいた一瀬がアツキヌフォートから風属性のエネルギーの供給を受け、風の矢を作り出し、数十本の矢を放った。

放った先の刹那はブレるように姿を消した。一瀬は刹那の姿を見失う。

「一瀬！ 後ろだ！」

一瀬は、祐樹の叫び声で咄嗟に背後を振り返るが、対応が遅れ、刹那から致命的な一撃を体に受けて数メートル離れた地面へと突き刺さった。

「まずは一人だなあ。あーハツハツハツ・・・。気分爽快だぜえ。押さえ込むのに時間が掛かったが、一人一人潰していくかあ」

正気を取り戻した刹那は、先ほどの狂気に満ちた姿とは違い、非常に落ち着いている様子だった。

「次はどいつだ？・・・決めた！」

次に狙いを定めたのは胡桃だった。胡桃は少しも動じず、暗記帳の切れ端を掲げて。

「爆風に包まれ切り裂かれよ！  
風刃！」

「ぐっ！」

刹那今回は背後に回ることなく正面からの攻撃だったため、胡桃の攻撃をそのまま受けた。爆風の渦が刹那を取り囲む。その隙に胡桃は次なる呪文を唱えていた。

「北の守護神・玄武。東の守護神・青龍。南の守護神・朱雀。西の守護神・白虎。櫓を築き汝に敵対する者を封じよ」

単語帳から切り離れた紙の束を広げさらに念じた。すると紙が燃え出し刹那の周りへと飛び去っていく。

ようやく風刃から振り切った刹那は周りの状況に意識を集中した。

（何する気だ？）

胡桃は陣を敷き、印を結んでこう告げる。

「四獣櫓！  
閉門！」

刹那の周りに点在していた四つの炎が光の柱になり、それが櫓へと姿を変え、刹那をその中へ閉じ込めてしまった。

「この封印式は一時的なもの。止めは頼むわよ！ 祐樹！」  
「おっしゃ！ 任せろ！ ……一瀬！」

祐樹の掛け声で一瀬は瓦礫の中から這い上がり、地上へ出てきた。

「まったく人使いの荒い奴だよ、ホント」

一瀬はそう言うと、近くに止めてあった廃車寸前の車をアッキ又フォートの力で地上から祐樹のいる上空へと吹っ飛ばした。

「骨が折れてるんだ、決めろよ！ 祐樹！」

「任せろって！」

上空に吹っ飛ばされた車は祐樹の前に絶好の位置に飛んできた。祐樹は電撃を用いて車を引き付けて、全力で刹那に向けて殴り飛ばした。

「雷神・雷神超電磁砲！」  
トルレイルガン

殴り飛ばされた鉄の固まりの車は、摩擦で車体が溶け始めてはいたが、オレンジ色の光を放ちながらそのままの威力で刹那に向かって突き進んだ。突き進んだ超電磁砲は、櫓を突き破り大爆発させた。おそらく刹那には大ダメージを負わせることができたはずだ。だが、刹那の妖気を感じることから、まだ勝負は決していなかった。

勝負は佳境に入ろうとしていた。

青年は更なる成長を遂げ、一回り肉体的にも精神的にも大きくな

っていた。

青年が所属していたのは、生物化学研究所の『ヴァイラス』という世界的には非公式な組織だった。主な活動は、生物の培養から遺伝子結合、その他研究などといったところである。

青年は、そんな組織の中でも研究に必要な材料を採集するための実行部隊として所属し活動していた。だが、その青年は組織の活動について違和感を抱いていた。その活動というのは、貴重な人材を集めるという名目で、多くの殺人的行為を行なってきた。いわば虐殺行為である。青年は気付いたときには組織の色に染まりつつあり、自分を見失いがちになっていた時期だった。

さらには両親の死がこの組織に関連しているということを押込んでからその違和感は次第に大きくなっていった。

自分の心に戸惑いを感じた青年は、組織を抜けることを決意する。但し、組織を対抗するには力が足りない。そのためにはある者の命を奪わなければならないことになる。目的は矛盾しているが、自分が自分であるためにはこうするしかない。青年は決断したのであった。

祐樹からの巨大な超電磁砲によって、多大なダメージを負った刹那はその痛みが快楽に感じるように奇声を放って笑っていた。気分的には非常に高揚しているように見える。

「があーひゃっひゃっひゃっひゃっ！」

超電磁砲を撃ち放った祐樹も四獣櫓を使った胡桃も、その様子を伺っていた麻耶も、地上で戦況を見守っている一瀬も呆気に取られるような状況だった。

「潰す……ぶっ潰す……ぶっ潰してやる！」

まず刹那が行動に移したのは、麻耶に対してだった。鎧の魔装の装備をしていた麻耶は守りの体勢に入っていたが、間合いがかなりあったため油断し、見えないデカイ手に捕まれ握り潰されそうになる。鎧が軋む。

「がつ・・・」

それを祐樹が見えない手に向かって体当たりをして麻耶を握り潰そうとした手が一瞬離れた。

難を逃れた麻耶は、軋む体を癒すべく。地上へと退避した。

ここでの戦力差は、相手は刹那一人、こちらは祐樹と胡桃の二人だ。

「あなたのその力は無駄遣いはしないで。こっちで隙を作る」

「隙を作るつたって、今のアイツに太刀打ちできんのかよ」

「痛いところをつくわね」

「胡桃様が言うことなら絶対つすよ!」

「明神、お前今までどこにいた?」

「そんなこと関係ないっす。胡桃様はやると言ったらやるっす」

「あー、わかったよ。そうしよう。無茶すんじゃねえーぞ」

「あら? 貴方があたしの心配?・・・大丈夫よ」

一人刹那に向かっていく胡桃。まるで永遠の別れのようにも感じたその瞬間、祐樹はさっきの発言とは裏腹に先制攻撃を仕掛けてしまっていた。

「やっぱ、てめえばかり任せられねえ。隙は俺が作る。因縁の勝負はアンタが決める!」

胡桃はニヤリと笑みを浮かべ、単語帳を取り出しペラペラと捲り、

その中から五枚切り離し、刹那に向けて放つ。

「五行封陣！」

単語帳の切れ端が各五箇所に五亡陣を描く。五亡陣は妖術の力を抑制させる効果を持つ。今までこれを使わなかったのは絶対的な隙が存在しなかったということと、使用者にかなりの負担が掛かることだった。

祐樹の素早い先制攻撃のおかげか、術式を組む隙を作ることに成功した。妖術が抑えられた刹那は体から煙が出て力が抜けていく様子だった。その様子を見た胡桃は、式神明神を使うことを決めた。烏天狗のような容姿の明神は、変幻自在の式神でもあったのである。明神の体は胡桃がイメージする通りの日本刀へと変化して弱っている刹那へ切りつけに行った。

その一撃は確かに刹那へと命中した。だがその時予想外の展開が胡桃を襲った。

刹那の胸が開き、その肋骨が胡桃の心臓目掛けて突き刺さったのだった。

「がはっ！」

胡桃の口からは大量の吐血が出ており、祐樹も目を疑った。

「チェックメイトだ……。ガキ共……」

自身も息切れ切れの刹那がそう呟くと次に祐樹に異変が起きた。

「てめええええー！」

祐樹の大きな怒鳴り声と共に、今までで一番大きな雷が祐樹に降

り注いだ。今までにない凄まじい、まるで空が割れたかのような爆音に刹那も思わず祐樹の方を振り返る。そしてあることに気づく。

「な、あれは、まさか……！」

祐樹の体は激しい電撃で包まれており、背後には後光が輝くような円を描くような形をとっている。そしてなにより特徴的なのは、両目が真紅の眼に輝いているのだ。さっきまでと違う真紅の瞳に。

それを見た刹那は、驚愕の表情をしていた。

「あれは、ル、ルビーアイじゃ……。まさか原石か……」

「あ、あれが……。ルビーアイ……」

胡桃も驚きの表情で祐樹の瞳を見ていた。

祐樹は背に装備していた電子刀を瞬時に取りに行くと刹那と胡桃を繋ぐ肋骨を一瞬に切り裂いた。

切り離された胡桃を支える祐樹は、刀から戻った明神に胡桃を預けると視線を刹那に向け、握った刀で刹那を斜めに切り裂く。

鮮血が激しく飛び散る。

祐樹から受けた攻撃によって刹那はもう虫の息だった。最後の手段も祐樹によって阻まれ、手の内を完全に失ってしまった。

一方祐樹は凄まじい放電をバチバチツ！と放っており、紫電を片手に真紅の眼で一步一步刹那に近づいてくる。

「くそ……。ルビーアイの使い手がこんなところにいるなんてな……。どうやら俺の運も相当に見放されたようだな……」

決戦は潮時を迎えようとしていた。

むき出しのコンクリートの壁と天井には同じくむき出しの通風管が通っているこのとある研究所の廊下は、見方によれば何も無いむき出しだらけの寂しい空間に見えた。

そんな廊下を歩いていた青年は、ふと風の噂で聞いた話を同僚から聞いていた。

「ルビーアイ？」

「そ！ そう言われているらしい珍種だそうだ」

「宝石みてえーなネーミングじゃねえーの」

「実際、宝石のように紅く綺麗に光輝いているそうだ」

「見た奴いるのかよ？」

「いや、あくまで噂。伝説級の代物だそうだ」

「けっ！ そんなの何の当てになんだよ。そんないるかどうかもわかんねえーもん探せつてのかよ」

「だが情報が入った。ルビーアイ・・・つまり原石の欠片を持つ者がいるという情報がない」

時はしばらく経ち・・・。

「世界政府の介入があったと？」

「このままじゃ、実験の凍結も考えないとね」

とある研究室に集まっていた科学者達が議論をしているのを青年は聞いていた。

ルビーアイを持つ者は凄まじい力を発揮するということが、当研究所でも注目を浴びていたのだが、世界政府の介入があったため、容易にこちらの素性を露にできなくなってしまったようなのである。自ずと行動も制限されてくる。

そのとき別の通路から人の気配がしたので近くの物陰に身を潜めた。立ち聞きしていたことを知られたら後々面倒なことになるからだ。そんなとき通りがかった連中から耳を疑う言葉が聞こえてきた。

「原石の欠片の収集は失敗だつてよ」

「運がねえよなあ。世界政府の特務隊に遭遇するなんてな。俺達なんか妖術師の一族を滅ぼすのに大した時間はかからなかったのによ」

「よせよ！ 仲間に妖術師がいるのを忘れたのか？ 聞かれたらどうする？」

「そーだつたな。失敬。ただ仲間つてのは良く言いすぎだろ。結局は下僕だろ」

「そりゃーそうだな。ハツハツハ・・・」

次の瞬間、青年はその二人の組織の人間を肉塊に変えていた。

すべては仕組まれていたことだった。青年が独りになることも、組織に入ることも、任務に就くことも全てだ。

どこへぶつけていいのかわからない怒りが込み上げてきた青年は研究所を脱走することにした。自分にはまだ借りを返す力がない。しばらく身を隠しながら復讐の機会を狙ってやると決意するのであった。

物体の落下速度に任せて刹那は廃ビルの屋上へと落下していった。もはや自分では起きられないほどのダメージを受けていた。

それでも正気を失っていた祐樹は歩みを止めず、刹那に向かって歩き続けた。すると祐樹は右腕を横に振り上げると掌を広げて、

光り輝く雷撃の槍を発生させた。確実に止めを刺すためにその槍は高エネルギーの物体としてバチバチと激しい音を立てていた。

未だに歩みを止めない祐樹の左腕を掴む手があった。

祐樹はまるで鎖に絡まったように動きを止め、その掴まれた腕の方を振り返る。そこには右胸を突き刺されたはずの胡桃がいた。その姿を確認した祐樹の眼は真紅の眼から黒い普通の眼へと戻っていた。高ぶっていた感情が次第に冷静に落ち着いていく。

「おい、大丈夫なのかよ」

「平気。心臓までは届いていないから。それよりあんたよ。それ消しなさい」

胡桃の視線の先には雷撃の槍があった。直ぐ様祐樹は雷撃の槍を消失させた。

二人は廃ビルの屋上で倒れている刹那を見つめた。もう戦意喪失してしまったようだった。戦う気力そのものが感じられなかった。そんな二人は廃ビルの屋上で血まみれで倒れている刹那に近づいていった。

血まみれで倒れている刹那にはまだ息があった。二人は恐る恐る近づく。吐血をしながら刹那は話す。

「ルビーアイの・・・ガキがいるなんてな・・・。随分と凄腕の・・・

・ボディーガード見つけたじゃねえーかよ・・・」

「やっぱりルビーアイだったのね。まさかこんなところで出会うことになるとはなんて思ってなかったわよ」

刹那と胡桃の会話についていけなかった祐樹が質問する。

「あのさ、ルビーアイって何なわけ？」

「貴方自分が、ルビーアイの使い手だったのに知らないの？ あ、



思ってもみない刹那の行動に胡桃は眼を見開いて驚いていた。

「なんだってのよ？」

「価値あるもんだ……。お前が持つてる方がいいかもしれねえ。

」

「……………」

胡桃は刹那の気持ちを理解できないまま黙ってそのネックレスを受け取った。

「大事にしるよ……………」

刹那はそう言つと眼をゆっくりと閉じ始めた。そして最後に。

「裏切り…………それはこの世界の当たり前の姿だ…………。お前達が今後この世界とどう向き合っていくのか楽しみだぜ…………。」

刹那は一方的にその一言を言つて息を引き取った。

## 第一話 中等部編く決戦を終えてく

正に裏切りこそが人生であるかのような一生を過ごして来た青年は、再びスラム街へと戻ってきた。もはや誰も信用できない。信用できるのは自分だけ。そんな孤独に苛まれ、青年は矛盾しながらも組織を作った。それは仮初の組織。表面上は信頼という名の結束力を持っていたが、青年自身は誰一人とさえ信用していなかった。ただ組織を作ったのは、その方が行動がしやすかったからだ。

だがそんな青年は結局全てから裏切られた。神からも世界からも。そして最後の最後で青年は理想の光景を目の当たりにした。信頼という強い絆で結ばれた者達の姿を。自分もそうありたかったと思いながら青年はこの世界のあり方を未来を願った。

東の空に陽が昇り、廃ビル前の道路にはパトカーと救急車がやってきていた。この地区で暴れていたという理由で一時は拘束されていた祐樹達だったが、事情に詳しい松原警部がやってきて拘束から開放されていた。

ネクタイがだらしなく縛られている無精ひげ面の松原が祐樹達のところへやってきた。

「まったく、派手にやりやがって。口裏ちゃんと合わせろよ」

開放されたとはいえ、これから事情聴取が待っている。怪我をしている全員は救急車で病院へと運ばれることになった。事情聴取はそれからだ。

それから松原は妖術師、白堂刹那の遺体の確認に向かった。

廃ビルの屋上に辿りついた松原が目にしたのは数人の検死官が悩

ましげな表情をしていた姿だった。その理由はすぐにわかった。

ビニールを退かされた遺体は全身が白く変色していたのだ。まるで石膏の像のように。触り心地も石膏のようで脆いところは触るとポキッと折れてしまう。このままここに置いておけば風で風化してしまうだろう。持ち運ぶにも繊細な作業が要求される。事実上の完全回収は無理だろうと松原は思った。

それにしてもスラム街の勢力図は大きく変わることだろう。妖術師、白堂刹那の強さはスラム街でも群を抜いて強かったこともあり、ある程度その脅威で平和だったが、その脅威がいなくなったことでここもしばらくは荒れることにだろうと松原は予測していた。

（警備体制を見直した方が良さそうだな。しかし、この世の中、何か大きな力が働き始めているような気がする。何も起きなければいいんだがな・・・）

そんな松原の不安は杞憂なのか、この時点では誰も予想がつかなかった。

一方祐樹達は、近く的大型施設の病院の病室にいた。幸い三人とも大事には至らなく、すぐに回復するということだった。だが、祐樹は未だに目を覚まさない状況だった。

実は刹那の息が絶え、戦いが終わった瞬間、祐樹もその場に意識を失って倒れてしまったのだ。医者は過労だろうと言っていたが、胡桃の見立てだと『ルビーアイ』を使用した副作用ではないかと予想していた。

状況を知った麗華が病室へとやってきた。どうやら明神の案内でやってきたようだ。

「一瀬君、あの子は？」

青い顔した麗華は言った。祐樹のベッドの隣にいた一瀬は落ち着いた調子で今までのことを説明した。

一瀬の様子から祐樹に深刻なダメージはないことを麗華は悟り、落ち着きを見せ始めていた。

心配していたのは麗華だけではなかった。一緒に戦った胡桃もまた心穏やかではなかった。

「ごめんなさい、麗華さん。私が付いていながらこんなことになってしまつて」

胡桃は麗華に向かって勢いよく頭を下げた。それを麗華がフオロ―する前に一瀬が言った。

「そんなに心配することもないですよ。あの眼を使うといつもこういうことになりますから。ま、今回見たのはかなり久しぶりですけど」

その言葉に合わせるように一緒に近くのベッドに横たわっていた麻耶が続けて言った。

「あたしも同じような感じなんですよ。あの眼だつてよくわからないし。胡桃さんはどーして知っているんですか？ あの眼のこと。確か『ルビーアイ』って言ってましたよね？」

胡桃は一息つくくと答えた。

「当人達は何も知らないつてわけね。いいわ、説明してあげる。その資格は十分あるものね。それにいつかは知らなくてはならないことだしね」

病室は胡桃の発言を聞き漏らさないようにとする一瀬達の沈黙の空気で静まり返っていた。その空気に多少話しづらそうな胡桃は唾を呑み込み話し始める。

「その眼は死神の眼、悪魔の眼、神々の眼なんて呼び名があるくらい伝説級の珍しい眼でね、統一名称が『ルビーアイ』なのよ。この名を決めたのは世界政府と言われているわ。症例があまりに少なくて何故このような紅い眼になるのかさえ未だにわかっていないの。分かっているのは、この眼を持つ者がこの世にはいるってだけ。何年前前にこの眼を持っている人の遺体が見つかったのだけれど、その眼は一足遅く臓器ドナーの下へ送られてしまったのよ。そしてそのドナーが麻耶ちゃん、貴方」

「あたし・・・？」

麻耶は確かに辻褄が合うと確信しながら話を聞いていた。

「麻耶ちゃんが昔、拉致されたって話を聞いたときからもしかしたらって思っていたのよね。あれはあなたの眼が狙いだったのよ。あの当時、ただ唯一の『ルビーアイ』の持ち主として確たる証拠があった人物だったから」

「ちよっと待ってください」

一瀬が質問した。

「ドナー登録をしていたその人のもう片目はどうなったんですか？ その人も祐樹と同じなら両目に『ルビーアイ』があった筈ですよね？」

「理由は簡単。その人は片目が完全に壊死していたのよ。理由は今となってはわからないけどね」

その話を聞いた麻耶はふと自分の左眼が気になった。その様子に気付いた胡桃は麻耶に声をかける。

「大丈夫よ、ドナー提供される臓器はちゃんとした物だからその眼が壊死することはないはずよ。それより今後の対策が必要になるわね」

「対策……ですか？」

麻耶は落ち着いたように言った。

「確かに、スラム街とはいえ、あんな大々的な戦いをして、ましてや『ルビーアイ』なんて珍しい物まで使ってしまったのは危険かもしれないですね」

「どういふこと？」

麻耶と麗華は一瀬の言葉をイマイチ理解しきれていなかった。一瀬の代わりに胡桃が説明する。

「この世界にはその伝説級の代物を欲しがる組織は数え切れない程あるってことよ。これからはその眼が狙われることになるかもしれないってこと。分かるかしら？」

「ってことは何？ またウザイ奴等がうようよと湧いて出てくるかもしれないってこと？ いやぁーウザイイー！」

本当にウザイと思っっているのだろう。麻耶は布団の端を噛んで引っ張っている。

「安心しろよ！ その時は、また俺と一瀬が守ってやんよ」

「おい、起きてたのかよ、お前」

「人が寝てるところで話されてれば嫌でも目が覚めるわい」

そこへ麗華が祐樹の頭を殴った。しかもグーでだ。

「そこ殴るところ？ 酷くない？」

「あんたはまったく心配させて！ あんただって狙われる対象に入ってるのよ？ わかってるの？」

祐樹は小突かれた頭を摩りながら言う。

「当たり前だろ！ 今更何言っただってもう前に進むしかないんだ。だったらその覚悟を持って生きていくだけさ。狙われてんなら、もっと強くなつて襲撃者を返り討ちにしてやる！」

「あんた・・・」

麗華は祐樹の覚悟に押され、それ以上は追及しなかった。

「それにしても、厄介なことになっちゃったなあ。しょうがない！ お姉さんが貴方達の護衛をしてあげましょう。今回助けてもらった借りもあることだしね」

「必要ねえーよ。今回の戦いだって最後はやられてたじゃねえかよ」

次の瞬間、胡桃は単語帳の中の紙の一枚を千切り祐樹に向けた。

それと同時に祐樹は体の身動きが取れなくなってしまった。

「いぎぎい、何だコレ・・・。」

「呪縛術よ。あまり調子に乗っていると私の本来の目的を実行してもいいのよ」

「ほ、本来の目的？」

「そういえば、何で妖術師に狙われてこの街にやってきたんですか

？ 妖術師の拠点が近くにあるのに」

一瀬は当然と思えた疑問を尋ねた。非常に冷静に。

「おい、俺はこのままかよ・・・」

祐樹はえびぞり状態になって身動きが取れないでいる。

「私の本来の目的は『ルビーアイ』の調査・その他諸々ね」

「ここは警視庁の会議室。

綺麗に掃除された大きなテーブルや窓のサッシには埃一つない。

この会議室にいるのは、松原警部とその上司の警視と世界政府の幹部だった。

「では、このことはご内密に。この国内で紛争が起こるのはそちらも望みではないでしょう？」

「はあ、今回は現場がスラム街ということで助かりました。例の二人の件も宜しくお願い致します」

（つつく、俺達の手柄だつてのによ。また横取りかよ）

松原は警視と世界政府幹部とのやりとりに苛立ちを見せていた。だが確かにこの国内でこれ以上あちこちで紛争が起これられても困る

というのも正直な気持ちでもあった。

いろいろと話があつたが、世界政府の幹部は直ぐ様その場から立ち去っていった。まるでゴミ屋敷から出て行くかのように。少なくとも松原の目にはそのように見えた。

( けっ、下に見やがって )

松原は世界政府を毛嫌いしている。同じ政府に尽くす公務員という立場は一緒だが、どうしても世界政府のやり方に賛同しかねるときがあるのだ。時に、世界政府なんてものは本当に必要だったのかとさえ思ってしまうほどに。

それでいても確かに今の世界は安定して平和でいる。それは少なくとも世界政府のおかげであるとも言える。一概に責めることもできないことに松原は苛立ちを感じてしまうのだ。

松原は捜査一課のデスクに戻ると、タバコとライターを持って喫煙所へと向かうことにした。喫煙所から見える風景は爽快で今までの気分を一転させてくれる。

タバコに火を点け、深呼吸をするようにゆっくりと味を噛み締め、ゆっくりと煙を吐き出す。外の景色を見ながらある雨の日の光景を思い出していた。

激しい雨の中、子供が三人倒れている。松原の同僚も血まみれになつて傍に横たわっていた。そんな雨の中、小さな少年。その少年の眼を見たときゾクツクという寒気を感じた。スーツにレインコートを着たその少年は松原にある言葉を残した。

その光景を思い出して呟いた。

「『ルビーアイ』の覚醒か・・・」

面倒な事情聴取も終わり、スッキリした気分で自然公園を歩いて

いる祐樹と一瀬、麻耶と胡桃は、青空を見上げて話しを始めた。

「結局『ルビーアイ』についてはまったく聞かれなかったな」

一瀬が言うように事情聴取では『ルビーアイ』については一切聞かれることはなかった。事前に用意していた色々な言い訳を使う機会はまったくなかったのだ。

確かにおかしい話だ。

少なくとも逮捕された山ノ井は、麻耶の『ルビーアイ』を見ている。必ずその方面の証言が出ていると思っていたが、見当違いだったようだ。

「ん、もしかして誰かがもみ消したのかも。ほら、松原さんとかさ」

麻耶の一言に胡桃が反応した。

「松原って親しいっていう刑事さんでしょ？ その人何者よ？」

「俺達がガキの頃に出会った人でさ、その当時は確か日本直轄の特務隊に入ってたんだっただよな？ 一瀬」

「ああ、今じゃ刑事やってるけど、色々と面倒見てもらってるいい人だよ」

「ふん」

胡桃は素直に納得できなかった。何か裏でもあるのかも、と考えていた。

（もうちょっと様子見が必要ね・・・）  
「どうしたの？」

あからさまに考え込んでいる胡桃に麻耶が不思議そうに尋ねた。

「う、ううん。なんでもない」

「そう」

「ところであのネックレスはどーしたんだ？」

祐樹が胡桃に質問した。すると胡桃はパンツのポケットから無造作にそれを出した。

「あの時は咄嗟に受け取っちゃったけど、やっぱり貰っておこうと思っただけ」

「何でだ？」

「どうやらこのネックレス、ただのシルバーアクセサリーってだけじゃないみたいなのよ。なんだかよくわからないんだけど、陰陽師の勘ってやつかな」

「何だそりゃ」

「だからもうちょっと調べてみようかと思っただけ」

そしてその時は突然やってきた。

胡桃の携帯が鳴る。直ぐ様出ると「了解」と言って三人を振り返った。

「どつやらここでお別れみたい・・・」

「」「え？」「」

「急ぎの用ができちゃった。ごめんね・・・」

「急ぎって何だよ？」

祐樹は止めるように質問した。

「もう帰らないと・・・色々忙しいのよ。じゃー」

胡桃はそういつとその場から逃げるように立ち去って行ってしまった。三人はただ呆然としてその姿を見送っていた。

突然の別れ、しんみりとした空気の中、三人はそれぞれの家路に着く。

(つたく、なんなんだよ、ちくしょ！ いきなりいなくなるって！)

そんなことを思いながら祐樹は自宅の玄関のドアを開けた。玄関を開けると麗華が出迎えてくれた。

「あら、遅かったわね。もう晩ご飯できてるわよ」

「ああ」

「あら？　なんか元気ないわね？」

「なんでもねえーよ」

「まあまあ、そんなこと言わずにあの子に慰めてもらいなさいな」  
「は？」

訳の分からないことを言っている姉の顔は満面の笑みだった。

(何言ってるんだ？　姉ちゃん)

祐樹は麗華に背中を押されるようにリビングへ案内をされるとそこには一人で鍋を突いている胡桃がいた。

「よ、遅かったね。三人で遊んでたの？」

祐樹は突然のことで頭が混乱していた。どこから考えればいいのかすらわからなくなっていた。

「て、てめえ、何でウチにいんだよ！ それにお別れとかって言うてたじゃねえーかよ」

とにかく訳が分からない分、考えられることだけを口に出した。それに胡桃は答えた。

「ああ、あれはね、麗華さんからの電話でお遣い頼まれたのよ。今日鍋にしようってことになってね」

（お、お遣いだとお）

少し冷静になってきた祐樹は再度質問する。

「てめえ、反世界政府勢力の組織に帰るんじゃないかねえーのかよ！」

「誰がそんなこと言ったの？」

「は？」

二人の会話に麗華が入ってきた。

「胡桃ちゃんね、お金なくなっちゃったらしいのよ。だからしばらくはここに居候することになったの」

「な、姉ちゃん、どういうことだよ？ ここに？ いつの間？」

「ごちゃごちゃ五月蠅いわねえ。飯が不味くなる。さっさと席につ

「けって！」

「てめえ、その口調なんかなんねえのか？ 居候の分際で」

「確かに今は肩身が狭いけど、お金を稼ぐ手立てだってないわけじゃないんだからね。その内に出て行くから安心しなさいな」

「そうつすよ、心が小さい人つすね」

「クロスケ！ てめえまで……」

明神も胡桃と共に鍋を突いていた。

「さあ、何やってるのよ、祐樹。早く席に着きなさい！」

祐樹は麗華に襟首を掴まれ、無理やり席に座らされた。

「姉ちゃんでも……はい……」

（もうどうにでもなってくれ……）

大河祐樹はこのときから土御門胡桃との奇妙な縁を持つこととなる。そして物語は続いていくのであった。

## 第二話 中等部編く国外から来た者

ここは築40年が経っているマンション。その太陽の日があまり入らない暗い廊下をコツコツと音を立てて歩いている男がいた。彼が目指していた部屋にはある人物が彼の到着を待っていた。廊下を歩いている男は、ラフなシャツとスーツ姿にサングラスという姿で胸にはネックレスの一部が見え隠れしていた。見た目は10代後半から20代前半の男である。その男がある一室の前で立ち止まった。その後、携帯を取り出して中にいる人物に連絡を取った。

「来たぜ。開けてくれよ」

男がそう言うのとドアの鍵がガチャッと開き、部屋のドアが開いた。そこには10代くらいの少女が出迎えてきていた。

「わざわざどうも」

少女がそう言うのと訪ねて来た男は嬉しそうに。

「お！ 美少女がお出迎えなんて粹なことするね！」

「冗談はその辺にしてさっさと入ってきてくださいよ」

部屋の奥の方から彼に対しての突っ込みが入った。部屋の中はマンションの外観とは違い、すでにリフォーム済みで、フローリングの床が光を照り返していた。

「外見と違って良い部屋でないのよ。さすがは天下の大学院の生徒さんだな。お！ すっげー量の

資料だな。それ研究資料ってわけか？」

「そんな世間話をしにここへ来たわけではないでしょう？ 報告を聞きますよ」

部屋の奥にいた青年はシンプルな机の両側に研究資料の紙の束が積まれている真ん中に埋もれそうになって何やらパソコンに入力していた。

「まったく、姉弟揃って真面目な奴らだよな。茶くらい出してくれよ」「しょうがないですね」

机に向かっていていた男は立ち上がり、冷蔵庫があるキッチンの方へと向かっていった。

「レモンティーがあれば嬉しいんだけどなあ」

「レモンティー？ そんなもの都合良く置いてあるわけが……」

青年は冷蔵庫の中を見たまま固まっていた。

「ん？ どした？」

「あつた。レモンティー……」

虚を突かれた青年はレモンティーを見つめたまま固まっていた。

「お！ マジか！？ 用意がいいじゃんか！」

「！ お前の仕業か？」

隣の部屋にいた少女が顔を出し、質問に答えた。

「うん。この人が来るのがわかってたから予めにね。迷惑だった？」

「いいよ！ いいよ！ さすがは俺が認めた娘だ」

「いつ認めたんですか！？ 勝手なことしないでくださいよ。はい、レモンティー」

不機嫌そうにした青年は渋々レモンティーを訪ねて来た男に渡した。男は早速、レモンティーのペットボトルを開けて飲み出した。

「やっぱ、レモンティーは欠かせないな！ 次から持ち歩くようにすっか！」

「だから、そんなことはいいので、報告の方お願いします」

「つたく、せつかちな奴だなあ。ま、俺も少しふざけ過ぎたか。そろそろ本題に入ろう」

男はそれまでの呑気な表情とは裏腹に真剣な眼差しの表情に変わった。男の表情の変化とともに周りの空気も変わったような気がした。

「日本で対象のルビーアイが覚醒したようだぜ。良かったな、まだ生きてて」

男の報告を受けた青年は水をコップに入れ、それを一気に飲み干して言った。

「まあ、そうですね。で、あっち側の動きは何かありましたか？」

「いや、ない。今回は小さなスラム街での出来事だったようだからな。ただ予想してなかったことが判明した」

「何です？」

青年は男の一言で今日始めてはつきりと分かるリアクションを取った。

「日本のとある空港で妙な荷物を持った怪しい二人組みが入国するのを確認した。その荷物なんだが、どうも刀剣のような物らしい」  
「刀剣のような物？ 剣ではないのですか？」  
「見た目は剣だ。ただ、刀剣のような部分に不自然な穴が複数空いていた。これがその写真だ」

青年は男から写真を受け取り、真剣な眼差しで写真を見つめていた。

「あと、その二人組みが向かった先はあのルビィアイの使い手がいる町の方だって話だ」

男の話聞き、青年はソファに座り込み、両手を顔の前で組んで何やら考えていた。

「あの、ここまで来てもらってから悪いんですが、これから日本へ発ってくれませんか？」

「今からか？ 急だな・・・別に構わないが、もしかしてその二人組みと戦ってこい！ なんて言うんじゃないだろうな？ 嫌だぜ？ 面倒なのは・・・」

青年は机にあった一枚の紙を手に取り、男に渡した。それを見た男は目を見開いた。

「こ、これって、まさか・・・」  
「今回の報酬です。やってくれますよね？」

男は今までの真剣な眼差しがさらに真剣みが増した表情になり一言言った。

「OK！俺に全て任せておけ！」

紋次学園中等部の組み手の授業では、大河祐樹がその力を発揮していた。向かってくるクラスメイトのほとんどをなぎ倒していた。それを見ていた幼馴染の桐生一瀬は、同じく彼等と幼馴染の霧咲麻耶とこんな会話をしていた。

「あれから調子が良いよな？ あいつ。やっぱりあの戦いのせいなのかな？」

「うーん、それもあるかもしれないけど、同居人が増えたことも関係してるんじゃないの？」

「ま、麻耶さん・・・後半部分の台詞がちよつと悪意が籠ってましたけど・・・？」

「そう？一瀬君もたまに変なこと言うわね？」

麻耶は負のオーラを纏ったかのような笑顔の裏の鬼の形相が一瀬には見て取れた。

麻耶の言う同居人とは、先日のとある騒ぎに乗じて大河家に居候している女のことだった。その女の正体は、反世界政府勢力に属する陰陽師である土御門胡桃という名の彼等より一つ年上の女性なのだ。

また先日の騒ぎとは、土御門胡桃の力を狙い襲ってきた妖術師と直接対決をしたことであり、郊外のスラム街で行なわれた戦闘だったため、祐樹達が住んでいる町には彼等のやったことの全てを知る者は当人達と一部の世界政府・反世界政府勢力以外はいなかった。

その騒ぎの中で大活躍をしたのが、今正に大人数と組み手をしていいる大河祐樹だったのだ。彼はあれ以来自身をより強く鍛えるために躍起になっていた。良い意味ではモチベーションが最高潮に

達していると言えるが、悪く言えば突っ走りすぎてヤケクソになっているように傍からは見えたりするのだ。内容が濃く意味のある練習ならばプラスになるだろうが、それで体を壊してはまったく意味がない。一瀬と麻耶はそんな祐樹を見て少々説教の必要もありそうだと話していた。

「ま、とにかくだ。祐樹の奴は最近調子に乗り過ぎだから少し自重気味させとかないとな」

「でもやる気になってるアイツをコントロールするのって難しいのよね……。バカだから」

「相変わらずキツイ物言いだよな。でも確かにアイツの世話役は疲れ……」

「そうなのよね。バカな分、ほっといたら何するかわからないからね。どうせならあの人にお守りしてもらった方がいいんじゃない？」

「それは無理だろ。あの人だって仕事でここに来たって言ってたし、それに組織に属してる人間にアイツのお守りはあまりさせたくない。ルビーアイのことだってあるし」

「そっか。そうだね。すっかり忘れてた。私達狙われる立場だったのよね」

「そうだよ。麻耶だって例外じゃないんだ。気を引き締める意味でもアイツのお守りでもしてみればいいんじゃないか？」

「そうね……、って何でそうなのよ!？」

「あれ、上手く言葉に乗せて話したつもりだったけど、バレたか……」

「一瀬君も意地悪ね」

意地悪な一瀬は高台にある元寺院に住む少年で、中学二年にしてすでに生徒会長を担当するなど謙虚且つ誠実を売りにしているのだ。愛用品の眼鏡はいろんな種類を持っているという噂だ。

対して、厳つい性格をしている麻耶は、自宅が武道場を営んで

おり、霧咲流柔術の師範代に任命されるほどの強者なのだ。小学校までは彼女が幼馴染の中で一番強かった過去を持つ。

「おう、おめえーら！ やったぜ！ 三〇人抜き成功！！」

意気揚々と清しい姿でやってきた祐樹は、一瀬達に自慢気に近寄ってきた。一瀬達が何を話していたかも知らずに。

それを見た麻耶は、妙に苛立ちを感じ出し、祐樹に近づいて行って一言。

「あんた、バカ？ というかバカだったわね・・・あたし一生の不覚・・・」

「な、なんだよ、いきなりバカって！ 酷くね？ 俺の扱い。そこはさ、さすがは祐樹ね！ って言うところだろうが。なあ、一瀬」

麻耶の陰からひよっこりと顔を出して麻耶の後ろにいた一瀬に同意を求めた。

「俺に振られてもな・・・まあ、麻耶もさ、そんな神経質になることもないんじゃないか？」

「ちよつと、一瀬君。祐樹の味方する気？」

「何で握り拳を作ってるんだよ・・・？」

麻耶は自分の意見が否定されると殴る癖があった。その被害を一番被っているのは祐樹だった。一瀬はというと今のように殴りますよ、という脅しに使われることが多い。

「そうじゃなくてさ、ここは国が管理している学校だろ？ この学校の校内での出来事は外には漏れないし、それに祐樹は元々この中等部では目立ってた存在だからな。急に大人しくなると余計に目立

ってしょうがないと思うよ」

「うっ、確かにそれを言われると何も言い返せないわ・・・」

麻耶は握り締めていた拳を解き放ち、機嫌も元に戻っていった。

「ま、確かに。最近の祐樹はちょっと調子に乗り過ぎてるところがあるからな。十分に気をつけること！ あと麻耶もな」

「はい。」

「つかさ、そんな気にすることかよ？」

「あんたねえ〜！！ あたし達変な組織に狙われてる立場なのよ？ バカだから分かってないの？」

「バカにすんな！ それぐらい分かってら。ただよ、そんなに身構えることかなくて思っちゃうんだよな」

その祐樹の発言に一瀬は真剣な眼差しで祐樹に説教を始めた。

「お前、この前殺した白堂のことで有頂天になってないか？ 確かにアイツは強かったよ。俺達が束になっても相手にならないくらいでもお前のルビーアイが覚醒して形勢は変わった。でもな、土御門さんも言ってたけど、本来の白堂相手だったらルビーアイでも勝ってたかどうかわからないだぞ？ 世界政府直属の暗殺部隊ヴァンガードのアイオーンナンバースと同等の強さがあったって言うていたじゃないか。そんな強敵に勝てたのは運と奇跡が重なったからであってな・・・って、祐樹の奴どこ行った？」

「あつちよ、一瀬君・・・」

一瀬が祐樹に説教を熱心に行っている間に祐樹はその場からトンスラしていたのだった。

「あのバカがあ〜！ 完全に天狗になってんな！ ああーなったら

ちよつとは痛い目に会わないと人の話もまともに聞かないだろうなあ……つたく面倒な奴だ」

「まあー今に始まったことじゃないしね。でも、あたし達が勝ったのってホントに奇跡だったのね」

「ああ、そうだな」

妖術師、白堂刹那は自身の儀式を控え、祐樹達の抗争を起こした時期は力が圧倒的に弱っていたのである。元々、白堂刹那に狙われていた土御門胡桃は、その時期を見越してルビーアイの調査と白堂刹那の抹殺を同時進行で行なおうとしていたらしい。だが、白堂刹那の潜在能力は土御門胡桃の予想を大きく上回っていたのだ。力が極限にまで低下しているはずの白堂刹那に土御門胡桃は大苦戦を強いられてしまった。これが一つ目の誤算。そして二つ目の誤算は自分の力をも上回る知り合いの息子に出会ったことであった。この二つ目の誤算については祐樹達も知らない。

色々な誤算が生まれ、結局自分ではなく祐樹に助けられたと土御門胡桃は一瀬達に話していた。

「とにかく！ また捕まえて説教だな」

一瀬はそう言うのと麻耶と共に校舎の方へと歩み出した。

次の科目は歴史学。急いで授業の支度をするクラスメイト達。そんな中のんびりしている祐樹。彼はいつもこんな感じだった。退屈な日々を過ごしているようなそんな雰囲気醸し出している。

「おいおい！ ダラけるのは勝手だけどよ、もっと分かりにくくやれよな。気になってしょうがない」

「お、おう。すまん」

祐樹の隣の席の男子が祐樹の態度を注意した。祐樹がダラける理由は幾つかある。一つは、中二でありながら、すでに高等部への進学が確定していることである。つまり、勉強しなくても高等部への道は用意されているのだ。もう一つは、先日の実戦。あれほど緊迫感のある戦いの後だと気が緩んでしまうのは仕方がないのかもしれない。だからといって、今の態度は褒められるものでもない。歴史学の教諭がやってくれば注意されるだろう。

（かったりいーんだよなあ、歴史学って。そんな知らなくても生きていけるって）

祐樹は常に歴史学の授業に対してはこんなことを思いながら今まで受けていた。

授業開始のチャイムの前に早くも歴史学担当の教諭がやってきたのだが、少々様子が違った。教諭の後ろに背の高いロン毛にスーツ、ネクタイもせずワイシャツは第二ボタンまで肌蹴っている、言わば夜駅にいるようなホストのような姿をした男が共にやってきたのだ。さらにサングラスまでして、あまりにも学校という場所に不釣り合いなその姿は異様に目立っていた。

流石の祐樹もこれにはかなり虚を突かれたようで、その男を見入っていた。

「え、歴史学の授業を始める前に皆さんにご連絡とご紹介したいことがあります」

歴史学担当教諭が教壇に立ち、生徒皆の前でこう告げた。

「今月の歴史学は私の代わりに隣にいる方に授業をしてもらうことになりました。彼は学園長が海外から特別にお呼びした方であり、私よりも今の世界情勢や歴史に詳しい方ということで学園長からの

推薦もあり、授業を担当されることになりました。その間私は、産休という形でお休みすることになりましたので、ご連絡します。では、先生宜しくお願いします」

歴史学担当教諭が教壇をそのホスト風の男に譲ると教室の隅の方へ行ってしまった。で、そのホスト風の男は教壇立つと黒板にスラスラと何かを書き始めた。黒板には『G T J ジェノスIIファースト』と明らかにあの漫画を読んだらうなあと思わせるような名前の書き方をしていた。

書き終わると再び生徒達を見渡してサングラスを大袈裟な振りで見取った。

「ハロー、エブリワン！ ワタシハ『グレートティーチャー・ジェノス』トイマス。ヨロシクオネガイシマス！！ オー！ ジヤパニーズガール、ヤッパリビューティフルガールバカリデスネ！ ココロガオドリマス！！」

生徒達はさらに虚を突かれたのだろう。片言の日本語に、ああ外国人かと思わせるほど彼は日系の顔立ちをしていたのだ。しかもやけにテンションが高い。これも海外から見れば普通なのだろうか？ 生徒達は思っていた。

歴史学担当教諭がいい加減な自己紹介をするジェノスに対して咳払いをするとそれにジェノスも気付き、ちゃんとした自己紹介を始めた。

彼が言うには、彼自身は現在フリーの傭兵だという。いわゆるフリーターのようなものらしい。以前に歴史的な遺産や文化財を守る仕事やゲリラ戦を経験したこともあり、中東諸国の現状にもかなり精通しているのだとか。

中東諸国というと、現在も各地に戦火の炎が広がっている場所でもある。世界政府はそこに介入し、反世界政府勢力と共に鎮圧に向

かつて交戦中との話があるところだ。  
そういう現状をよく理解している者だということとで学園長が彼を推薦したらしいのだ。

「トイウワケデ、コレカラヨロシクオネガイシマース！」

結局歴史学の授業は彼の自己紹介で終わった。片言の日本語を耳にして祐樹は少しグツタリしていた。

「まだダラけてるのか？ 祐樹」

一瀬がやってきた。

「あんな片言の日本語ずーっと聞かされてれば否が応でもグツタリするわい！」

「はは、そうだな。ただ少し気になることがあってな」

「何？」

「気のせいかもしれないが、あのジェノスって先生・・・チラチラお前の方を見てた気がするんだよな」

「げえ、もう目え付けられつつたわけえ？」

「ん〜どうだろう・・・そういうことなのかもしれないけど、ちょっと警戒しておけよ」

「は？ 警戒？ 何に？」

「だから！ あのジェノスって先生にだよ！」

「ああ、そうだな。目付けられるとあの片言の日本語が嵐のように飛んでくるってことだよなあ〜」

一瀬が言いたかったのはそんなことではなかった。

この時期に海外からの新任の先生であり、期間は一ヶ月。そして祐樹には口にしなかったが、一瀬はあのジェノスという男に不信感

を抱いていたのだった。それは、片言の日本語にしては文法はしっかりしていたことだった。それはつまり、普段は普通に日本語が話せるのに無理やり話せないフリをしているのではないのかという疑問を生んでいた。

このことに気がついたのは一瀬以外にももしかしたらいるかもしれない。だが、もう一つの不審な点は正にそこだ。隠すにしては雑過ぎるという点だ。潜入するならばもっと気付かないようにするのはないのか？ まあ一急に海外から来たという時点で何かあると思うのは当然なので、潜入が上手い下手の問題ではないのだが・・・

(ルビーアイを狙ってここへ直接来たということ俺達だけに通じるメッセージとして行動しているのか？ だったら納得できるところもあるし、わざわざ回りくどいことをしているってことは、いつかは必ず直接接触してくるだろうな)

一瀬がそんな心配をしていることを知らない祐樹は呑気に居眠りをしていた。

夜が更け、湿気の多く生暖かい風が吹いているビルの屋上にはデカイキャリアケースを持った二人組が夜空を見上げていた。

「暗くなったのに星があまり見えないね」

一人の少女がそう口にした。

「日本、特にこの辺りは空気が汚れているから空が澄んでいないんだよ」

一人の少年がそう口にした。

「こんな国のこんな場所に刹那さんは暮らしているの？ サイ？」  
「組織の情報ならそうだね。久しぶりに刹那さんに会ったら褒めてくれるかな？ ミミラ？」

「サイ、忘れちゃったの？ 私達、刹那さんを殺しに来たのよ？」  
「そうだったね、それじゃー早速行こうか。そのスラム街に」  
「うん」

とあるマンションのバルコニーで携帯を片手にレモンティーを飲んで話している男がいた。

「あんなワザとらしくていいのかよ？」

『構いません。重要なのは関節的に身の危険が近づいていると知らせることですから』

「でもあのバカ面、全っ然俺の話聞いてなかったぜ？」

『大丈夫ですよ。彼には心強い仲間がいますから』

「なら、いいけどよ」

男はレモンティーを一気に飲み干した。

「で、これから先のシナリオは俺が考えていいんだな？」

『はい。手筈通りをお願いします』

## 第二話 中等部編く動き出す間く

数日後、大河邸の中は謎の荷物により大混乱になっていた。

「なんだってんだあー！ こりゃー！？」

「ごめんごめん。まだ物件探しの途中でさ、で、荷物が先にきちやつたのよ。てへっ！」

土御門胡桃は、現在もまだ祐樹の家で居候になっていた。持ち込まれた荷物は何やら怪しい品物が多くあり、縁起ものなのか？ そうでないものなのか？ 色々謎の品々が数十箱のダンボールに詰め込まれていた。

「つーかよ！ 一人暮らしするにはやけに荷物多くねえーか？ どこに住むつもりなんだよ？」

「あれ？ 言っただけじゃなかったっけ？ 自分でお金稼ぐからその内にも出て行くって」

「あ？ ああ、そーいやー言っただな」

「これが大金に変わるのよ、ほほほっ！」

「お前、何か前と性格違わねえ？」

「んなことどーだっていいでしょ！？ ほら、さっさと学校行ってきなよ！」

「クソッ！ 何すつか知らねえーけど、俺の部屋まで占領すんなよな！」

と祐樹は自宅から追い出されるようにして登校して行ったのである。

「なるほど、それでお前朝からそんなに疲れてんのか」

祐樹と合流した一瀬と麻耶は登校中ずっと、胡桃に対する愚痴を祐樹から聞かされていた。

「あのアマ・・・一体何やらかすつもりなんだ？」

「そんなの知るかよ。あの人なりに何かやろうとしてるんだ。もう少し器の大きな人間でいてやれよ」

「それこそ知るか！」

「そーいえば、今日の占い！ 祐樹の健康運最低だったわよ！」

「占い？」

「朝よくやってるじゃない」

「あー、あれは俺は信じん」

「占いと言えばさ、最近クラスの女子の間で流行ってるところがあるのよね」

「へえー、それは知らなかったな。どこにあるんだ？」

「確か近くよ。今度行ってみようよ！ よく当たるって評判なのよ！」

「そりゃーいいや！ 行ってみようか、祐樹？」

「ああ、どーすっかなあ・・・あっ！」

「どした？」

祐樹は一瀬と麻耶の会話を断ち切って、一直線にあるところに向かっ行って行った。そこには乳母車が道路の溝に挟まって動けないでいる母親と乳母車に乗っている赤ん坊の姿があった。祐樹はその場に着くなり、すぐにその母親の助け始めた。

「あーいうところは尊敬できるんだがな」

「確かに・・・」

一瀬と麻耶は誰よりも早く人の助けに走れる祐樹と一緒にこれま

でつるんで来れたのは、祐樹のこういう一面を知っているからなのだ。でなければ、面倒で付き合いきれない。

「ん？」

一瀬は何か近づいてくる音を感知した。その方向を見ると登り坂の頂上から一台のトラックが下ってきていた。だが、一瀬が気付いたのはもう一つあった。

（運転席が空？）

坂道を下ってくるトラックには乗っているはずの運転手がいなかった。しかも運の悪いことにそのトラックの向かう先には祐樹と先ほどの母親と赤ん坊がまだ乳母車と共にいたところだ。下ってくるトラックが速度を上げたのを見て一瀬は祐樹に向かって叫んだ。

「祐樹！ 逃げろ！！」

「！！！」

祐樹と母親は一瀬の声に反応し、近づいてくるトラックの存在を始めて確認した。しかももうすぐ近くまでトラックは迫ってきている。

（乳母車は外れない・・・くそっ！ 赤ん坊と母親を抱いて何とかこの場からだけでも！！）

祐樹は乳母車から赤ん坊を取り出すと母親も抱きしめ、すぐにトラックの針路上から避難することに成功した。だが、次の瞬間トラックのハンドルが勝手に動き、祐樹の動いた方向へとトラックが突っ込んできた。

「祐樹！！」  
（なっ！！）

その瞬間凄まじい激突音が周囲に広がった。まるで地響きが始まったような凄まじい音だ。ガラスが割れる音も混じっている。一瀬も麻耶も自分の目を疑った。祐樹に向かってトラックが突っ込んだのだ。ここからでは事故現場がどうなっているのかわからない。啞然とした空気の中、一瀬と麻耶は急いで現場へと向かった。

一方、事故現場では祐樹と赤ん坊とその母親は無事だった。ただ祐樹は目の前で起きている光景に驚きを隠せないでいた。

トラックと祐樹達の間には、一人の男子学生。黄色いメッシュ入りの髪にワイシャツ、グレーのパンツに赤と黒のストライプ柄のネクタイ。この制服は紋次学園高等部の物だ。だが祐樹が驚いたのはそこではなかった。その男子学生は左手の拳・・・しかも人差し指と中指だけでトラックを止めていた。ぶつかってきたトラックの前面は蜘蛛の巣状に破壊されていた。

「危ないところだったな・・・大丈夫かい？」  
「あ、ああ。大丈夫っぽい」

赤ん坊とその母親は祐樹とトラックを止めた男子学生にお礼を言っただけでその場から去っていった。それと同時に一瀬と麻耶がやってきた。

「大丈夫か！？ 一体何が？ あなたが？」  
「ちょ、一瀬君。あれ、高等部の人じゃない？」

男子学生も一瀬達に気付いたのか質問してきた。

「君らこいつの連れかい？」

「あ、はい。そうです」

「だったら気をつけることだよ。次に命を狙われたら俺は助けられない。今回の偶然だ。それと君のあの電撃で移動する技。闘気を纏ってから使ってみな。もっと速く動けるし、さっきのもかわせただけだ」

祐樹は自分の技の欠点を指摘され、ようやく我に返った。

「あんだ、誰だ？」

「俺かい？ 俺は紋次学園高等部一年、高坂蓮次「つぎかれんじ」だ。じゃーな、大河祐樹君。遅刻しちまうから先行くぜ」

「誰だよ、高坂って・・・」

その瞬間、祐樹の後頭部に麻耶からの一撃が入った。

「痛つてえ・・・、何すんだよ？」

「アンタ、高坂蓮次って知らないの？ 超有名よ？」

「へ？ マジで？」

一瀬は二人とは別にトラックの運転席を観察していた。高坂蓮次の一撃で大破してはいたが、ハンドルやらサイドブレーキなどは確認できた。

（サイドブレーキは下りた状態になってる。これは意図的だな・・・後はどうやってトラックの針路を変えたのか？ ハンドルには特別仕掛けがあるわけでもないか・・・？ これは？）

一瀬はハンドルの一部に縦線の入った溝を見つけた。だが、それだけではやはりどうやってトラックの針路を変えたのかはわからない

かったため、一瀬は諦めて祐樹達に合流することにした。

「あ、一瀬君。どうだった？」

「あー意図的な部分は見つかったよ。高坂さんの言う通り、事故じゃないね・・・これは」

「能力者の仕業かな？」

「いや、その痕跡はまったくなかった」

「それよりもさ、一瀬君！」

「それより？ これ以上にどんな凄い話題が？」

「祐樹の奴、高坂蓮次先輩を知らないんだって！」

「だから、誰なんだよ？ 高坂って」

「ははは・・・命狙われた後だっていうのに、何だこれは・・・」

「一瀬君？ どしたの？」

「いや、なんでもない。祐樹、高坂家つてのはな、昔からこの地域の武道の開祖と言われている家柄なんだよ。つまり、とてつもなく強い人つてこと」

「ま、マジかよ？」

「ああ、だからこの地域には武道をやっている家が多いんだよ。今だって高坂家を守護するように一二の家が昔からのとある使命を守ってるって話だ」

「おお！ そんなすげー奴が高等部にいるなんて・・・すげえ」

「麻耶、これで納得したようだぞ」

「あ、でも何でアイツ俺の『神速』<sup>カムイ</sup>知ってたんだろ？」

「「え？」」

祐樹達は様々な疑問を残したままその場を後にした。一応この後、遅刻ギリギリで学校に着いたということは言っておこう。

そして、とある一室で男は考えていた。

（作戦は失敗だったな……。まさかあんな学生があ場にいたとは……。次はこんなへマはしないようにしないと。……今後のために……）

ここは警視庁捜査一課特別捜査室。

白堂刹那が死亡したことにより、スラム街の治安が悪くなったことを踏まえて、この特別捜査室というのが設けられるようになった。実際、白堂が死亡して以降、スラム街は争いが頻発し、組織同士の抗争が後を絶たない状態なのだ。

そのスラム街の周辺の治安を守るため編成され、警備・巡回・抗争と色々大変な時期を迎えている。

室長となっている松原圭吾は、何時まで続くかもわからないこの仕事に嫌気が差してきていた。

「いつそ、爆弾でも投下してやろうか……」

「何言ってるんですか！？ 室長！！ しっかりしてくださいよ！！」

室長、松原を説得するのは上原巡査部長という若葉マーク取り立ての新人刑事だった。もちろんベテラン刑事でもあり、かつては日本政府直轄の特務機関で部隊長をしていた松原には上原巡査部長の言葉は全く耳に通らなかつた。

「だったらお前が事態の收拾でもしてくれるのかい？」

「そ、そんなの無理に決まってるじゃありませんか！ ボクはまだ新人ですよ？ 訓練もまだ途中までしかしてませんし……」

「新人でもいつか通る道だ。それに実戦に勝る経験はない。うん、何事も経験だよ、経験」

「そんなこと言われても、それで死んじゃったら意味ないじゃないですか!？」

「意味ないこともないぞ？　こちらは弔い合戦という名目で反撃に出られる」

「その作戦って、ボクが死ぬのが前提ですか？」

「まあーそうとも言っかな」

「酷い・・・酷すぎる・・・」

「そう、世の中は残酷なのだよ」

松原は自分のデスクでタバコを吹かしていた。一応この階には喫煙室という場所があるのだが、ここだけは喫煙OKな場所らしい。とその時、特別捜査室の非常用アラームが室内に鳴り響いた。と、同時にスラム街近郊の町から通信連絡が入った。松原がマイクのスイッチを入れる。

「どうした？　また大規模な抗争が始まったのか？」

「い、いえ。実は、スラム街の住人だと思われるのですが、我々に助けを求めに来たのです」

「はあ？　助けだと？」

「はい。その人物は体中が傷だらけで瀕死の重症だったため、最低限の聴取を取って病院に搬送させました」

「で、内容は？」

「謎の二人組みの子供がスラム街を占拠したと言っていました」

「何？　子供がだと？」

「はい。詳しいことは分かりかねるのですが、それだけを言っ意識を失ってしまったものですから・・・」

「そうか。よし、最大級の警戒レベルで対応しろ！　現場の状況がわからないこの現状じゃーどんな手を使っても後手に回って分が悪

い。こつちもすぐに重装備をして現場に向かう。いいか、俺が行くまで手を出すなよ！」

『はい！ 了解しました！！』

松原はすぐにタバコの火を消し準備に取り掛かった。上原巡査部長も同じく慣れない手つきだったが準備を進めていた。

「どう思います？ 今の」

「あ？ 知るか、そんなの」

「何だか得体が知れないってのは怖いものですね」

「怖いって思うことは恥じゃないぞ」

「え？」

「人間誰しも恐怖つてのはあるものだ。それが欠落すると人間落ちるところまで落ちていく」

「室長も恐怖つてあるんですか？」

「あるさ。ただ慣れでそれを抑えているに過ぎない」

話をしている間も松原は準備を整えるのに無駄がない。

「さっさとしろよ！」

「あ、はい！」

松原はこのときあることを考えていた。

実のところ、松原はあるルートを通じて日本に不審な二人組みが入国していることを知っていたのだ。そしてその行き先がスラム街方面だということも。なので、松原はこの連絡を受けた後、何が何時どこでも起きてもいいように色々と試行錯誤をして人員を配置していたのだ。それが見事今回引つかかったというわけだ。

「よし！ 行くぞ！！」

「は、はい！」

松原と上原巡査部長の二人は、重装備を整え、現場へと向かうことにした。

紋次学園中等部の放課後。

祐樹達は朝話をしていた占いの店に行ってみることにになり、今は街の商店街へと足を運んでいた。

「いいのか？ お前、今朝命狙われたつてのにこの人混みの中にいてさ」

「いいじゃん。結局は何ともなかったわけだし。それにだ、命が狙われてるつてわかってるだけで十分っしょ！」

「相変わらず軽いよな、お前つて」

先頭を切つて歩いていた麻耶が振り返つて発言した。

「じゃーさ、それも占つてもらえばいいじゃん！ クラスの女子にも聞いたけど、結構皆その店のこと知つてたよ。有名みたい。しかも今度は路上じゃなくて、店舗を構えるようになったとか・・・」  
「へえー随分と羽振りが良いじゃないか。店舗つてことは今度は幸運のグッズとか買えるんじゃないか？」

「あーそうかもね！」

「でよ、どこにあるんだ？ その占いの館はよ」

「確かこの近くのはずなんだけど・・・」

その時ある一角から聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「ファッツツ!? エクセレンツツ! スゴイデース!」

周囲の視線がそこに集まる。

「あれって、ジエノス先生・・・だよな?」

「あー! ここよ! ここ!! 噂の占いのとこ!」

「ジエノス先生は何やってんだ?」

「女子に連れて来られたんじゃないか? 一応ハンサムだし」

一瀬の言うようにジエノスの近くには学校の女子生徒が何人か一緒にいた。

「とりあえず、行こうよ!」

「おお、祐樹行くぞ」

「・・・」

「どした?」

「いや、何でもねえー」

(気のせいか・・・)

店舗の中は幸運やら厄除けやらのグッズが多くあった。そしてこのPOPにも『陰陽師推薦!効き目抜群!』と書かれていた。

「やっぱり気のせいじゃなかったかも・・・」

「何?」

「これたぶん胡桃の店だわ」

「え? 土御門さんの店? 何でって陰陽師って言えば確かにその可能性もあるようだけど」

「このグッズ・・・今朝ウチの中を埋め尽くしてたやつと同じだ・・・」

祐樹はグッズを片手に一瀬に今朝の出来事を話していた。

「あー！ 胡桃さんだ！ 何で？ どうして？ どうしてここに？」

麻耶の声が店舗に響いた。

「ほら、やっぱり・・・」

「ははは・・・ズバリ的中だな」

胡桃は占いを一時中断して、麻耶とこの店について話をしていた。

「どう？ この店！ 探すの苦労したんだ」

「胡桃さんが占いをしてるんですか？」

「そうよ。私がやっているのは陰陽術と風水術と占星術を複合してお客さんの今抱えている問題や未来のためのアドバイスなどをしてるのよ」

「ね、あたしも見て下さいよ！」

「んー、そうしたいのも山々だけど・・・ちょっと問題がね・・・」

「どーかしたんですか？」

「なんか占いの調子が悪いのよ。あ、イカサマってわけじゃないのよ。何か気の流れというか何か妨害してるみたいで上手く占いができないでいるのよ。だから今ちよつと中断してるの。ごめんね」

「それって何かの前兆とかですかね？」

「んーどうなんだろう。他の似たような術師が強い能力を使ってるときは干渉しあって、こういうことが起こることがあるんだけど、この街にいる陰陽師ってあたしだけのはずなんだよね」

そこへ祐樹と一瀬が合流した。

「何話してんの？ 占い？」

「違う違う！ 占いができないって話」

「はあく？ 占いができない？ 何だ結局へっばこ陰陽師なんじゃねえーか。この開運グッズも力があるか微妙だな・・・ゴフツ！！」

祐樹の腹部へ胡桃の見事な肘鉄がクリーンヒットした。

「こいつ、営業妨害で訴えるよ！ こっちには大きなバックがいるんだからね。それを忘れんなよ、バカが！」

久しぶりに見る胡桃の本性に一瀬も麻耶も少々引き気味だった。その場へとある人物がやってきた。

「オオ！ ユウキクンデハアリマセンカ？ ソレト、デイヴァイナ

アーデハアリマセンカ！ サツキハ、ミテクレテサンキューデス！」

「デイヴァイナアー？」

「占い師の英訳版だよ」

「ミナサンモ、ウラナツテモラッタノデスカ？」

「いや、それがまだなんですよ。どうも今は開店休業らしいです」

一瀬はジェノス先生の発言に対して的確な言葉で返答した。

「ソウデスカ・・・ソレハザンネンデス。ソレデハ、ワタシハハイスクールデシゴトガノコツテマスノデ、シツレイシマス」

ジェノス先生はそう言うスタスタと人混みの中に消えていった。それと同時に胡桃から質問が飛んできた。

「あの片言の外人風日系人は誰？」

「ジェノス先生っていう臨時の先生。何でもフリーの傭兵なんだと」

「ふーん・・・」

「何だ？　なんか気になんのか？」

「別に・・・」

「で、占いはいつできるんだ？」

「わかんない。妨害されてるのが何なのかを突き止めないとどうしようもないかもね。はあく、売り上げがた落ちだわ・・・」

胡桃の言った妨害という言葉に何か感じたのか、一瀬は今朝起きた祐樹を狙ったと思われる事件のあらましを胡桃に説明した。

「なるほどね。ルビーアイ絡みつてことになるのかしら・・・？」

「わかりません。けど、あのジェノスっていう先生もあからさまに怪しすぎます」

「胡桃さん。ジェノス先生を占ったとき何か気付いたこととかありますか？」

「んー、あんまり個人的なことは言いたくないんだけど、事が事だからね・・・。あの先生を見たときはそんな特別変なもの見えなかったわ。ただ一つを除いて」

「何だよ、それ」

「黒装束の人影よ。未来の出来事で見えたんだけど、あの人近い内に必ずその黒装束の人影に遭遇するわ」

「なんかさ、余計訳分からなくなっただけねえ？」

「確かに・・・」

何かに振り回されているような、そんな違和感に祐樹達は支配されていた。新手の敵なのか？　それとも別の何かなのか？　しかし確かに身の回りで何かが始めているのは確かだ。祐樹達はしばらくこの妙な違和感に支配され続けるのであった。

一方で、スラム街近郊に集結した警視庁捜査一課特別捜査室特別特攻隊の部隊は銃器を下げて、頭にはヘルメット、体には特殊な防弾チョッキのような対能力者用のスーツを身に付けている。ちなみに、ここにいるのは非能力者と能力者が混合した状態の編成になっている。非能力者は基本的には基地局で機材のチェックや操作、無線連絡、増援部隊の連絡などを担っている。能力者は、武装して現地に突入していく。能力者によっては基地局に残り、敵の能力の分析や居場所を探す探知系の仕事をしてもらうことになっている。

「いいか！ 敵は子供二人。焦って飛び掛る必要はないが、能力は未知数だ。スラム街が制圧されたという情報が本当なら、想像を超える力の持ち主だ。ヤバイと思ったたら即座に撤退すること！ いいな！」

「はい！」

室長の松原も現地に突入する人員の一人だ。現場を指揮する権限を持っている。皆無線は耳に付ける小型の物で、耳のところにあるボタンを押せば会話ができるようになってる。

「上原。お前はここに残り、後方支援を頼む」

「室長！ 大丈夫ですよね・・・？」

「当たり前だ！ 俺を誰だと思ってやがる！ そんな心配より、ちゃんと仕事しろよ！」

「はい！」

各部隊が配置に就く。

「よし、準備はいいな？ 行くぞ！」

「おー！！！！」

松原の掛け声と突入部隊の叫び声を聞きながら上原巡査部長は、  
室長の無事を祈って仕事に取り組み始めた。

## 第二話 中等部編く未知の力く

占いができそうにないと判断した陰陽師の土御門胡桃は、占いは店仕舞いにして陰陽グッズの販売に集中することにした。祐樹はこの陰陽グッズには色々と言文をつけていたが、土御門胡桃は詐欺紛いのグッズは絶対に売ることにはできないのだ。それにはさつき話に出てきた胡桃の後ろにいる大きなバックがそれを許さないからなのである。

つまり、ここにあるグッズは本物の陰陽グッズであり、グッズとは言うてはいるが本当に陰陽師によって念の籠められた商品ばかりなのであり、真正銘の陰陽師推薦の商品なのである。こういう商品はなかなか近場では手に入りにくい。まして、本物の陰陽師に出会うことすら大変なことなのに、その陰陽師自身が売り子としてグッズを販売している。これは非常に稀であることは言うまでもない。というより、むしろ信頼面で多少偽りがあるのでは？ という疑問すら出てくるほどだ。一般人の意識からではどーしてもそういう不審感は働くだろう。そこで胡桃は一つ手を打ったのだ。

それがなんと『反世界政府勢力総帥公認の陰陽師』という一文だった。そう、彼女が言う大きなバックとは『反世界政府勢力総帥』のことだったのだ。

ここで一般知識である。『反世界政府勢力』という一般的なイメージは革命派と呼ばれる『世界政府』と対になる正式な組織なのである。そのため、世の中の一般常識としてこの勢力は認知されており、世界政府もまたより良い世界創りのために存在価値有りと認められている勢力なのである。

その勢力組織の総帥の公認を得ているという大々的な宣伝は、一般市民は全く疑うことがなかった。

「うんうん。占いができなくてもグッズの売れ行きは上々のようね。

「キャハッ！」

満面の笑顔を浮かべている胡桃を傍から見ている祐樹は予想以上に客達があのかさまのようなグッズに手を伸ばして、お金を支払っている光景が信じられないという表情で店の外で立っていた。ちなみに店の外にいるのは、胡桃に店から追い出されたからなのであるのだが……。

「わからん。何故あんなモンがどんどん売れていくんだ？　なあ、何でだ？　一瀬？」

「そりゃ、反世界政府勢力総帥の公認なら売れて当然だよな？　麻耶」

「そうね。胡桃さん考えたわね……」

「だから！　何でなんだよ！？」

「こいつ、ここまで世間に疎かったか？」

「一瀬君……祐樹はバカだから、一から十まで教えてあげないと俺はバカじゃねえー！」

「あープラス、アホだったわね」

「グフツ！　ふ、増えた……」

「祐樹な。反世界政府勢力の総帥って知ってるか？　って聞いても無駄か……」

「ふん！　自慢じゃないが全く知らん！」

「強くなりたいたいんだろ？　なら知らないといけないこともある。それが世界情勢だ。ジエノス先生がよく言ってるだろ？」

「嘘！？　そんなこと言ってたのか？　俺には全く別の言葉にしか聞こえてこなかったからなあ……」

「はあ、全く……。いいか？　反世界政府勢力の総帥ってのはな、世界のトップスリーの権力を持つてる内の一人なんだよ。しかもその強さも世界の五本の指に入る程のな」

「な、何いー！？　マジかよー！？」

「これ一応、一般常識レベルだからな、祐樹」

一瀬は説明していながら祐樹のバカさ加減によく今まで付いて来られたものだなあーと自分を自分で褒めていた。

次に麻耶が説明を加えた。

「んで、よく聞きなさいよ！ その総帥ってのが女性なのよ。名前とかは非公開なんだけど噂じゃー凄い綺麗な人らしいって！」

「女！？ でっていうか、噂じゃー何か信じられん！」

「あー、頑固！ 今度胡桃さんに聞いてみなさいよ！」

「なあ、話を戻していいか？」

一瀬は外れかかった車輪を元のレールの上に乗せた。

「でだな、その総帥が女性っていうのと、強さ・美貌を兼ね備えてるっていう面で一般市民に人気が広まってるとんだよ」

「んなら、嘘言っても同じじゃね？」

「虚言で『総帥推薦』とか言ったりとかか？ まあーそれ無いな。何せ『反世界政府勢力の総帥』という看板自体が相当な権力があるからな。関係ない奴がおいそれと使えないようになってるんだよ。勝手に使えばもちろん組織に宣戦布告したと見なされるからな」

「急に怖えー話になったな」

「だから、ここのグッズは信用できるっていうのがみんなわかって買ってるんだよ。以上、わかったか？」

「ああ、納得」

「ねえねえ！」

「何？ どうかした？」

「胡桃さんがお店手伝って欲しいんだって！ ちょっとだけお給料ももらえるって」

「マジで！？」

「あ、祐樹は店前で宣伝してるだけでいいってさ。どうせお金の計算できないでしょ？」

「うっ！ 気付いてやがったか、アイツ・・・」

「じゃーお店手伝うわよ！」

こうして夜が更けるまで、祐樹達は胡桃の店で幸運グッズの販売の手伝いをするようになった。

時刻は少し遡り、特別特攻隊が侵攻しているスラム街では異様な街の静けさに隊員達の緊張が肌で感じれる程、緊迫していた。それを感じ取った室長の松原は、何気なくタバコを取り出し、侵攻中にも関わらず、タバコを銜え、その場で吸い始めた。その様子を見た隊員達は何が起きたのかと騒然とした。

「そう堅くなるな。気楽に行け。そんなに気を張っていると簡単に居場所が見つかったらまずいぞ」

松原は隊員達を落ち着かせるためにタバコを吸いだしたのだ。当然だ。周りは廃墟となったスラム街と何者かと戦って亡くなったと見られる遺体が辺りに沢山あったからだ。戦争を知らない世代には少々キツイ現場かもしれない。

その時、松原に無線が入った。

『現在、目標と見られる建物の五〇〇メートル地点に到着しました』

基地局でGPSによって現在地と敵の本拠地を知らせていた。そもそも敵の本拠地は突入する前からわかっていた。何故なら、その建物だけ全くと言っていいほど無傷であり、尚且つ妙な結界に建物

が包まれていたからだ。最初松原は籠城戦か？ と考えたが、建物に立て籠もる理由が見つからなかった。全く、敵の能力といい、謎が多すぎる。そのため松原は予め、敵の本拠地の建物の半径五〇〇メートル周囲に逃走されないよう結界を準備することにし、残りのメンバーで少数精鋭の突入部隊を編成した。

選ばれた精鋭は、室長兼隊長の松原、属性能力者二人、医療能力者一人というフォーマンセルの突入交戦部隊となった。

「よし、それじゃ行くとするか」

「……はい……」

松原を含めた四人は、明らかに籠城していると思われる建物に近づいていた。その理由として、廃墟となっているスラム街の中で唯一、破損のない建物。そして見た目でもわかる薄緑色の結界だった。その建物こそ以前、白堂刹那一味が拠点を置いていた建物であり、中は広い空間になっている。恐らく集会場などの用途で使われていたのだろう。その建物の前に差し掛かったとき無線が入った。

「隊長！ そのすぐ傍の建物の中に生命反応が二つあるのを確認しました」

「よし、わかった」

松原は建物の壁を触って、この結界がどの種の結界なのか確認した。

（壁に触れたってことは外敵用の結界ではなさそうだな・・・）

建物の壁面を見渡していると、中に通じていると思われる扉を見つけた。その扉は何故だか半開きの状態で、中の様子は見えそうで見えない状態の開き具合だった。松原達は、その扉に近づき中の

様子を見た。そこには遺体は数体確認できたが、肝心の子供は目視できなかった。

「行くぞ……」

「……はい……」「」

松原達は小声で確認し、一気に建物の中に入入した。中は外から見るよりも広く感じた。松原達は丁度その空間の真ん中に位置している場所に立っていた。松原達は辺りを見渡す……が、子供の気配がしない。直ぐ様耳に付けている無線のボタンを押し、現在位置と敵と見られる子供の居場所を確認した。すると……

『気をつけてください！　すぐ近くにいます！！』

「！！」

松原は驚いた。松原が立っている前方には何かの祭壇なのかわからないが、かなりの段差がある舞台のような場所があったのだ。そしてそこに人影が見えた。

「こんにちは。貴方達はこの街の住人ではなさそうですね。やっぱり皆殺しをしなければ、こうやって外部から人がやってくるんだね。上手くいったかな？」

「サイ、悪い癖よ。雑魚共を殺した程度で天狗になるのはどーなのかしら？」

「そんなことないよ、ミラ。ボクだってイライラしてたんだ。皆が皆、同じ答えしか返さないし、何より言葉が通じない。ちゃんと日本語は勉強してきたつもりだったんだけど。あ！　あの人達には通じるかな？」

「聞いてみたら？」

そんな会話を聞いていた松原達はその声の幼さと会話の内容に驚いていた。確かに子供が占領したとは聞いていたが、今までどこかで俄かに信じていなかった部分があったのだらう。しかし目の前では武器を持った子供が確かにいる。暗がりでもようやく目が慣れてきた頃、相手の姿がようやく拝めるようになってきた。「サイ」と呼ばれている男の子は、髪が金髪のパーマでも充てたかのような髪で服装は金持ちのお坊ちゃんという感じの服装だった。一方で「ミラ」と呼ばれている女の子の方も姿はほとんど男の子の方と一緒にだった。ただ服装はこちらもフランス人形のような服装をしていた。

「戦闘の用意だけはしておけ・・・」

松原は背後にいる部下三人に小声で指示した。そして松原は隊から数歩前進し、サイとミラに話しかけた。

「ちょっと話を聞きたいんだが・・・その前にタバコ吸ってもいいかい？」

背後にいる部下三人は松原の言った言葉に対して、ズッコケをこましそうになった。未知なる敵との最初の会話がそれかい！ みたいな突っ込みを入れたくなっていた。

「いいですよ。ここ広いし、別に禁煙しないといけないような場所でもないですし」

「あたしの方には煙を飛ばさないでよ。服に臭い付いちゃうと困るもん」

「はははっ、わかった、注意する。では、失礼して」

松原はタバコを銜え、ライターで火を点けた。なんでもない作業だったが、部下三人は酷く緊張していた。松原がタバコの煙を出口

に向かって吐き出す。

「でだ、早速質問なんだが、スラム街の連中を襲撃したのは君達でいいんだな？」

「うん、そうだよ」

「何が目的なんだい？」

「刹那さんを探してるんだ」

「刹那？ 白堂刹那のことか？」

「なんだあ！ おじさん知ってるんだ！ そうだよ、それで今どこにいるの？」

「白堂の奴なら死んだよ。白い石膏のようになってな」

「……………」

「ほら、やっぱり他の奴等と同じ答えしか返ってこないじゃないの。こいつも殺す？」

ミラの言葉に一瞬だが松原達は緊張感が高まった。

「ちよつと待って、ミラ。おじさん、刹那さんの死体を見たの？」

「ああ。俺は刑事だからな。ここの紛争は俺達の管轄だ」

「じゃー誰が刹那さんを殺したのか知ってるんだね？」

「何？」

「僕達はね、本当は刹那さんを殺すために組織から派遣されてきたんだけど、対象の刹那さんが殺されてるなんてのは想定外でさ。だから今度は標的を変えて刹那さんを殺した奴を殺そうと思うんだ。

「どうかな、ミラ？」

「うん、いいんじゃない」

「だからさ、おじさん。刹那さんを殺した奴を教えてよ。これから殺しに行くからさ」

松原は吸っていたタバコの煙を肺いっぱい吸い込んで、溜め息

混じりに煙を吐き出した。

「そりゃー無理な相談だ。今は個人情報も厳しいんでね。おいそれと教えることなんざ出来ねえーのよ。悪いな」

「そっか。じゃー無理にでも聞き出しちゃおうかな」

サイは笑顔でそう言うと担いでいた不思議な形をした刀身の剣を舞台の床に突き刺した。

「タウラス！ 潰せ！！」

サイがそう叫ぶと刀身にはめ込まれた下から二番目の宝玉が一つ輝き出し、それと同時に松原達の前にも煙と共に何か巨大なものが現れた。煙の中からは巨大な黄金の牛が姿を現し、明らかにこちらに対して敵意を向けている。

「こりゃーちよつち予想外な展開だなあ。おい！ 迎撃態勢できてるか！？」

巨大な黄金の牛を見た直後、直ぐ様松原は背後の部下に対して迎撃の準備の確認を取った。啞然としていた部下達だったが、松原の声で我に返り、直ぐに銃火器を武装し、巨大な黄金の牛に照準を合わせていた。

「試しにやってみるか！ やれ！ 一斉射撃開始！！」

松原は後退し、銃火器を手に再び前線へと戻っていった。彼等が手にしている銃火器は弾丸などは装填しているわけではなく、魔術の力を応用した魔科学によって生み出された武器である。放たれる砲弾は、主に無属性のエネルギー弾であり、当たれば小型プラスチック

ツク爆弾並みの威力のある爆発が起きるのが特徴である。またこの銃器は使用者によつて攻撃性能が変わる特殊仕様であり、炎の属性を身に纏っている者が自分のオーラをブレンドさせて砲弾として放てば、炎の属性のエネルギー弾となつて攻撃力がプラスされて放たれるのだ。

そしてそのエネルギーを作り出しているのが、銃火器の下部に装填されている筒状の『魔管』と呼ばれる中に銃液という特殊な液体が入っており、この液体がエネルギーを生み出している。松原はその銃火器の中でもショットガン系の銃火器を片手にタバコを吸っていた。

「ウオオオオオオオオー!!!」

体中に銃火器による攻撃を受けているタウラスは、エネルギー弾を跳ね返すように体を振るっていた。

「ありやいや、効いちゃいなあ。これじゃ、余計に興奮させるだけか……」

直ぐ様松原は、後方の部下達に手で指示し、タウラスへの攻撃をやめさせた。そして素早く松原は後方へと下がり、部下達に作戦の手順を話した。内容はこうだった。

まず、銃火器による攻撃は無意味なので、銃火器に装填されている『魔管』を取り外し、中身の銃液を攻撃円陣と封印円陣のそれぞれの中心に流す。この銃液のエネルギーを使い、さらに円陣による効果上昇機能を利用してそれぞれ部下の特性に合った攻撃をすること。但し、攻撃をするのは、状況の判断で見極めること。タウラスという相手はそれほど手に負えないくらい大きく凶暴だと松原は判断した。松原の部下もバカではない。この隊に入るのに特殊な訓練は多くやってきただろうし、戦場にだって赴いたこともあるだろう。

何より、松原が選んだ精鋭ということもあり、戦いになれば息は自然とピッタリと合うようになるのだ。

煙幕でタウラスがこちらを認識するより早く、その作戦を素早く部下達に伝え、松原はまた前線に戻りタバコを吸い始めた。

(さてと……、そろそろタバコの臭いで俺の居場所が特定できた頃だろうな……)

松原がそう考えていると激しい遠吠えと共に煙幕の中からタウラスが鋭い角を松原に向けて突撃してきた。

「おー！ 元気の良いことだ」

松原はショットガンを構えずタバコを吸っている。するとタウラスの体中に銀色に光る鎖が数本現れ、タウラスの巨体と地面を縛ることに成功した。

「余裕で構え過ぎですよ！ 隊長！」

「お前らを信用してる証だよ。続けてやれ」

「人使いが荒いですよ！」

松原の後方にいる部下の内一人が、呪縛術を発動させ、タウラスの動きを止めたのだった。そして身動きの取れないタウラスに対して更なる攻撃を加える。

「燃え尽きる！ フレアバースト！！」

もう一人の部下が攻撃術式を発動させ、タウラスの周囲を分厚い炎で囲み、最終的には炎の柱がそこには出現していた。

タウラスの呻き声が聞こえる中、松原は炎の柱の中へと単身突っ

込んで行った。

「悪いーな、両方の目玉頂くぜ」

松原はタウラスの両目に向けてショットガンを近距離で発砲した。それと共にタウラスはさらに激しい呻き声を上げる。体がいくら頑丈でも眼球が頑丈な生き物はいない。松原は躊躇うことなくタウラスから両目の視界を奪った。

炎の柱から出てきた松原は、タウラスを召喚した子供らを見ていた。サイとミラの二人は今目の前で起こっている出来事に対してただ楽しそうに笑っていた。まるで飯事をしているかのように。

「ちっ！」

松原は子供らの様子を見て舌打ちをした。今でも炎の柱の中ではタウラスが呻き声を上げている。まだタウラスは抵抗している様だった。だが燃え尽きるのも時間の問題だろうと松原は考えていると、鎖が切れる音がした。それも一本ではない。次々と金属を強く叩くような甲高い音が鳴っていた。

「そ、そんな、普通の鎖じゃないのに・・・」

松原の後方にいる部下の耳にもその音が届いたのだろう。それはそうだ。相手はただの猛獣ではない。召喚獣である。特殊な能力も備えているだろう。このまま焼け死ぬということは恐らくないだろうと思っていたが、まさか特殊な呪縛術を馬鹿力だけで引き千切ろうとしているのだ。発動させた術者からしたら、とても信じられないことだった。

「しゃーないねえ。銃液使っても防げないってことはもうこの手し

かないじゃないの……。久方振りだが、やりますかねえ」

松原は持っていたショットガンを後方の部下達の方に投げ、精神を集中させ始めた。すると松原の体から薄っすらと赤い闘気が現れ始めた。それを見た部下の一人が言った。

「あれって、まさか……。隊長の鬼の闘気……。『霸道鬼気』じゃ……」

「それって本気の隊長が見られるってことか？」

「あ、ああ。そうだと思う」

そしてとうとう最後の鎖が引き千切られ、両目の視界を奪われたタウラスはタバコの臭いを頼りに松原に突進して行った。突撃してくるタウラスを他所に、松原はゆっくりと目を開け、タウラスの姿を目視した。

怒り狂ったような吼え方をしているタウラスはその鋭い角を松原に向かつて一直線に進んだ。松原はタウラスが傍に迫ってくるまで一歩も動かずに自然体でずっとタウラスを目視していた。そして、タウラスと松原が交わるとき、松原はタウラスの両角を両手でそれぞれ掴み、タウラスの頭部を片足で押さえ、もう片足で踏ん張っていた。

「もう一回言っとくぜ。悪いーな。頂くぜ、この両角」

その瞬間、松原はタウラスの両方の角を無理やりへし折ったのだ。タウラスの頭部からは無理やり角をへし折られたため、夥しい量の流血がしていた。だがタウラスは、怯むどころか、さらに攻撃を仕掛けようと上体を上げ、前足に全体重を乗せた攻撃を松原に仕掛けた。

爆発のような地響きが周囲に広がり、建物がグラグラと揺れる。

しかし松原は無事だった。というよりも、タウラスの全体重を乗せた攻撃を軽々と片手で受け止めていたのである。

「何があっても退く事をしないその心意気……感服する。じゃーな」

松原は空いている片手に握り拳を作りタウラスにその拳を放った。

『霸道鬼気・一発』

猛スピードのトラックが追突するかのような物凄い衝撃波がタウラスの腹部を襲った。あまりの威力でタウラスの体は体内から破裂したかのような姿になり、サイやミラのいる祭壇の方へと吹っ飛ばされていった。松原は一瞬、サイとミラのことを気にかけてが、全く心配はいらなかった。どうやら最初からサイとミラの正面には頑丈な結界が張ってあったようで、タウラスの血液などが飛び散って、ようやく結界の存在がわかるようになった。

「やるなあ！ おじさん、凄く凄く！！」

サイは楽しそうにしており、妙な形をした剣を地面から引き抜いた。すると肉塊となったタウラスの死骸が血液一滴残さず綺麗さっぱりとその場から消えてしまった。まるで今までの出来事が夢のように、そして何もなかったかのように……。

その様子を見ていた松原の部下達は言葉を失っていた。そして松原は怒りとも感じ取れるような無表情な顔をしていた。

「サイ、はしゃぎ過ぎ。あんな弱い星獣、刹那さんでも簡単に滅していたと思うけど」

「そうかもね。タウラスは力しか脳がない星獣だからね」

松原はサイとミラの話を書細かに聞いて分析していた。聞いたことの無い用語・見たことも聞いたこともない術、聞き取れる情報はあるだけ多く手にする必要がある。例えば自分が死ぬようなことがあるうとも。松原にはその覚悟ができていた。

(セイジュウ・・・？ タウラスとかいう黄金の牛のことが・・・。クソ！ まだ鍵が足りんな・・・)

サイとミラは松原がそんなことを考えているなど全く気付かず会話をしていた。

「さてと、次はカプリコーンでいってみようかな」

「カプリコーンね。ま、さつきよりはマシかもしれないけど、さつさとライブラを使った方が早くない？」

「いいじゃん・・・そうだ！ カプリコーンに守護星の力を加えて悪魔にしちゃえばもっと面白いことになるじゃん！！」

「全く・・・遊びが好きなんだから・・・」

サイはそう自分で決めると再び松原達に意識を戻した。

「ごめんね、おじさん。戦い、再開しよっか？」

サイは再び妙な形をした剣を地面に突き刺し、松原の目の前に再び召喚獣が現れた。しかし、さつきとは違い、召喚獣に黒い霧のようなオーラが纏った巨大な山羊・・・。

(こりゃー、西洋の悪魔か？)

巨大な山羊の闇のオーラは建物の中をどんどんと飲み込んでいく。



その時、松原はある光景を目の当たりにした。天井から落ちてきたはずの瓦礫が映像の逆再生のように元に戻っていき、最終的には穴の空いた天井は元の綺麗な天井に戻っていた。松原はその様子とさつきから戦いに参加していないミラと呼ばれている少女に注目していた。

「なるほどな……。なんとなくカラクリが見えてきたな……」

ふらつく松原。立っているのがやつとなのдарう。後方にいた部下達は爆発の影響で気を失っているようだ。とりあえず命が無事だということに一安心した。その時、目の前にいた闇の悪魔が瞬時に姿を消した。

「これ以上はあのおじさんがもたないね。審判の前に死んじゃったら意味ないしね」

「でも驚いたわね。悪魔化したカプリコーンのスレンを受けて人の形を保ってるなんて……。一瞬ヤバイと思ったわよ」

「実はボクも。さて次こそライブラで審判を受けてもらうよ」

サイは抜き出した剣を再び刺し『ライブラ』と叫んだ。それと同時に松原の周りに妙な薄透明の空間が生まれ、ふらつく松原の両手首・両足首・腰・首と枷が付けられ、薄透明の壁に張り付けにされた。

「はあ、今度は……。なんだってんだ……。？」

松原が張り付けにされている丁度正面に天秤を持った女神像が出現した。

「さーて、おじさん。真実の答えを求める質問をこれからするよ。嘘ついたら痛いことになるから覚悟してね」

(質問だと・・・?)

「じゃー最初の質問。さっき聞いたけど、おじさんは『白堂刹那』って名前の人は知ってる?」

「・・・ああ、知っている」

松原が答えると女神像の持っている天秤が左に僅かだが傾いた。

「じゃーこの調子で行こうね。次の質問、白堂刹那さんはどこにいるの?」

「何でそんなことを聞く? ここに居た連中なら知っている内容のはずだぞ?」

「質問を質問で返すのはなし。おじさんはただ正確な答えを答えればいいの」

「・・・死んだよ」

松原が再び質問に答えると女神像の持っている天秤が左に傾いた。

「サイ。やっぱり本当みたいね」

「おじさん。刹那さんの死体は見たって言ってたよね?」

「ああ」

女神像の天秤は再び左に傾いた。

「おじさんって案外素直なんだね。じゃー誰が刹那さんを殺したの? あの刹那さんを殺せる人間はそうそういないはずだけどね」

松原は初めてサイからの質問に沈黙をした。松原は誰が刹那を殺したのかは知っている。しかし当然のことながら言うことはできない

い。言えば戦いの矛先が大河祐樹達に向かってしまう。

「どうしたの？ おじさん。やっぱり教えられない？」

「・・・意地でも言うか！ クソガキ共め！」

女神像の天秤は今度は右に動いた。それと同じ瞬間に体に打撃によるダメージが加えられた。

「ぐああっ！」

「あゝあ、質問に素直に答えないからだよ。やっぱり知ってるんだね。じゃーじっくり聞き出そう  
としますかな」

（クソ！ 体に力が入らねえ……。こりゃーマジでヤバイかもな  
・・・）

その後から松原への拷問のような審判は延々と続いていったのであった。

## 第二話 中等部編／占星術師

夜が更け、店仕舞いをして帰宅しようとする祐樹達一行。だが胡桃だけはやっぱり占いの妨害が気になっているようでその場を離れようとしなかった。

「そんなに気になんのかよ？」

「当たり前でしょ！？ 幸運グッズだけじゃ意味ないの！ 当たる占いがあって初めて幸運グッズが活きるってもんでしょうが！」

「がめついなあ」

「は？ 何か言った？」

「いや、なんでもない」

一瀬が二人の会話に参加してきた。

「じゃあ土御門さんはこれからどーするんです？ 妨害の要因を探すんですか？」

「そーなるかもね。占いがないと商売七割減って感じだから早く真相を究明しないと！」

さらに麻耶が三人の会話に参加してきた。

「じゃーさ、これから皆でその妨害の真相究明をしない？」

「何で俺等がわざわざ手伝わないといけないんだよ？」

「祐樹。胡桃さんには沢山の借りがあるんじゃないの？」

「うっ！ そ、それは・・・確かに・・・」

「はい、決まり！」

「強引だなあ、麻耶は・・・」

流石の一瀬も麻耶の強引さには付いていけなかった。

「で、その妨害ってどの辺で起こってんの？」

「あっちの方角から凄い力を感じるのよね」

「その方角って、あのスラム街がある場所じゃないですか？」

「うん。確かにそうだな」

スラム街。

白堂刹那と戦った地。それだけに彼等にとってそこは特別な場所の一つになっていた。

「スラム街からってなるとなんかありそうな気がするの俺の気のせいかな？」

「珍しいな、祐樹。俺も同じことを考えてた」

「あたしも」

「っていうか、完全に行く気満々みたいね。まあーしょうがないか。

お店手伝ってもらったし」

「んじゃ、行ってみるか！」

こうして祐樹達は再びスラム街へと赴くことになった。そこでは大変な出来事が起きていることも知らずに……。

体中に打撃を受け、体中の血液が滴り落ちている状態の松原は言葉を発することすら難しい状態にあった。

「おじさーん！ 大丈夫うー？」

「大丈夫って感じじゃないと思うけど……。普通ならミンチになつてる状態なのに、よくもま、ここまで耐えられるわね」

「頑丈だねえ、おじさん！ 見直しちゃったよ！ でも話してくれないと困るんだよなあ」

「……………」

松原はすでに息絶え絶えの状態で返答もままならない状態だった。

「ん、話してくれなくなっちゃうと今のライブラの能力は意味なくなっちゃうよなあ。しょうがない。悪魔化させて、脳を直接イジって見ちゃおうか」

「私、グロいのか嫌いなんだけど……」

「だって、聞き出すにはもう脳から情報を取り出すしかないでしょ？」

「はあー、じゃー目を瞑ってるから早くしてよ」

「はいはい」

サイは突き刺した剣を握り、守護星の力を注ぎ込んだ。すると、天秤を持った女神像が見る見る黒い闇に包まれ、姿が露になった頃にはすでに女神像は女神と呼べるような姿ではなく全くの異形の姿へと変貌していた。さながら、解体マシンのようなアームが数本あり、頭部の顔の表情は鬼や悪魔のような表情に変貌していた。そんな姿になった旧女神像は、枷に繋がれている松原に徐々に近づいていった。

「さあー、やつちやええー！」

サイのはしゃぐ声が発せられた瞬間、祭壇から見て左側の壁の大部分が一気に建物の内側に向かって吹き飛んできた。

「おっさーん！！ 松原のおっさーん！！！！！」

破壊された壁の残骸と共に何人かの者が建物内に侵入してきたのだ。そう、侵入してきたのは、外の武装警備隊に話を聞いて飛び込んできた、祐樹達だった。

「何？ どーしたのよ、サイ！？」

「・・・わかんない」

建物内に堂々と侵入した祐樹は、直ぐ様松原を発見し助けに向かおうとしたが、一瀬に止められ、先に松原に迫る謎の黒い像を破壊する様に指示された。

「てめえー！ 松原のおっさんから離れやがれえー！！」

祐樹は瞬時に松原とライブラの間に入り、渾身の電撃による拳をライブラに殴りつけた。祐樹に殴られたライブラは粉々に粉碎され、半透明のフィールドも消え、松原の体に付けられていた枷も姿を消した。倒れる松原を祐樹が支え、そこに一瀬と麻耶、胡桃もやってきた。

胡桃が松原の容態を速やかに確認すると、他にも傷を負っている隊員の下へと松原を移送することにした。その場に残った祐樹と一瀬は祭壇の方を向き、サイとミラと対峙していた。一瀬がちらつと自分達が入ってきた壁を見るとそこにはもう穴など空いておらず、何もなかったと言わんばかりの無傷の壁がそこにはあった。

（あの外側から見えた蛍光色の結界は、この自己修正型の結界なんだな）

「気をつけるよ、祐樹。松原さんが相手になってあの状態だ・・・。子供だと思って油断しない方がいい」

「わかってんよ、一瀬。たださつきからイライラしてしょうがないんだよなあ……」

「あまり感情を高ぶらせるな。ルビーアイは厳禁だぞ」  
「それもわかってんよ」

祐樹は既に『雷帝モード』と化しており、自分の闘気に電撃を纏っている状態である。今朝、高坂蓮次から指摘された点をきちんと反省して今の状態の戦闘態勢になっている。

祭壇から粉々に粉碎されたライブラを見て、サイは剣を引き抜いた。当然、今までと同じように粉碎されたライブラは跡形も無く姿を消した。

「お兄ちゃん達は何？ どの人？ そのおじさんの知り合いみたいだけど……」

「白堂刹那を殺した奴を探してるんだってな！？ 探す手間が省けたな。俺達がそうだよ」

「!!」

「へえ、わざわざ出向いてくれるなんて、本当に日本人は心配りができてるわね」

「そう、お兄ちゃん達が刹那さんを……ね。なら、お兄ちゃん達には死んでもらわないといけないね!」

サイがそう言うと剣を再び突き刺し、今度は『ジェミニ』と叫んだ。サイが叫ぶと同時に、祐樹と一瀬の二人の前に二人の騎士が姿を現した。片手には剣。もう片手には盾が装備され、体には鎧が装着されていた。

「まずは力試しだよ。そのジェミニにどれだけ対抗できるか見てあげるよ」

「ちっ！ クソ生意気なガキだな。でどうするよ？ こっちは丸腰

だぜ？」

「闘気を収束させて剣の形にすればいいだろ。それで対抗はできる」

「簡単に言うよな。俺、そういうのあまり器用じゃねえーんだけど・

・・・」

「そんなこと言ってる暇は無さそうだぞ」

二人の騎士は、同時に祐樹・一瀬に侵攻を始めた。祐樹と一瀬は左右二手に分かれて戦うことにした。そこには一つの意図があった。この二人の騎士はまったく同じ姿をしているため、自分の敵である目標を見失わないようにすることと、どんな能力を持っているか分からない状況下で、相手の敵も同時に目視できる方が都合が良かったのだ。

祐樹は闘気で剣を具現化させ、電撃を帯びさせて戦っていた。一方、一瀬は普段は矢として使っている物質を刀に具現化させて対応していた。そんな中で、後方の方では、麻耶と胡桃が松原の容態を確認するとともに、相手の正体と術式の解析が行なわれていた。

松原の容態を確認していた胡桃が松原の体を見てあることに気づいた。

「松原さん・・・あなた・・・」

「ほう、君は知っていたか・・・。まあ黙っていてくれないか？」  
「・・・」

「胡桃さん！ 松原さんの容態はどうですか？」

「大丈夫よ。随分と丈夫な体の持ち主みたいね。特殊な闘気も関係してるのかもしれないけど、そんなことより、あの子供達が扱う術について教えてくれませんか？」

「恐らく、日本政府の増援より君達が来る確率が高いと思って、あの程度の個人的な分析はしてみたが、はっきりはわからんぞ？」

「問題ありません。見たところ、陰陽師である私とあの子供達は酷似した力を持っている様に思います」

「陰陽師か・・・ならわかるかもしれんな。ではキーワードを言うぞ」

「はい」

「黄道十二星座の星獣、術者の守護星の力、男の方しかわからんが、闇に関連してるものだ。後、奴等が持っている特殊形の剣を抜き刺しをすると星獣が出現したり消失したりする・・・」

「・・・なるほど、十分です」

「わかつたんですか？」

「ええ、十中八九奴らは『占星術師』よ」

「せ、占星術師って星占いをする占い師のことですよね？」

「うん、そう。だけど、奴らが使っているのは古代の占星術の一族の術式のようなね。現代の占星術は色んな文化が混ざってしまっているんだけど、あれは純粋な占星術のようなのよね」

「そんなことも分かりますか？」

「これでも一流の陰陽師ですからね。それより、奴らのあの剣、見える？」

「はい。何か変な形をした物ともう一方は普通の剣に見えますけど・・・？」

「恐らくあれが、占星術師の武装道具なのよ。あの変な形をした剣なんだけど、たぶんあれ『北斗七星』を模した剣よ。あっちの女が持っているのは、これも憶測だけど『南十字星』を模した剣だと思っ」

「でも占星術って戦闘に向いているとか、戦闘術がある・・・なんて聞いたことないですよ？」

「私もない。でも星座を使った魔術があるくらいだから、星座を利用した術を使うのは魔術師より占星術師の方が向いているようにも思っのよね。でもそれが戦略の糸口になると思っのよ」

「糸口？」

「ちよつとこつちへ・・・」

胡桃は松原を挟むように麻耶を移動させた。傍から見たらそれは松原の応急措置をしているように見えるだろう。もちろんそれを考えてのことなのだが。

胡桃と麻耶は頭が交差するぐらい近く近寄り、小声で話を始めた。

「術師って名が付く職業が扱う術っていうのは、魔術で言うところの魔方陣がベースになっているのよ。魔方陣って円陣じゃない？」

「ええ、そうですね」

「何で円陣なのかっていうと、力を循環させて力を増幅させるためのよ。それは錬金術でも一緒なのよ」

「！ ということは術師って円陣を使用して力を行使することが一般的ってことですか？」

「一般的というかそれが基本原則なのよ。力の作用原則ってやつね。この世界の原則は絶対的な存在だから例外はないと思うの」

「はあ」

「つまりね、奴らの術も円陣の作用で力を行使してるんじゃないかってことなのよ。ここからじゃわからないけど、あの高い舞台のような祭壇を陣取っているのもそれを隠すためかもしれない」

「なるほど……。でもあそこに行くにはどうしたらいいんですか？ 結界が張られているんですよね？」

「麻耶ちゃん。魔甲は持つてる？」

「ええ、いつも持ち歩いてますけど」

「前に確認させてもらったんだけど、麻耶ちゃんの持っている魔甲は魔術だけじゃなく術と呼ばれるものを全て弾くレアなタイプだったのよ。だからあそこに行けるのは結界をすり抜けられる麻耶ちゃんだけなの」

「つまり私が特攻部隊ってことですね？」

「うん。で、麻耶ちゃんには結界に入ったらやってもらいたいことがあるの。よく聞いてね？」

「はい！」

一瀬はジェミニの一体と交戦している最中、余裕があるかぎり相手の能力を分析し、周囲をよく観察していた。その際に胡桃と麻耶が何やら策を講じようとしている雰囲気を感じていた。

（たしかに、敵の目がこちらに向いている以上、意表を突いた攻撃ができるのは彼女らだな。それに戦いの形勢を変えるためには、意表を突いた攻撃でないとダメだ！ ならやることは決まったな）

一瀬は祐樹と視線を合わせ、アイコンタクトと僅かなジェスチャーで自分達が囷になることを祐樹に伝えた。

祐樹はその意思を完璧に受け取っていた。正に普段の祐樹からは予想しえない行動である。何故バカ・アホと呼ばれている祐樹がこんなことを一瀬とのやりとりで出来たのかというと、それは、単に一瀬との共同戦線が過去に非常に多かったからである。それもあってか、お互いが同時に交戦しているときは、お互いの意思疎通は普段の会話よりも正確に伝わっているのだ。

（へっ！ 敵の目をこっちに注目させんなら、ちよっくらド派手な大技でも出してみっか！）

「一瀬！ そっちの敵こっちに飛ばせ！！」

「ったく、いきなり無茶な注文はやめてくれよな！」

一瀬は両手に持っていた二刀剣をジェミニに投げつけ、盾でガードさせた瞬間にジェミニの間合いに入り込み、盾もろ共掌底でジェミニを祐樹の方にいるジェミニに向けて突き飛ばした。

「よっしゃ！ バッチタイミング！！」

祐樹は一瀬と交戦していたジェミニがこちらへ飛んできたタイミ

ングを見計らって、雷撃の力をさらに開放させ、目の前にいるジェミニに対して吹き飛ばすような攻撃を加えた。お互い吹き飛んだジェミニは空中でぶつかるような形になった。その瞬間だった。

「『雷光鎖錠』!!」

二人のジェミニに帯電した祐樹の電撃が正に電気鎖のようになつて空中に縛り上げられている状態になった。

「まだまだー!!」

祐樹は空中を滑走するとジェミニの上部に到達し、先ほどとは比べ物にならない大きさになっている雷撃の刀身をハンマーのように振り下ろした。

激しい光と雷撃音が周囲に広がり、地面に二人の騎士は勢いよく落下し、動かなくなった。

「へっ!! どうだ!!」

その一部始終を見ていたサイは興奮していた。力試しと言っていたが、あのジェミニを簡単に粉碎したあの力に魅入られていた。

「ちょっと、サイ。負けちゃってるんだけど?」

「.....」

「サイ?」

「凄い! 凄いよ!! お兄ちゃん!!」

サイはそう言つと剣を握んだ。

「バーサーカ化したジェミニと戦わせなくなっちゃったよ」

「はあ、また遊びが出たわね・・・」

すると動かなくなった二人の騎士から黒い闇が煙のように立ち昇ってきた。

「第二幕、ジエミニ、バーサーカバージュンとの戦いを始めてね！」

「あ？ 何言ってるんだ？ あのガキは？」

「祐樹！ 注意しろ！！ 黒い霧のようなものが出始めてから、そいつらのステータスが数段と上がったぞ！！」

「げっ！ マジか！？」

動き始めた二人の黒衣の騎士は激しい叫び声と闇の衣を纏って、祐樹・一瀬に再び牙を剥き始めた。

胡桃と麻耶は本丸特攻のための作戦を立て、祭壇からは見えないように魔甲を装備した。松原はというと胡桃と麻耶からは応急措置などは一切してもらえずにいた。その理由としては、松原の体には特殊なアイテムが埋め込まれていたからだ。それが体を癒していたのだった。だが、ライブラから受けたダメージだけは癒されずに残っていた。どうやらライブラの攻撃は呪いの効果があるのでないのか？ と胡桃から言われていた。そのため、今後の戦闘に松原は参戦できなくなっていた。

「気をつけるよ・・・」

「怪我人は静かにしててくださいね。一応式神置いていくんで。出なさい『<sup>ディアソ</sup>癒神』」

人型の紙から女神のような女性の式神が現れ、松原の体を癒しの結界に包んでいく。

「それじゃ、麻耶ちゃん。作戦通りに行くわよ。いいわね？」  
「はい……」

麻耶は装備した魔甲に触れた。相手の不意を突く攻撃のチャンスは一度だけ、麻耶は心臓の高鳴りを必死に静めていた。

「大丈夫です！ 行けます!!」  
「よし！ じゃー、行くわよ……散!!」

胡桃の合図と共に麻耶も動き出す。二人は建物内を左右に分かれて両側から祭壇へと攻めようとしていた。その動きをいち早く察知したのは一瀬だった。

(動いたか……、ちよつと強引だが補助の必要がありそうだな)

一瀬はそう考えると黒衣の騎士の一瞬の間を見つけ、建物の天井近くまで滑走した。天井高くまで到達した一瀬は下を向くと同時に矢を射る構えをとった。

「祐樹！ 全力で避ける!!」

「は？ お、お前そこから何を!？」

「霊弓を具現化させ、矢を雨のように降らせる……」  
『レインアロ  
ー!!』

「ば、俺まで巻き添えかよ!!」

一瀬が放った矢の雨は建物の主に祐樹と一瀬と黒衣の騎士が戦っていたフィールド全体に隙間無く降り注いだ。一本一本に威力があったのか、辺りは地面に突き刺さった矢の影響で砂埃が充満していた。

一瀬は地に足を付けると指を鳴らして地面に刺さった矢を消した。但し、敵に刺さったものは除いてだが。

一方、被害を被った祐樹はというと、電子を球状に高速回転させて即席の電撃結界を作って矢を弾いていた。

「お、お前な、一瞬気付くのが遅れてたら俺も串刺しだったぞ！」

「しょうがないだろ？ 目晦ましが必要だったんだから」

「目晦まし？ 何で？」

祐樹と一瀬が話していると祭壇の方から凄まじい電撃音が発せられていた。思わず祐樹はその方向を振り向くと、胡桃が単語帳の切れ端を使ってサイとミラに攻撃を加えていた。しかし、目の前の結界によってそれは阻まれていた。

「無駄だよ、お姉ちゃん。この結界は攻撃性を感知すると自然と発生するものでね。一度発生したらどんな攻撃も防いでくれるんだよ。目晦ましによる不意打ちの攻撃を狙ってたなら残念だけど、失策だったね」

「くっ、どうかしらね・・・」

「諦めが悪いなあ。バーサーカ！ 何やってんだよ！ さっさとその矢を引き抜いて戦いを再開しなよ！」

サイの言葉で一瀬の放った矢を体から無理やり引き抜いた黒衣の騎士二人は、再び祐樹と一瀬に攻撃を仕掛けようとしていた。

「んで、また戦うってか？ 正直ダメージ与えても無反応ってのが気味が悪いんだよなあ。あんま戦いたくねえな」

「そんなことを言ってる場合か。とにかく敵を引き付けるのが俺達の仕事だ」

「でも奇襲は失敗しただろうが」



「そつちの『南十字星』の方が結界を作り出していたみたいね。それとやっぱり円陣が描かれているわね。予想はズバリの中つてところかしら」

胡桃は単語帳の切れ端を取り出し、舞台に描かれている円陣に貼り付けて円陣を破壊した。

「これであいつ等は占星術を使えないはず」

円陣を破壊した後すぐに祐樹と一瀬も舞台上がってきて胡桃と麻耶と合流した。そして二人にこの術式について説明をした。

この術式は、まず結界の方は普段は祭壇への入り口を物理的な壁として封じていたが、術師に攻撃性のあるものが迫ってくるとそつちの結界を術師前面の結界へと変換して使っていたというものだった。そして星獣を扱っていた方の術師は、剣を必ず同じ箇所突き刺していたという松原の発言から、そこに円陣がある可能性がある」と判断し、鎧の魔装を装備できる麻耶に特攻部隊を任せたといいだ。

「一瀬、気付いてたか？」

「ここまで詳しくは知らなかったけど、おおよその見当はついてたから目晦ましのあの攻撃をやったんだよ。囿は俺等だけじゃなく土御門さんも囿役をしてるんじゃないかなってね」

「お前、あの戦いの中でそこまで考えてたのか？ あの黒騎士結構強かったよな？」

「攻撃パターンがあるのを気付いてからはそう大変ではなかったかな」

「パターン・・・あったのかよ・・・」

「まだまだ洞察力が足りないな、祐樹は」

「じゃーこの剣はあいつ等に近づかせないようにしないとね」



「わかったわ」

「麻耶ちゃん気をつけて！ 女の方の力はどんなのかわからないわ  
！！」

「わかってます！」

麻耶は敵の的にならないように素早く動き回っている。

「麻耶は攻撃させねえー！」

祐樹が電撃を用いてミラを攻撃しようとしたが。

「ミラの邪魔はさせないよ」

サイがミラと祐樹の間に入り迎撃をした。ミラを中心に黒い闇のオーラが竜巻のように囲んだ。

「見えた」

ミラがそう言うとその方向に指を指した。指先がキラリと光った瞬間、動き回っていた麻耶に異変が起きた。鎧がバラバラに破壊されたのだ。だがそれだけではなく、衝撃も相当あったのか、麻耶は吹き飛ばされて建物の壁に激突した。あまりの威力で壁には穴が空くほどで、麻耶はぴくりとも動かなくなってしまった。

「麻耶ちゃん！」

「麻耶！」

「ちつくしよー！ このガキがあー！」

祐樹は電撃の剣をサイに向かって振り下ろそうとしたが、サイの体には黒いオーラによる鎧のように纏っていた。そのためか、祐樹

の電撃の剣は簡単に受け止められてしまった。

「星獣を扱う術師が星獣より弱いとでも思ったの？」

サイの周囲からさらに黒いオーラが出現し、祐樹すらも包んでいくようにしていた。

「やべっ!」

「もう遅いよ。『冥王翔覇』」

サイが発した黒いオーラが渦のように祐樹を襲った。その竜巻のような渦は祐樹の体をも貫いた。

「がはっ!」

口から吐血する祐樹。間違いなく内蔵を潰されたのだろう。

あの祐樹が呆気ない程簡単にやられてしまったことが一瀬と胡桃にとって驚くべき事実だった。

「なるほどね。白堂刹那を殺すためにやってきたか……。冗談かと思っただけどあの歳であれだけの術を使えるとなるとちょっとヤバイわね」

「そうですね。何か案はありますか？」

「私の式神を困にっと思っただけど、あの子等結構頭良いみたいなのよね。同じことが通じるとは到底思えないのよ。それに女の方の能力は最悪だわ」

「え？」

「あれはおそらく守護星は金星。能力は破壊よ」

「破壊？ それはどっという範囲のことをいってるんですか？」

「物であればバラバラになる。生き物であれば致命傷を受ける」

「死ぬことはないってことですか？」  
「そうだけど、致命傷を受ければもうあの男の方の能力からは逃げられない」

一瀬と胡桃は何か解決策がないかどうか考えながらサイとミラに対峙している。

「それじゃ、次はどっちからにする？」

「ヤバイですね・・・」

「ヤバイわね・・・」

じりじりと一瀬達とサイとミラとの距離が縮まっていく。そのときミラに異変が起きた。

「ぎゃあああああああああああ—————」

「！！！！！！！！」

「！！ミラ！！ どうした!？」

「「?」?」?」

一瀬達もそうだが、サイが突然ミラが悲鳴を上げた理由がわからなかった。が、サイは直ぐにミラの背中が刃物で切り刻まれたかのような無数の傷から出血しているのが見えた。

「ミラ！！ ! ? な、なんだ? か、体がう、動かない・・・」

サイはまるで時間が止まったかのように体が固まってしまった。同様にミラの方は倒れ掛かっているが、まるで糸人形のように斜めにぶら下がっているかのような姿勢になっている。

「何? 何がどうなってんのよ? 一瀬君?」

「わかりません。頭の中が真っ白ですよ」

その時、何者かの気配を一瀬達は祭壇の方から感じた。

（誰だ？ あそこには誰もいなかったはずだ）

一瀬達は一度祭壇に立っていた。そのときは誰もいなかったことを確認している。今現在、自分達が置かれている状況がわからずパニックになりかけている二人にそのとある人物が声をかけてきた。

「あれあれ？ オレってグッドタイミングで出てきちゃった感じ？」

「あれ？ この声どこかで・・・？」

そして祭壇の暗がりから一人の人物が姿を現したのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5641v/>

---

緋眼戦記～ルビーアイズ～

2011年11月27日04時12分発行